
漂流者はハイブリッドな現役将校～オヒトヨシナシニゾコナイ～

金貨の騎士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漂流者はハイブリッドな現役将校〱オヒトヨシナシニゾコナイ〱

【Nコード】

N0721X

【作者名】

金貨の騎士

【あらすじ】

海鳴市にやって来た次元漂流者は魔法と質量兵器の両方を使用する異世界の軍人で、しかも……。作者はこれが初挑戦な初投稿です。どうかよろしくおねがいします。

プロローグ（前書き）

はじめまして、金貨の騎士です。よろしくお願いします。

ブローグ

緊急報告

第374特別調査地区の探査中、突発的次元崩壊が発生。崩壊そのものは元々危惧されていたため特に問題は無く、調査地区の全技術データも回収に成功。

しかし、

その次元崩壊に1名、この部隊の指揮をとっていた《ファイア・レイガード》が巻き込まれ、行方不明となった。

彼の損失は第374地区の全技術データ消滅以上の痛手になるため、目下捜索中である。

ベルファイア連邦政府軍第七師団L大隊副隊長リオル・ヴェルシア
中佐・記

第一話 流れ着いた将校（前書き）

いざ参らん本編に。

第一話 流れ着いた将校

第97管理外世界・地球・海鳴市・18：28

???side

・・・えーと、とりあえず落ち着け俺、冷静になれ俺。ゆっくりでいいから自分の事を思い出せ俺。

名前はフィア・レイガード、二十歳、職業軍人、独身。よし、完璧。とりあえず・・・

むくり

起きよう。しかし、全身ズキズキするが特に・・・

「・・・頭痛ええ。酒でも飲んだっけ？」

そうだ、さっきまでみんなで居酒屋にでも行つて、そのまま路上で眠ってしまったんだ。そうに違いない。断じて、亜空間での任務中に事故って時空をジャンプしたわけ・・・。

《フィア・・・あなたが参加した飲み会は2年前が最後ですよ?》

「なんか俺が寂しい奴みたいな言い方だけど忙しかっただけだから！？リリア！！」

フィーアは左腕に着けている腕時計のようなサポートAI兼通信機のリリアに叫ぶ。

「・・・リリア、いったい何が起きたんだ？」

《あなたがだいたい覚えてる通りだと思いますが？》

「構わない、状況を報告せよ。」

幾分口調をまじめにし、そう言った途端にリリアの口調もそれに応じるがごとく変化した。

《報告。 民歴56年5月。 我々第七師団I大隊は大隊長の指揮のもと、突如亜空間に出現した第374特別調査地区の探査及び技術データの回収の任務を遂行。 しかし、その終盤で危惧されていた時空崩壊が発生、部下の退避を優先した指揮官1名が脱出に失敗、現在行方不明扱いとなっております。》

「その行方不明者ってのは当然・・・」

《あなたのことです。》

あちゃあ、と額を抑えながらフィアは呻いた。そっぴや新兵が時空崩壊から逃げ遅れていて、そいつ助けてたら自分は間に合わなかったんだっけ……

「一応確認するが、俺の頑張りは報われたのかい？」

特にその新兵と、自分の副官であり親友のリオルが気になる……

《死人0、行方不明者もあなただけ、というのが今の私の最後の記録です。》

「お前が言っならそうなんだろ……まあ少し気が楽になったよ。」

さて、これからどうしようか。通信機兼サポートAIのリリアに軍から通信が無いところを考えると、エライ遠くに跳ばされたんだろっうな……。このリリアは、銀河一個分離れた場所からリアルタイムで通信できる程高性能なのだ。そのリリアに通信が一個も無いということとは、リリアが圏外になるほど遠い場所にいるか、軍に捨てられたかの二択しかないのである。後者にいたっては、自分は即行でクビになるほど上官にも部下にも嫌われてないので無い筈。ていうか後者だったら泣く……。

「まあ、何にせよここがどんな世界だか調べるのが先決かな？」

《そうですね、この世界の生活水準もさほど低く無さそうなので、サバイバルすることも無いでしょう。まずはこの世界の知識を集めましょうか。》

「よし！そうと決まれば早そつk《警戒！！9時方向！！》・・・え？」

あゝ、俺そういえば路上にいたんだった。周り見りやリリアの言う通り割と文明高そうじゃん。てことは、自分の世界にもあった車輪が4つ付いたアレ・・・

ドキヤア！！

・・・いつまでもいたら自動車が通るに決まっているじゃん・・・もつとも、“この程度”で俺は死なないのだが・・・。

キリモミ状態で空中を舞うさなか、フィーアは視界の端になんとも言えない表情で、こちらを眺めている金髪の少女と犬耳の女が見えた気がしたが、ハッキリ確認する前にこの世界に來た時同様“また”顔面から地面に落ち、視界がブラックアウトするのだった。

《・・・先が思いやられます。》

第一話 流れ着いた将校（後書き）

感想、指摘お待ちします。

プロフィール（前書き）

オリ主フィーアの紹介

プロフィール

名前 フィーア・レイガード

年齢 満二十歳

性別 男

職業 軍人（階級については黙秘）

容姿 赤みのある茶髪で瞳は紺色。

顔はよく優男呼ばわりされる程度に整っている。
やや長身長屈。

服装 故郷の軍隊の軍服と士官帽を装着。旧日本軍の軍服に似ている。

全体的に黒色で、控え目に金色の装飾とボタンが付いている。
フィーアの軍服はカスタムされており上着の裾が膝まで伸びている。

性格 基本お人好しだが、悪知恵がよく働くため抜け目が無い。

戦術 剣と銃と魔法と気功術

第二話 邂逅

フエイトside

魔導士フエイト・テストロッサは困惑していた。

母親の指示のもと、ジュエルシードというロストロギアを集めるため海鳴市を一通り探索し、ひとまず今日は切り上げ、自宅兼拠点にしているマンションへの帰り道の途中に倒れている男を見つけてしまったのである。その男がただの人間なら別に対処に困ることなかったのだが、

《マスター、あの男から魔力反応があります。》

自らの愛機バルディッシュのこの一言によりどうするべきか悩むハメになったのである。

（この管理外世界に魔法文化は無かった筈・・・ということとは、あの人は時空管理局員か次元漂流者のどちらか・・・）

今、自分たちが管理局と接触するのは非常にまずい。しかしこのまま放置した場合、後々敵として脅威になるかもしれない。何より漂流者だった場合、彼女の性格上ほっとくこともできなかった。

この葛藤としばらく戦い続けること数分、

「 エイト、フェイトったら!! 」

「 っ!! 、ごめんアルフどうしたの? 」

使い魔のアルフが声をかけてきた・・・というかさっきから呼んでいたらしい。集中しすぎて聞こえなかったようである。

「 アイツ目が覚めたみたいだよ。 」

そう言われアルフの指さした方を見ると、確かに男はむくりと起き上っていた。改めてよく見てみると、その姿は全身黒色で物々しく、腰には日本刀とレイピアが合わさったような剣がぶら下げられていた。

確実にこの世界の人間じゃ無い。

フェイトはそう結論付け、一層警戒しつつ観察することにした。

「・・・なんか一人で喋りだしたね。（・・・変な人。）」

「いや、左腕に付いてる何かに話しかけてるみたいだよ。」

「アルフ、見えるの？」

「フェイトがバルディッシュと話してる時もあんな感じだからなんとなく・・・。」

「・・・。」

痛い人に見えたあの人と同じようなことを自分がやってることを知って、少し凹んだフェイトだった。

そうやって落ち込んで顔を俯かせている間に、男は何かを決心したように立ち上がったのだが・・・

「・・・あつ。」

ドキヤア！！

アルフの間の抜けた声と、すさまじい音が聴こえたので顔を上げて視線を向けると、男が自動車に派手に撥ねられていた。途中、目が合ってしまったが気にする前に男は顔面から地面に落ちた。

突然のことに二人はパニックに陥った。

「ど、どど、どうしようアルフ!？」

「落ち着くんだフェイト!!え」と、こういう時は911だから117とかいう場所に電話するんだ!! あれ?なんか違う気がする・・。
」

「私、電話なんて持ってないよ!!」

「あゝもう!!どうすりゃいいんだい!？」

二人がカオスの極地に陥るその間際、それをくいとめる存在が現れた。

「痛えな畜生!!いきなり過ぎんだろぅが!!何が『警戒九時方向』だ!!」

《気づけなかったうえに避けなかったことが恥ずかしいのは解りますが私に当たらないで下さい。》

何事も無かった（？）ようにピンピンしながら混乱の元凶がもう復活していた。

フェイトとアルフはもう啞然とするしかなかったのだが、もう彼を無視できない存在であり状況であると覚悟した。なぜなら・・・

「さて、余計な会話はここま《凶星だったんですね？》やかましい！！・・・おい、その二人。少し一緒に会話するのと口封じされるの、どっちがいい？」

元凶^{フィニア}がこっちに向かってそんなことを言ってきたので二人は再び混乱しそうになった。

第三話 自己紹介（前書き）

文才が欲しい……。グダグダ感が無くならない……。

第三話 自己紹介

フイア side

・・・我ながらこれはないわ r z。いきなりこんな小さい子に「お話と口封じ」の二択って俺なに言っちゃてんだろう・・・。あゝあ、金髪の子はなんか武器的な物を出すし、犬耳は牙剥いてるよゝゝ。リリアの言う通り、いつも軽く“避けれる”筈のモノにまるで反応できなかったことに動揺していたのもあるが、それを差し引いてもさっきのセリフはナイ・・・。

《大人げない、みにつちい、最低、チンピラ、外道・・・》

「それ以上言わないでくれ、トドメになる・・・。えゝと二人とも今は本気にしないでくれ。お話したいのは本音だが、危害を加える気は無い。」

《おまけにロリコンですか。》

「今のでなんでそうなる!？」

「・・・あの、すみません。先に一つ訊いていいですか？」

「おつとすまなかつた、いいぞ何だ？」

「・・・あなたは時空管理局の人ですか？」

若干緊張を含んだ口調でそう訊いてきた。今ので分かったことが四つ。

1つ。時空管理局なる組織が存在する。

2つ。彼女の口調からして、これは俺が敵か味方かを確かめる質問。

3つ。つまり時空管理局とそれに敵対する勢力がある。

4つ。彼女らはそのどちらかに所属してる。

（て、とこだろう。さて一番無難な返事は・・・）

「とりあえず、俺は時空管理局がなんなのか知らない。」

馬鹿正直に答えることにした。どうやらその選択は正解だったよう
で彼女の緊張が少し解けたようだ。

フエイトside

（最初の「口封じ」発言にはすごい焦ったけどそれほど敵意は持っていないみたいだし、何より時空管理局ではないなら大丈夫かな？）

バルディッシュを起動したままだがフエイトはそう思い、少し警戒を緩めた。

「じゃあ、あなたは次元漂流者なんですね？」

「それもなんなのかわからないが別世界から流れてきたのは認める。」

それを聞いてとりあえず一安心することにした。次元漂流者なら自分達と特に敵対する理由もないはずなので戦うこともないだろう。

（でもコイツ十分胡散臭いし、怪しい奴だと思っよ？変な格好してるし・・・）

念話でアルフが話しかけてきた。確かに目の前の人はこの世界でも自分達の世界感覚からしても異質な格好である。軍服で堂々と帯剣してる人なんて尚更初めて見た。

・・・確かにもう少し素性を訊いたほうがいいかもしれない。と思
った矢先、

《変質者の称号もGETしたようですね》

「もしかして八つ当たりしたこと本気で怒ってるのか！？あと犬女、
前半二つはともかく最後の一つは撤回しやがれ！！」

「アタシは狼だ！！って、アンタ今の念話聴こえたのかい！？」

「ん？思念通信でなく念話って言うのかそれ？」

《通信用電波使ってないと思ったら魔力しか使わない別物のようです。
一応通信波は拾えますが。》

いきなり会話に乱入してきた。しかも知らない言葉が出てきた。

「思念通信？」

「俺達の世界の通信手段のひとつだ。ていうかいい加減にお互い名

前くらい名乗らないか？」

そつえばまだお互いの名前すら知らなかった。

「それもそうですね。私はフェイト・テストロッサ、魔導士です。」

「フェイト！？」

まさかすんなり名乗るとは思わなかったのでアルフは驚いた。

「多分この人は見た目ほど悪い人じゃないから大丈夫だよ。」

見た目は悪いってことかよ…とフィーアが落ち込んだのは内緒である。

「フェイトがそう言うなら……。アタシはフェイトの使い魔のアルフだよ。さっきも言ったけど犬じゃなくて狼だからね？」

「それと、私のデバイスのバルディッシュです。」

《よろしく願います。》

ファイア side

金髪の女の子がフェイトで、犬耳…じゃなくて狼耳がアルフで、武器がバルディッシュか。バルディッシュにもリリアと同じように自我を持ってるようだな……。うちの子に影響されなきゃいいが…。

「次は俺たちの番だな。ベルファイア連邦政府軍、L大隊所属ファイア・レイガードだ。」

《先行試作型装着式オペレーター、No12、リリアです。》

全く聞き慣れない単語が出てきたせいかフェイトとアルフはポカンとしていた。

「…えっと、リリアはデバイスじゃ無いの？」

フェイトがリリアに尋ねた。

《あなたの言うデバイスとは、そのバルディッシュが基準と考えていいですか？》

コクリと頷いて返す。

《デバイスは器はともかく原動力や構成、発生させる物のほとんどが魔法や魔力のようで、しかも武器としての役割が多いようですね。ですが私の場合、デバイスと違い魔法より機械の割合が多めで造られています。なにより私はどちらかというとコンピューターや通信機のような役割が仕事です。》

「これ俺達の世界では普通なんだけど聞いたことない？あとベルフィーア連邦も？」

「全然」

「・・・こりゃ本格的に帰れないことを覚悟しなきゃいけないかもしれない。この技術は自分の世界だけでなく全“同盟世界”での常識なのだ。ここは完全に自分の知らない世界で、知らない宇宙のようだ。」

「まあ、いいや。とりあえずよろしくな。」

「うん。よろしく。」

・・・そういえば、いつのまにかタメ口きかれとる。

こうして魔導士と将校の邂逅はようやく一段落した。

第四話 職業は軍人です

フイーア side

自己紹介も終わり一息つき、立ち話もなんなので歩きながら話すことにした。その途中、時空管理局と次元漂流者の説明をもらった。正直、時空管理局とは組織的に接触したくないし、自分の世界と接触させるとヤバイ気がする……。なんて考えてたら、

「ところでさあ。」

「ん？」

「フイーアの世界ってどんなとこなんだい？」

アルフが尋ねてきたきた。

軍事関係ならともかく故郷についてなら幾分喋ってもいいか……。

「俺の世界はな、リリアを見てだいたい分かると思うけど科学と魔法が共存してる世界なんだよ。魔法を科学で補い、科学を魔法で補う。俺達自身は“魔道科学”って呼んでるけど。おかげで周囲と比べて随分と出鱈目な世界になってるけどな……。」

「へえ、なんかよく解ないけどすごいんだね。」

よく解なかったのかい・・・

「・・・そして、その出鱈目な技術を使って時空管理局のように別世界と交流がある。」

「え!?!」

今の発言でフエイトも会話に参加してきた。さっきの管理局の説明を聞く限り、別世界：もとい別次元世界だっけか?と交流する技術を有するのは管理局のあるミッドチルダとごくごく一部だけ、みに言ってたがここまで驚くことかね?

「そんなにすごいのか?」

「少なくとも私たちは管理外世界や認知外世界でそういう世界は聴いたことがないよ。」

「うーん、ますます管理局と会いたくないな・・・。」

接触したくないのにあっちが興味を示すようなことのオンパレードじゃねえか……。

「どうして？ 私たちはともかくフィーアは次元漂流者だから保護してもらえば……。」

“私たちはともかく” ってやっぱこの二人、管理局とトラブル抱えてるのか……

《そのあとがマズイのです。》

「リリア……？」

しばらく喋ってないからいるの忘れてたよ……。

《仮に保護してもらって私達の世界、ベルフィーア連邦に送ってもらったとしてその後、時空管理局が連邦をほっとくとは思えないのです。》

「さっきも言ったが俺達の世界の技術の半分は科学だ。それに比例して軍事力も半分以上が科学兵器……管理局が根絶を目指す質量兵器ってやつなんだよ。交流のある同盟世界にいたっては、連邦

のおかげで魔法の存在は知ってても馴染まないで科学一筋の世界もあるくらいだ。」

もし連邦がこの地球みたいに魔法文化がなければ管理外世界ということで片付くのだが、生憎かなりの高水準で普及している。十中八九接触を目論むだろうがその半面、自らが否定する質量兵器も同じくらいの割合で存在している。管理局は間違いなく質量兵器、すなわち科学を捨てると言いかねない。そして連邦がそれに従うわけもない。最悪戦争に発展しかねない。

「つーわけで何かしら考えてからじゃない限り管理局とは会いたくない。」

「アンタも大変だねえ……。」

ただでさえ遭難中だったのに敵対勢力候補の存在って、もう胃が死ぬわ……。

「本当にこれからどうし

ん？」

《北部数キロ先に魔力反応を確認！！かなりの出力です！！》

リアの言う通りかなり大きな魔力を感じた。これは放置したらマ

ズイレベルだなオイ・・・。

「ッ！！フェイト！！」

「ジュエルシードだ・・・！！」

二人はコレの心当たりがあるみたいだな。

「おいフェイト、これはいったい何なんだ？」

「ごめん、説明できない・・・。とにかく私達はもう行かなきゃいけない。行くよアルフ！！」

「待つてよフェイト！！えっと・・・じゃあね、フィーア。とにかく頑張りなよ！！」

そう言つてフェイトは飛び去り、それを追うようにアルフも飛び立った。魔力光の光で二人が流れ星のようだったのは措いとして、フィーアはあまりの急展開にしばしポカンとしてしまった。別に二人が飛んだことには驚かなかったが、災害レベルの魔力反応の発生源に迷わず即効で向かつて行った二人に啞然としていた。

「大丈夫か？あの二人・・・。」

《発生直後程の出力はありませんが現在も反応は消失していません。》

そうか、だったら・・・

「行くか・・・。」

《あまり目立つ真似をすると管理局とやらと接触する可能性が増えるのでは？》

「ここが連邦の未開の地で、管理外とはいえ管理局の縄張な時点で接触は避けれないさ。それに、あんな子供をほっとくわけにもいかないだろ？」

またコイツ《ロリコン》とか言っただけからかっただけだが、あんな10歳にも満たない子供が危険な場所に行ったというのに軍人の自分がそれをほっとくなんて出来るわけないし、する気もない。

《あなたらしいですね。》

意外と普通に喋ってきた。

「そりゃどうも。ついでに言っとくが俺はロリコンじゃねえぞ?」

《知ってますよ。そして、あなたがお好きなことも。》

そして、リリアは改めて言う。

《ついて行きましょう、どこまでも。》

フィーアは短く、だが真剣に返す。

「感謝する。」

その日、海鳴の夜空に金色と朱色の流星を追うように黒い影が空を舞った。

第四話 職業は軍人です（後書き）

次回初戦闘描写。書けるかな…。

第五話 将校戦場に現る（前書き）

本格的な戦闘は次回になっちゃいました・・・

第五話 将校戦場に現る

アルフside

アタシの御主人様のフェイトは一流の魔導士で、なにより優しい傲慢の主だ。でもちよつと天然なところもあつて、なんだかんだ言つて年相応の女の子なんだと思う。それはいいことなんだろうけどやっぱり・・・

「今は勘弁してほしいよおおおおおおお！！」

アルフはそう絶叫しながらその傲慢の主、フェイトを抱えて爆走していた。なんでこんな状況になったか説明するため少々時間を戻す。

〈十分程前〉

「反応があつたのは、ここだね・・・。」

使用者の願望を歪めた形で叶えるといわれるロストログア、ジュエルシード。その反応を辿つて二人は山の方までやってきた。

（あの鬼ババにフェイトが酷いことされないうちにさっさと全部終

わらせないと・・・)

内心でフェイトの母親に毒づきながらも周囲に被害が出ないように結界を張りながらジュエルシードを探す。ところが違和感に気付いた。ふいに視線を向けるとフェイトが棒立ち状態で固まっていた。おまけに使い魔の自分は主の精神とリンクしているためフェイトの今の精神状態が分かるのだが、さっきから上の空というか呆けているというか、とにかくボケっとしていた。

「ちょっとフェイト、なにボくっとしてんだい。」

不審に思いながらフェイトの方にアルフは歩み寄る。

「フェイト！！いったいどうして・・・。」

そっから先は言葉が続かなかった。なぜならフェイトが見ているものをアルフも見たからである。

8つの目をギラつかせ、8つの足を蠢かす、“人間サイズ”になった蜘蛛の群れがそこにいた・・・

〈回想終了〉

そんなわけで、今アルフは目をグルグル回しながら顔を真っ青にして気絶したフェイトを抱えながら、ジューエルシードで巨大化した（種族的に繁栄したいとでも願ったらしい）蜘蛛の大群から全力で逃げていた・・・。

「ていうか何でそんなに足速いのさ！？ぎゃあああああああ！！」

飛びかかってきた一匹を必死に避ける。長い8つの足をゴキブリのごとく高速で動かしながら、使い魔のアルフとほぼ同等のスピードで蜘蛛は追いかけてきている。今すぐにでも結界を解き、そのまま空を飛んで逃げたいが、蜘蛛が外に被害を出すかもしれないので多分フェイトはそれをよしとしないだろう…。せめてなにかしら指示をくれればいいのだが当の本人はただいま絶賛失神中である。

「あゝもうつ！！お願いだからフェイト起きてええ！！」

「う・・・ううん・・・。」

「フェイト！！」

フェイトさんがロゲインしました。

「あれ？アルフおはよう。」

「寝ぼけてないでアレなんとかしておくれよ!!」

「え？（巨大蜘蛛の大群を見る）・・・キュウツ・・・。（ガクツ）

」

「ちよつとおおおおおおおお!!?」

フェイトさんがログアウトしました・・・。

巨大蜘蛛さんがログインしました。（ピヨーン）

シャアアアアアアアアアア!!

「来んなああああ!!」

もう駄目だと思ったその時、アルフでもフェイトでもない誰かの声が響いた。

「伏せっ!!」

アルフは反射的（本能とも言つ）に姿勢を低くした。その直後、頭上を青白い閃光が通り過ぎ、飛びかかってきた蜘蛛に直撃した。蜘蛛はそのまま吹き飛ばされ、ジュエルシードの効力がなくなり空中で霧散した。アルフは何が起きたか分からず、とりあえず後ろを振り向く。すると、さっきまで自分たちを追いかけてきた蜘蛛の群れが追跡の足を止めていた。まるでこちらを威嚇するように・・・。

「まさかホントに伏せつつって伏せるとは・・・。」

《結局、狼も犬科ですからね。》

声のした方、前を向くとそこには左手に銃身がやや長めのピストルを持ったファイアがいた。

「ア、アンタついてきたのかい！？ていうか封鎖結界はどうしたのさ！？？」

《私が解析して勝手に入口を作らせていただきました。今はちゃんと閉じてありますのでご安心を。》

「そんでアルフよ、このゲテモノ集団はなんだ？放射能でもぶちまけたのか？」

《全個体に魔力反応を確認。出力は分散して劣っていますが最初の反応物と同種のもです。ですが発生源である反応物は別の場所にいるようです》

「ややこしいから最初の反応物を『ターゲット1』とする。こいつらは『エネミー』として随時番号を追加、同時にお前は『ターゲット1』を探知しろ。」

《了解》

着々と話しを進めていくフィーア達にアルフは戸惑った。

「ちょっと、アンタら何する気だい!？」

「この騒動を静める。」

「ジュエルシードはホントに物騒なモノなんだよ!？」

「そんなのコレ見りゃ分かるさ。ついでにあのフザケタ出力でこの不安定具合・・・、災害どころか下手に暴走させりゃ世界滅亡クラスじゃねえか・・・。」

《直接破壊するのは危険なので制御して強制停止させましょう。》

フィーア達はアルフとフェイトがやろうとした『ジュエルシールド封印』とほとんど同じことをするつもりらしい。しかもこの二人（一人と一機）、よく考えると自分の張った結界にすんなり侵入してきたのだ。魔法の腕もそれなりなのかもしれない。なにより、あの蜘蛛の大群にはもう精神的にも本能的にも戦う気力が湧かなかった。フェイトにいたっては、まだ意識すら戻って無かった……。

「……じゃあ、任せるよ。」

結局フィーアとリリアに任せることにした。

「はいよ任せな。さて、単独の戦闘なんて本当にいつぶりだろう……。」

《し大隊の隊長になってからは誰かしら随伴してきましたからね。あなたの階級を考えると異常に少ない人数でしたが……。》

「上の連中が「戦果に見合わん」って言いながら無理やりよこした階級なもの。大尉以上のことはやりたくなかったのに書類仕事が増えたのなんの……。なにせよ、久々に遠慮せず殺らせてもらう。そろそろ索敵終わった？」

《完了しました。アルフさんが張った結界の中に『エネミー』が1く48体、周囲に展開中。さらに『ターゲット1』と思わしき反応が北東に確認されています。》

それを聞いたフィアは右手で剣をゆっくり引き抜き、口角を吊り上げ、獲物を見つけた肉食獣のような表情を浮かべた。アルフは場の空気が変化した気がした。

「数はさっきのを入れて50匹……。少々もの足りないが、これからの厄介事への準備運動だ……。せいぜい長引かせるよ……。」

今のフィアにフェイト達と出会った時の雰囲気は一切なく、そこには一匹の獣がいた。

《全『エネミー』、行動を開始しました。こちらに接近してきます。》

瞬間、獣が雄たけびを響かせた。

「交戦を開始する……。来るがいい虫けらども!!一匹残らず滅ぼしてくれる!!」

異世界からきた漆黒の魔獣が咆哮を上げ、戦場に踊り出た。

第五話 将校戦場に現る（後書き）

フィーアのセリフが厨二臭くなっちゃった・・・orz

第六話 前哨戦ナリ（前書き）

ぐあああああ戦闘描写が書けねええええええ！！

第六話 前哨戦ナリ

フエイトside

「あれ？アルフおはよう。」

「さつきとまるつきり同じセリフだね……。また気絶しないでよ。・・・？」

「気絶？・・・ッ！！」

言われてトラウマ確定のあの光景を思い出す。

「ア、アルフ！！蜘蛛は！？ジュエルシードはどうなったの！？」

「とにかく落ち着いて。そして蜘蛛共はホラ……。」

そう言つて横を指差す。視線をそちらに移した瞬間、壮絶な光景が目に入った。黒い影が大蜘蛛の群を相手に大暴れしていた。青白い閃光で撃ち抜き、鋭い斬撃を叩き込み、強烈な蹴りを喰らわせ、蜘蛛たちは黒い影により次々とその数を減らしていった。

《現在確認できるのは『エネミー』が8体と『ターゲット1』のみです。》

「フン、つまらん……。オラア!!その程度か!?!」

「……ファイア!?!」

自分のやってることに関わらせないため挨拶もそこそこに置いてきた筈の男、ファイアがいた。

「アルフ!!どうしてファイアがここにいるの!?!」

「どうやら付いてきたみたいでさ……。アタシの結果もアッサリこじ開けて、しかもコイツらをどうにかしてやるっていうから任せた……。」

「なんで!?!」

「だってフェイト起きないんだもん……。」

「……ごめん。て、そんな場合じゃ無いや!!コレは私たちがや

らないと・・・。」

「もう、終わるみたいだよ?」

「え?」

蜘蛛はもう3匹しかいなかった。完全にフィアに恐れをなしたように、蜘蛛共は怖気づいたようにジリジリと威嚇しながら後退していた。

《残りはこの『エネミー6、14、29』と『ターゲット1』のみです。》

「そんじゃ飽きたし、もう終わらせるか。」

瞬間フィアは駆け出す。蜘蛛が迎え撃つように上下に二匹、同時に跳びかかる。それにフィアは微塵も焦らず軽くジャンプし、足を狙ってきた一匹を避けながら銃弾を叩き込み、そのまま頭上に跳びかかってきた一匹を剣で貫いた。瞬く間に二匹は霧散した。

「ハイ、ラスト。」

振り向きざまに後ろから跳びかかってきた最後の一匹に回し蹴りを喰らわせ、宙を舞ったところに銃弾を放つ。青白い閃光、リニアガンの弾丸が蜘蛛に直撃し霧散させた。

（暴れ始めてから2分たつて無いと思うよ・・・？）

（す、すごい・・・。）

改めてフィアが軍人、兵士であることを認識した瞬間だった。

《『エネミー』の殲滅を確認、残るは『ターゲット1』のみです。》

「了解。おや？起きたのかフェイト。」

フィアはこっちに気づいて近寄ってきた。

「・・・フィア。なんでついてきたの？」

「俺の職業は軍人って言っただろ？こういう厄介事には首突っ込まなきゃ気がすまない体質なんだよ。」

「でも・・・。」

「ちよいタンマ、本命が来るらしい・・・。」

《巨大な魔力反応の接近を確認、『ターゲット1』です。》

「ッ！！バルディツシュ！！」

《Yes・sir》

フェイトはデバイス、バルディツシュを起動させた。アルフも戦闘態勢に入る。

「ん？そのまま休んでいいぞ？」

「そういうわけにもいかない・・・これは私たちがやらなきゃいけないんだ・・・。」

「・・・しょうがねえな。ただし、無理矢理にでも手伝わせてもらっぞ？」

「せつかくだし、手伝ってもらおうよ。ファイアってすごく強いみたいだしさ?」

「・・・分かった。」

アルフの言葉もあり、ファイア達にも手伝ってもらうことにした。自分のやってることに巻き込むのは本音を言つと躊躇うところがあるのだが、実際に先ほどのファイアの戦闘を見るかぎり、ファイアの戦闘技術は凄まじく高く、さらにアルフの結界に侵入できるほどの魔法の腕もあるので心強いものがある。そもそも、自分が気絶してる間に大蜘蛛の群を蹴散らしてもらった時点で今更な話なのかもしれない・・・。と、そこへファイアが話かけてきた。

「ところでフェイト、お前らあの物騒な魔力反応物を・・・壊してきたのか?」

「違うよ!!それにジュエルシードは無理矢理壊そうとしたら大変なことになるんだよ!?」

血相を変えて答えた。下手にジュエルシードに刺激を与えて暴走させた場合、次元震が発生し世界が崩壊することもあるのだ。当然そんな真似はしない。

「それじゃあ、そのジュエルシードとやらの壊す以外の止め方は知

「つてるんだな？」

「うん。」

「じゃあ、ジュエルシードはフェイトに任すわ。リリア、『ターゲット1』の情報は？」

《分析の結果、『エネミー』が一回り巨大化しただけでしかも動きが鈍いようです。しかし、魔力反応の発生源はコイツで間違いないようです。接触まであと3分です。》

「「うわぁ・・・」」

さっきの大蜘蛛達より大きいと聞き、フェイトとアルフは顔を青くした。そんな二人に苦笑いを浮かべながらフィーアは話を続ける。

「親玉とでも呼ぶか・・・。アルフ、結界を造れるなら相手の動きを縛る魔法とか使えるよな？」

「使えるけど？」

「即席の作戦だが、まずリリアが親玉が来る場所をピンポイントで

特定。アルフが魔法で動きを止め、俺が親玉を“半殺し”にする。魔法とダメージの二重拘束で動けないところをフェイトにジューエルシードの封印を直接やってもらう。それでいいか？」

ほとんど無駄がなく、お手軽な作戦だった。二人は即座に頷いた。それと同時にリリアの声が響く。

《『ターゲット1』接触まで1分かりました。アルフさん、座標イメージを思念通信…念話で送りますね。タイミングも私がお伝えします。》

「分かったよ。」

「私は？」

「俺達の後ろで待機。万が一、拘束する前に封印担当のフェイトが攻撃されるとこまる。」

《みなさん、来ましたよ。アルフさん、10秒後に指定した場所に魔法を。》

「え？どこにいらっしゃるだい？」

もう見えてもいい筈なのに親玉が一向に見当たらない。アルフは困惑した。

「いないじゃないk《8、7、6、…》ちょっとリリア？」

そんなアルフを余所にリリアはカウントを続けた。

《3、2、1、0！！今です！！》

「ああもうっ！！【チェーン・バインド！！】・・・って、ええ！？」

リリアの合図に若干疑いと戸惑いを浮かべながらアルフは拘束用の魔法を放った。しかし、リリアに抱いた不安は即座に杞憂に終わった。親玉は本当に現れた。“上から”。。。着地点とそのタイミングをリリアは完全に予測していた。そしてそのリリアの合図により放たれたアルフの魔法ま完璧に決まった。しかし、親玉の図体は伊達ではないらしく、無理矢理振りほどこうとしていた。

「ヤバイ！！このままじゃ、強引に解除されちまうよ！！」

「そのために俺がスタンバイしてんだよ。」

そんな光景を尻目にフィアは素早く、尚且つ柔らかく自分の剣を目前で振るう。すると剣が振るわれるたび光の線が引かれた。それを巧みに操り、みるみる内にフィアは剣で光輝く魔法陣を絵描き、完成させた。そして……。

「……魔剣ヴィルガロム、魔銃モード。」

そう唱えた瞬間、フィアの剣が黒い煙のようになったと思ったら即座に再度集合し、形を作った。ただ、フィアの右手には剣では無く、普通のよりこつくて銃身が長い黒い拳銃が握られていた。

「【バスカヴィル・ショット】！！」

黒い銃口から放たれたのは純粋な魔法弾。魔弾はフィアの描いた魔法陣を通過した途端、その魔力を激増させ10倍以上のサイズに巨大化した。弾丸から砲弾になった魔弾は、アルフの魔法にもかく親玉に無慈悲にも直撃した。凄まじい轟音をたて、爆炎が親玉を包んだ。

《『ターゲット1』の動きが停止しました。：いや、ちょっと待って下さい。『ターゲット1』の反応が消滅していきます！！』》

「マジで！？もしかして加減ミスった・・・！？」

「大丈夫だよフィア。ジュエルシールド本体が現れるだけだから。」

フェイトの言葉の通り親玉の姿は消え、そこにはひっくり返った常識的サイズの蜘蛛と、光り輝く蒼い宝玉があった。

「アレが、ジュエルシールド・・・。（リリア、こっそりデータとつとけ）。」

《（了解）》

「手伝ってくれてありがとう、フィア。あとは私に任せて。」

「おう。」

そう言いながらフェイトはジュエルシールドに向かっていく。そして・・・。

「ジュエルシールド、封印！！」

夜の大騒動はようやく終息を迎えた。

第六話 前哨戦ナリ（後書き）

やばいです・・・文がまとめれてる気がまったくしないです・・・

第七話 協力しましょうか（前書き）

ちよつと無理やり過ぎた…？

第七話 協力しましょうか

ファイア side

ほとんど化物退治になった魔力反応物：もといジュエルシード封印作業。その決着がつき、ようやく三人は一息ついていた。しかし、ファイアはフェイトたちと休みながらも思考にふけていた。

（このジュエルシードがヤバイ代物なのは解かるが、“この二人のこと”が分からん……。）

このジュエルシードはロストロギアと言って早い話、超危険物なのである。そしてこれの始末は先程の説明の通りだと、ファイア自身の見解は置いとくとして、この次元世界の警察組織である時空管理局とやらの役目らしい。百歩譲ってフェイト達が時空管理局に自主的に協力してると言うのなら、こんな若い年齢で危険なことをするのは無理やり納得したかもしれないが……。

「ところでフェイト、それ（ジュエルシード）どうするんだ？時空管理局にでも届けるのか？」

「えっと、その……それはちよつと……。」

さつきから時空管理局のこととなると歯切れが悪くなるこの二人。まあ、最初の方で管理局と会いたくないみたいなのを言ってたから薄々勘付いているが、フェイト達は管理局から見たら犯罪者予備軍、もしくは犯罪者になることをしているのかもしれない。だが、解せない。さつきからフェイトもアルフも無関係な人を極力巻き込まないようにしながら立ち回っている。そんな二人が自分自身悪いと思っていることを自ら進んでやるとは思えなかった。

「じゃあ、なんでこんなことしてるんだ？」

「それとも言えない……。」

話が進まねえ……。あ、そうだ（ニヤリ）。

「じゃあ、質問を変えるわ。時空管理局の常識は誰に教えてもらった？」

「?・・・母さんにとリニスに。」

「（誰だリニスって…ま、いいか。）管理局に関わるなつったのもフェイトの母さんとリニス？」

「母さんだよ。それがどうかしたの…?」

「フェイト…お前、その母さんにジュエルシード（それ）探して来
いって言われたんだろ？」

「ッ！？」

図星か……。世界の法律である時空管理局のこととそれに反する
行為を促すなんて矛盾を仕込むってことは、このジュエルシードに
フェイトを関わらすためのことに他ならない。ということはつまり、
フェイト達にそのことを教えた者も当然関係者である。そして、フ
ェイト達は自らこんな真似はしない筈。そこからフェイトの母親が
指示したと推測した。

「と、いうわけだ。」

「……フィアの言う通りだよ。私達は母さんに言われてジュエ
ルシードを集めているんだ…。」

視界の端で、急な展開についていけずにアルフがオロオロしていた
のは無視するとして…やはり、そうだったか。それにしても、こん
な取り扱い要注意の危険物を集めてどうする気なんだフェイトの母
親は？……ん？、今なんて言った？……“集めている”だと…
・？

「ちょっと待てフェイト、集めているってことはまさかジュエルシードってこの一個だけじゃないのか!？」

「え? そうだよ。ジュエルシードは全部で21個あるんだよ?」

「ハア!？」

「1個でもそうとうヤバイのに全部で21個だと!?! お前ら俺の胃袋によっぽど穴空けたいらしいなオイ!!」

「もう、目的とかどうでもいいや……。一応確認するけど、とりあえずフェイトとアルフはジュエルシードを全部封印して持ち帰るんであって、暴走させて世界を滅ぼすわけじゃ無いんだな?」

「当たり前だよ!!!」

「なら一安心だ…。フェイトの母親が何考えているのか不安だが、フェイトに集めろって言ったからにはそれなりの数が揃うまでは平気だろう…。それまでに色々対策考えておくか…。だが今はとりえず…。」

「俺もジュエルシード集めに協力させてもらおう。」

「「え!？」」

「もう今更無関係とは言わせねえぞ? だいたい、自分が今いるこの世界が滅ぶ可能性があるのにそれをほっとけるわけないだろ?」

《そもそも軍人の我々が人命に関わることに無視できるわけないでしょう?》

「リリアまで……。」

「フェイト、フィーアたちに手伝ってもらってこんなことさっさと終わらせようよ。」

ほんの少し考えたが結局……。

「分かった…。改めてよろしくフィーア。そして、ありがとう…。」

「なに、礼には及ばないさ。アルフもよろしくな。」

「ああ!!--よろしく頼むよフィーア!!--」

……こうして三人は、しばらく行動を共にすることが決まった。だが三人はまだ知らない。この出会いがその後大きな波乱を呼ぶことを……。

「オマケ」

「ところでフィア、アンタずっとその格好なのかい？」

アルフはそのままだが、フェイトはバリアジャケットを解除して私服になっている。しかし、フィアはこっちに來た時と同様、黒い軍服のままである。

《この世界の常識の検索結果から考えると、今のフィアの格好はイタイ人です。》

「それはイヤだな……。よし、【服装換装】。」

《了解》

するとフィアの軍服がその形を変え始めた。帽子と上着は一体化してフード付ジャンパーに、ズボンはジーンパンになり今風の服装に

変わっていた。フェイトとアルフは呆然としていた。なぜならフェイトのバリアジャケットのように魔力を一切感じなかったのである。つまり……。

「ファイア…もしかして今の魔法使っていないの…?。」

「ん?これうち(連邦)の科学技術。」

《こんなの一般市民でも持つてますよ?》

「す、すごいんだねファイアの世界って……。」

魔法を使わず魔法染みたことをするファイアの世界にただ驚愕するしかない二人であった。

第七話 協力しましょうか（後書き）

感想、ご指摘お待ちしております。

第八話 夢（前書き）

またタイトル変えようかなあ
…？

第八話 夢

??? side

気づいたら周りの全てが真っ黒だった・・・否、床は赤い、いや紅い……。辺りを見回すと、ポツンと白色の何かが目に入った。体が思うように動かなかったが、どうにかその白い何かが分かれるまで這って近づくことができた。その白い何かは銀髪、ではなく完全に色が抜けた感じのする白髪の少女だった。顔を見るとその表情は悲しみ、絶望、後悔、懺悔など全て負の感情で染められていた。同時に、この少女を自分は知っている気がした。だが、そんな考えを忘れさせる光景が目に入った。

この空間の紅を創りだしてるモノ・・・血だらけの“かつての自分”がいた……。

不意に視線を戻すと少女はこちらを見つめており、そして“今の自分”に問いかけた……。

イマノアナタハダレナノ？

俺は…いや“僕”はその少女の問いに何も返そうとはしなかった…。

ファイア side

「・・・こつち来て見た最初の夢がこれかよ…。」

起床時刻は朝の6時。今、ファイアはフェイト達と同じマンションの一室にいる。昨日の騒動のあと、拠点どころか寝床も無いの思い出し、野宿でもしようとしたらフェイトに招かれたのである。見知らぬ男をかんとんに家に泊めちゃダメ！！とアルフと二人で諭そうとしたのだが、

「ファイアはもう知り合いでしょ？」

そういう問題じゃねえ！！という感じの返答をされた。その後何度か説得を試みたが結局ファイアとアルフが先に折れた。いくら協力関係とはいえ、いつまでも幼女と同居する気はないので一日だけという条件で。

「二人はまだ寝てるな…。よし、金作りに行くか。」

異世界から来たフィーアは実質無一文である。そのため、しばらくここで生活するにはやっぱりこの世界の通貨が必要であつたが、自分より年下のフェイト達に金をもらうなんて選択肢は自分には無い。別に軍人であるフィーアはその気になればサバイバル生活を送れる。だが、彼が所属していた『ベルフィーア軍心得十力条』にこんなものがある。

未開の地で生き延びる根性と生活する知恵をつけるべし。

要はサバイバル能力も必要だが、異国の文明にすんなり馴染む技能も必要であるということ。自分が滞在する未開の土地の人間は敵にも味方にもなる。故に相手側を理解し、可能なら味方にするだけの手腕を身につけるようにしろという意味がある。もともと、フィーアはそこまで忠実にこの心得に従ってはいない……。

「それにしても…、また“あの時”の夢を見るとはな…。」

今朝、自分が見た夢を思い出し思考にふける。あの夢は自分にとって忘れない…いつそ否定したい過去であるが、同時に“今の自分”を存在させている過去である。故に、否定すれば自分とこれまで自分に関わったものまで否定することになる。だから今までこのこと

は極力考えないようにしてきたのだが…

「まさかコレに関係することが近々起きるってか？・・・いや起りようがないか・・・。」

考え事をそのへんで中断し、流石に無断で消えるとマズイのでフェイトとアルフ宛に『少し出掛ける』という内容のメモを書いた。

「んじゃ、行つてきます。」

まだ寝てるであろう二人を起こさないように、フィアは静かに家を出た…ベランダから…。とんでもない高さから跳び降りたにも関わらず、フィアは綺麗に、静かに着地した。そして、自分にしか聞こえない程度の小さな声で呟いた…。

「俺は僕だよ」・・・エミリア・・・。」

夢で逢った白髪の少女、かつての初恋相手の問いかけにそう答えた・・・。

第八話 夢（後書き）

今後の伏線にするつもり
のフィニアの過去

第九話 よい子は真似しちゃーよ（前書き）

フィーアが心得に忠実じゃ無いとはこついつこと・・・

第九話 よい子は真似しちゃーよ

不運な人 A side

今、俺は海鳴市のある競馬場に相方と来ていた…スタボロにされ、恐ろしい青年に引きずられながら…。

「オラッ、いい加減起きやがれ!!」

「ひいっ!! しません!!」

微塵も抵抗する気が湧かなかった…朝っぱらから狩場であるいつもの路地裏に優男がやってきて、いいカモが来た!! といったものように二人でカツアゲしようとしたのだが…三途の川を渡りかけた…。この優男はカモどころか怪物だった。二人してボッコボコに返り討ちに合い、気絶させられ、気づいたらここにいた。コイツ俺たちをどうする気なんだ!?

ファイア side

(やっぱりこの世界にもこういふ輩ってのはいるもんだな。)

（《全世界共通ってやつですね》）

フィーアはリリアと談笑しながら正座している二人の哀れなカモ達を見下ろしていた。フィーアはあえてヒト気のない路地裏に行ったのである。自分から襲ったら負い目を感じるし、なにより犯罪である。だが、犯罪者を撃退するのであれば話は別だ。自業自得な上に警察に「カツアゲしようとして返り討ちに逢いました」なんて本人たちも言えるわけない。ということで、フィーアは路地裏へカモ狩りに向かったわけである。

（《それにしてもえげつなかったですね…》）

（すぐに気絶させたらどんな目に逢ったか相手が理解できないだろう？）

フィーアはチンピラ二人を気絶するギリギリ手前をキープしながら痛めつけたのである。その甲斐（？）あつてか二人は従順な態度になっていた。

「おい、てめえら・・・財布出しな・・・。」

「ハ、ハイ!!」

なんの躊躇もなく財布を差し出す二人。

「よし…そこで一時間待ってる、もし待ってなかったら……後悔するぞ…?」

「一生待ち続けます!!」

そう言ってフィーアは競馬場に入っていた。

くきっかり一時間後

ご機嫌な表情をしてフィーアは帰ってきた。そして…。

「ちゃんと待ってたか…手え出せ。」

「ハイ…。」

なんとチンピラの財布を返した。なにかしらケジメ（追い打ち）つけさせられると思っていたのでいきなりすることに二人は困惑してい

た。

「金額は足りてるよな？」

「そ、そうですね…なんで…？」

「お前らは俺に絡んで金をふんだくろうとした、俺は半ば恐喝してお前から金を借りた。だが、お前らはほとんど未遂だし、俺がこっぴどく金返せばお互い何も無かったことにできるだろう？…怪我の治療代も足しといたからな一応…。」

自分から絡まれに行ったことは棚に上げてそうチンピラ達を諭す。もともと、チンピラ狩りで金稼ぎする気は無く、本命はこの競馬である。軍隊生活で培った洞察力を無駄にフル活用し、強い馬と強い騎手を見分けてボロ儲けするのが本来の目的で、もうそれなりに稼いだのでこいつらと縁を切れれば万事丸く収まって帰れるというわけである。

二人は顔を見合せ、考えたあげくフィーアの誘いに乗ることにしたようだ。

「へへっ、じゃあそうさせていただきやす。今日はお互い何もなかったということ…。」

許されたことをいいことに早速調子が戻り始めた二人にフィアは少しイラッとした。罪悪感を減らすためこういう輩を選んだとはいえ、やっぱり腹が立つ。おもむろにそばにあった手のひらにギリギリ収まる石を拾う。

「一ついいかな？」

「？、なんすか？」

石を手で遊ばせながらこう言った。

「別にお前らが俺の知らない所で知らない奴に何しようがどうでもいい……。が、迷惑かけた奴の中に一人でも俺の仲間とその身内が混ざっていたら……。」

バキヤアッ！！

「……潰すぞ？」

手のひらサイズの石が瞬時に片手で握り潰され、粉碎された。その光景を見て二人は自分達の体が粉々にされるのを想像して顔を真っ青にした。そして、

「二度とこんな真似いたしません!!」

二人はそう言い残し、脱兎のごとく逃げるように去って行った。

「流石にこれで懲りたろう。ふ、若者の未来を正してやったぜ…。」

《あなたは一切懲りてません…。この方法のせいで何回懲罰されたと思ってるんですか…?》

「……教官による折檻は本気で死にかけたな…。」

当たり前のことだが、相手の自業自得であるものの故意にやっているので当然許される方法では無い。上官にバレたときフィアは地獄を見るハメになり、さらに賭博の一切を禁止された。

「まあ、これだけ稼いだからもうやる気はないよ…（博打は解禁するけど…）。さて、マンシヨンの部屋借りる金も当分の生活費も手に入ったし、買い物して一回帰るか…。」

特に食料品…。あの二人、ロクなもの食っていないからなあ…。昨日見たがフェイトはインスタントや冷凍食品、アルフにいたっちゃドッグフードだなんて…。おいしいものを食べるありがたい状況が無

駄にするあいつらには絶食訓練を受けた者として一言言わなきゃ気が済まん！！

「連邦政府軍一の調理兵（自称）の実力を見せてやるぜええええええ！！」

ぬッ！？」

《南東数キロ先に魔力反応確認！！ジュエルシードです！！》

ちっ、せっかくやる気出したってのに買い物どころじゃ無くなった…。しかも…、

「おいリリア、魔道士の気配もするんだが？」

《お察しの通りフェイトさんとは別の魔道士の反応を1名、いや2名確認できます。》

管理局員かもしれないな…まだ何も対策考えて無いから、今回は無理してまで行くのはやめとこうかな？なんて思ってたら、

《フェイトさん達がジュエルシードのもとへ急行した模様です。》

「…行くしかねえか。」

フェイト達だけに任せて傍観するのが一番楽で安全なんだろうけど…どうしても性に合わないだよ、そういうの…。

《やっぱりお人好しですね。》

「我ながら難儀な性格だと思うよ…。いつも迷惑掛ける…。」

《お気になさらず。この迷惑が無くなったら、あなたについてく気も無くなりますから。》

「ハハッ…。さて、行くか。」

言うや否や、フィーアはジュエルシールドの元へ走りだした。

??? side

「またか…。」

とあるケーキ屋で、二十代後半のグレーの髪で緑色の目をした男は
そう呟き、溜息を吐いた。昨夜から無視できない大きさの魔力反応
を何度か感じていた。おかげで昨日から口々に眠れていなかったが、
自分のことはぶっちゃけどうでもいい。しかし…、

「どうしたん？溜息ついて。」

「いや、なんでもない。」

万が一にでも、この子が巻き込まれる様な事になるのは断じて許せ
ん。素性の分からぬ、異界の住人である自分を家族として認め、扱
ってくれる優しいこの子にこれ以上悲しみを与えると言つのなら…
たとえ神であろうとこの手で葬ってくれる…。

「ふ〜ん、まあええか。それにしても、ここのケーキほんまおいし
いなあ。」

「ああ、本当だな。」

車椅子の少女と談笑しながら男はこの厄介事に介入する決意をした。
まさか自分の同類と逢うことになるとは知らず…。

第九話 よい子は真似しちゃーよ（後書き）

はやての口調が分かんねえええええ！！

第十話 高い高い……ごめんなさい…（前書き）

なのは好きの人、ごめんなさい……。作者はアンチじゃないので段々待遇はよくするつもりです。

第十話 高い高い…ごめんなさい…

なのは side

はじめまして、高町なのはです。訳あってユーノ君とジュエルシドを集めるため魔法少女やってます。今日、私は友達のアリサちゃんと一緒に同じく友達のすずかちゃんのお家に遊びに来ていましたけど、突然ジュエルシドの反応がしたから途中抜け出してまで封印に向かったら、

「あれは…まさか僕と同じ世界から来た魔導士!？」

ユーノ君が言ったように、私と同じくらいの金色の髪をした女の子の魔導士が現れ、手早くジュエルシドの封印を行った。そして、

「申し訳ないけど、いただいでいきます。」

いうや否や襲いかかってきた。私はそれを迎え討とうとしたのだけど…。

「そおおおおおい!-!」

「にゃあああああああああああ!?!」

「なのはあああ!?!」

後ろから気配がしたと思ったら誰かに掴まれて、おもいつきり高く投げ飛ばされたの…。

一体何がどうなってるの？

フエイトside

私はただ驚いた。ジュエルシードの反応を辿ってきてみれば、ジュエルシードで大きくなった猫がいたし、自分以外の魔導士がいて少しびっくりした。でも、それはまだいい…一番びっくりしたのは…。

「そおおおおおい!」

「にゃあああああああああああ!?!」

（何してるのフィーア!?!）

どこから持ってきたのか、フルフェイスのヘルメットを被ったフィアがいきなりやってきて白の魔導士を空高く放り投げた。白の魔導士の子は猫みたいな声を出しながら空を舞った…遠心力で…。

「よおフェイト、俺だオレオレ。」

《詐欺ではありませんよ》

「いや、分かってるけどなんであんなことを…？」

とにかく聞かなきゃ色々の意味が分からない。

「おい！！お前たち、なのはに何するんだ！！」

「うおっ、ただの獣じゃねえのか。」

《もう一人の魔導士反応は彼のようです。》

「魔法生物ではなく魔導士なんだな？コレ。」

「わっ！！やめろ離せ！！」

喋るイタチみたいな生き物を引つ掴みながらフィーアは念話で話しかけてきた、

（フェイト、こいつらは管理局の奴らなのか？）

（…ううん、違うみたい。もしそうだったら局員は名乗るらしいよ？）

（なんだよ、こんなの被らなくてもよかったのかよ。）

あ、管理局に顔を見られないようにするためにヘルメットをかぶって来たんだ…。

（そういえば、なんであの子投げ飛ばしたの？）

（敵か味方が分からないからギリギリ冗談ですむレベルで攻撃してみた。場合によっては協力関係を作りたい。人手は多い方がいいだろ？因みにアルフは先に帰ってもらった。）

あいつ、気が短いから交渉無理だろ…と、つけくわえてそう説明してくれた。フイーアって、ふざけてるようで一応ちゃんと考えてるんだ。自分だけじゃこの二人に手伝ってもらうなんて考えもしなかった…。

「今失礼なこと考えたな？」

「そ、そんなことないよ？」

「…そういうことにしてやるよ。さてと、あの子、なのはだっけ？フエイトと同じ魔導士ならそろそろ自力で飛行して戻ってくるだろ。その時にお互いの話をしようじゃないかイタチ君。」

「ぼくはイタチじゃない、ユーノだ…！」

なんて喋ってたら…

「
やああああああああっ！…！」

びたーーーーん…！！

白の魔導士の女の子が戻ってきた…いや、降ってきた…。あれ？あ

の子私と同じで魔導士なんだよね？

「…あの子、飛べないの？」

「なのはは魔導士になってまだ日が浅いんだよ！！いきなりあんなことされて冷静でいられるわけじゃないか！！」

「・・・ファイア？」

《・・・ファイア？》

「・・・THE DOGEZA！！」

バリアジャケットで無傷ながらも目がグルグル状態の白い魔導士の女の子、パニック状態のイタチもどき、ジャンピング土下座するファイア。なんだろうこの状況…。

結局、なのはが目を覚ます前に一般人の気配が近づいてきたので、アリサとすずかロクに話しあうこともできずにその場を去るしか無かった。因みに、ちやっかりジュエルシードは頂いてきた。

《さて、称号はどれにします？愚者、間抜け、役立たず、カス、そ

れとも能なし?》

「…すまん。」

「ア、アハハ…。」

この時、なのはがフィアと再会したあかつきには“お話”ではなく“O H A N A S I”することを心に固く誓っていたことをフィアは知るよしも無かった…。

「絶対なの!!」

第十一話 エンカウントフラゲ(前書き)

今回オリキャラ二号の名前出します

第十一話 エンカウントフラグ

フイア side

「温泉？」

「うん、さっきのくじ引きで貰えたんだ。」

先ほどの白い魔導士のことは、今日はもう忘れて三人で商店街へ買い物に行き、今はその帰りである。そして、別行動中にフェイトはくじ引きに挑戦し日帰りの温泉旅行のチケットを手に入れたようである。

「ほほう、そりゃいいや。行くつじゃないか。」

「え、でもジュエルシードが…。」

「今だってフェイトのサーチャーと俺の使い魔で探査してるのに全然見つからねえじゃん。」

先日からフェイトはサーチャーをとばし、フイアは鴉のような使い魔を大量に飛ばしジュエルシードを探しているのだが一向に反応

が無いのである。

「あれって多分、軽く暴走しないとただの石ころと区別つかないんじゃないのか？ だったら、時がくるまでノンビリする方が後々ためになるってモンだ。それに最悪の場合、俺の使い魔がどうにかするさ。」

「アタシもそう思うよ。なあフェイト、今までロクに休んでなかったんだからたまにはさあ…。」

その言葉を聴いてニヤリとするフィア。段々分かってきたが何事も控えめで遠慮気味のフェイトは自分とアルフが二人で言うの大抵…。

「分かった、そうするよ。」

首を縦に振るのだ。フィアとアルフは視線を合わせ。

（（グッジョブー！！））

と、互いにアイコンタクトして心の中でサムズアップするのだった。まだ出会って一日たらずだが、三人ともすっかり馴染んできたようである。

「んじゃ、今日はさっさと帰るか。」

「あれ？夕飯の買い物は？」

「お前は即席ラーメンとレトルト以外は食い物と認識しないのか？」

そう言っ て買い物袋に入っ た食材達を見せる。

「だって私もアルフも作れないんだもん…。」

《女の子なんだからちゃんとしたもの食べなさい。お肌にも悪いですよ。》

唐突に会話にログインしてきたリリア。一応女性なのでやっぱこの手の話は黙ってられなかったらしい。昨晚も二人の夕食風景を見て俺と同じく何か言いたげだったが、初日から居候の身でモノ申すは流石に自重したらしい。

「お前はオカンか…？」

《あなたみたいな馬鹿とずっといたらイヤでもこうなります。》

「…ごめんなさい。」

「フィアとリリアってやっぱり仲がいいね。」

《もう十年くらいの付き合いになりますね。》

もうそんなに経ったのか…：そっぴや訓練兵のときからずっと一緒だったな…。

「…私たちもずっと一緒にいようね、アルフ。」

「当たり前さ、フェイト。」

自分たちを見て改めて絆を確かめ合う二人。微笑ましい光景にフィアは少し笑顔を浮かべ、

「さて、帰ろうか。」

「「うん!!」」

三人は仲良く歩いて帰路についた。

みらい side

「温泉？」

知ってか知らずか、グレーの髪に緑の目をした男『八神みらい』はフィアとまったく同じ言葉を居候中の家の主である『八神はやて』に発していた。

「そうなんよ。今日、魚屋のおっちゃんが『手に入れたはいいけど孫は遊園地に行きたいらしいから…』て言ってくれんたんよ。行かへんか？」

「そうだな。基本的に暇だし、アリアでも誘って行くとするか…。
ムッ!! 来たあああああ!!」

「ほ、ほんまか！？ガンバレみらいさああん！！」

今この二人は椅子と車椅子に座りながら釣り竿をたらしていた…家のリビングで光輝く魔法陣に…。

「こ、こ、これはかなりの大物だぞ！！はやて、代われ！！俺は銚を出す！！」

「ええ！？」

「大丈夫だ！！この竿、クジラも釣れるくらい魔法で強化してあるから！！」

「わ、分かった！！私に任せときい！！」

即座に釣り竿を手渡されるはやて。みらいは別の魔法陣から銚を取り出し、そして…。

「チエエエエエエエエスウウウトオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
！！」

ズドオオオオン！！

凄まじい突きを、釣り竿にかかった獲物がいるであろう日本の遠洋に接続された魔法陣に叩き込んだ。その余波で八神家が一瞬揺れた…。そして、

「獲ったとおおおお!!」

「釣ったとおおおお!!」

八神家のリビングにはやての身長より大きなマグロが釣り上げられた。

「ふっふっふ、この『どこでもフィッシング魔法陣』を開発すると早三ヶ月…長い道のりだった…待たせて悪かったな、はやて…。」

「そんなことあらへんよ。ありがとうなみらいさん、私の我儘きいてもらって…。」

以前、はやてがテレビに繋げて遊ぶ釣りゲームをほしそうにしたので『もつとすごい作るからちよつと待ってる』と言ったのだが徹底的（特に安全面）に制作していたら思いのほか時間がかかってしまった…。

「よっしゃあ！！気合いれて料理するでえ！！」

「待てえい！！半分は魚屋のおじさんに引き取ってもらうんだからな！？」

「そんな関係あらへん！！目の前にある食材は全て私が屠る！！それが八神クオリティ！！」

「どうやってできたそんなクオリティ！？」

「『目の前の敵は全て我が屠る！！それが我、ラインベルトなり！！』を参考にしました。」

「俺のセリフじゃねえかあああああああ！！」

「あはははは。」

自分がはやてのために言った言葉が原因であったことを知り『八神みらい』、もといた元漂流者『ミランダ・ラインベルト』は頭を抱えた。それを見てはやては笑う。そして、頭を抱えながらも『ミランダ』…いや、『みらい』はそんなはやてを見て同じように笑顔を浮かべる。そのやり取りは、年の離れた兄妹にも、年の近い親

子にも見えた。

今の八神家に、今の八神はやてに、悲しみと涙はもう存在していなかった。彼女はもう、孤独では無くなったのだから…。

第十一話 エンカウトフラゲ（後書き）

みらい（ミランダ）が誘うと言った相手、アリアは猫姉妹の…。
すでにみらいは原作壊し始めてます…。ですが、彼はまだ闇の書と
はやての関係を知りません…。

プロフィール2

名前 八神みらい（命名者・八神はやて）

本名 ミラन्दル・ラインベルト

年齢 26歳

職業 とある世界の元近衛銃士。現在魔法をフル活用して野菜の栽培、最近は漁業も始めた。

容姿 身長はフィーアと大差無し。グレーの髪、緑色の瞳。イケメンの分類に入るが若干老け顔…。

性格 いたって真面目な性格だったが、はやてと過ごすうちに大分丸くなった。

戦術 銃剣と魔法。みらいの銃剣はボルトアクション式なのだが…
そう遠く無い日に一部の魔導士を驚愕させる。

みらいはフィーアより二年早く海鳴市に漂流してきており、それからずっと八神家に居候中。はやてとご近所公認の正式な八神家の一員になっている。

プロフィール2（後書き）

こいつをベースに主人公作りやよかったかなあ…でもフィアの未使用設定がまだまだあるし…。みなさま、できれば意見を下さい…。

第十二話 その身に宿し悪魔の片鱗（前書き）

使い捨ての二号

第十二話 その身に宿し悪魔の片鱗

フイアー side

「それじゃあ俺はマンシヨンの管理人さんに部屋貸してもらおうよう話してくるわ。」

「フイアー行っちゃうの…?」

そんな上目使いやめてくれフェイト…なぜか身に覚えの無い罪悪感が沸くから…。今俺達はフェイト達のマンシヨンの一階、正面入り口にいる。俺がある程度金を稼いだので（方法は伏せた）居候は今日でやめるという話をしたのだが…何故かそれをフェイトが嫌がるのである。

「…あゝ、あれだ、その…いきなり今日借りれるわけじゃないから、もう一日だけ厄介になるよ。」

「明日になったらいなくなっちゃうの…?」

どないせえいうねん!?

《大丈夫ですよフェイトさん。フィーアが来ないならあなたから行つてしまえばいいのです。》

「リリア!？」

《何か問題でも?》

「…特に無いです。」

いや、あるんだけどさ。自分で言うのもなんだけど、女の子がこんな怪しい男とずっと同じ部屋にいるってのはどうなの?とか。こんなに男への警戒心薄くて将来大丈夫か?とかさ…。

《大丈夫だ、問題無い。》

「死亡フラグだ馬鹿野郎。」

《だいたい、あなたが女が警戒しなきゃいけない類の男ならとっく
に上官と教官に殺されてるでしょう?》

「まあ、ね…。」

《と、いうわけでフェイトさん。なるべく近くの部屋を借りますのでジュエルシードの件以外でも気軽に来てください。あ、バルディッシュさんも忘れずに連れて来て下さい。また（・・・）色々おしゃべりしたいので。》

「うん、わかった!」

満面の笑顔だよこの子…不覚にも癒された…。会ってまだ一日しか経ってないってのに随分と懐かれたみたいだな俺…。

（ありがとね、ファイア。）

（アルフか。むしろ俺みたいな不審者と仲良くしてくれて礼を言いたいのはこっちだ。）

アルフが念話で話しかけてきた。

（最初は怪しい奴なんて言って悪かったよ。これからもよろしく頼むよ。）

（俺なんかでいいのか?）

（フェイトがあんな表情するのはアタシ以外だとフィーアが初めてだよ。アンタなら信頼できる。）

そこまで言われると満更でもないな…むしろ、嬉しいよ。ならば、それ相応に応えなけりゃな。

（分かった。任せろ。）

（ありがとう。）

んじゃ早速、手始めに料理でも振る舞うとしますか。……おっと、こいつは…。

「なににせよ管理人さんと話するから先に行つて。あとで夕飯作つてやるから冷蔵庫に食材しまつといてくれ。」

「分かった。待つてるから早く来てね。」

「はいよ。さっさと片付けてくるよ。」

そう、
“片付けにね”。

??? side

ようやく見つけたぜ、黒服の漂流者…。上の連中は何のつもりか知らないがせつかくの休暇を潰されたんだ、八つ当たりで手足の2、3本へし折っても文句は言わないだろう。それにアイツらがほしいのは漂流者じゃなくて漂流者の持つ技術だ。別に生け捕りにする必要もない。ミッドチルダの人間が近くにいるが、まあ証拠が残らなきゃ何してもいいって言ってたから…。

「あのガキは殺しまえれば問題無いよな？」

封鎖結界を展開すりゃ、あのガキも飛んでくるかもしれないが敵にならねえだろう、さくつと殺して終わらせて休暇の続きといこうじゃないか。

「さあて、封鎖結界てんか」

「こんばんわ。名も知らぬ誰かさん。」

「っ!？」

気づけば後ろに目的の男、フィアがいた。ただその表情は、割と穏やかな筈なのに恐ろしいものを感じさせ、尚且つ口調も変わっていた。

「てめえ!! いつのまに!？」

「君が愚痴をこぼし始めた時かな。」

なんてやろうだ…。それでも俺は同僚の中じゃ隠密行動はトップクラスの实力を持つてゐるのに…。まあ、落ち着いて対処すりゃ問題無いはずだ。

「で、“僕”に何の用かな？」

「テメエは俺についてきてもらっ。」

さて、どうでる？

「行き先は？」

「言えねえな。ついでに拒否権は無え、イヤだつてんなら力ずくだ。」

言葉とともにありつたけの殺気をぶつける。並の人間なら怯えて動けなくなる規模の殺気を…。すると、フィーアは少し考えるような仕草を見せ、一言…。

君は素人かい？

「…ハア？」

コイツ…俺は暗部のエースだぞ！？あの“脳味噌共”の無茶な命令に応えられる数少ない人間なんだぞ！？それを素人呼ばわりだど！？ぶち殺してやる！！

「てめえ、生け捕りはやめだ！！死体にして持ち帰ってやる！！」

「まあ、少し話を聴きな。君の上司か依頼主の目的は僕か僕に関わるものだろ？」

「だからどうした!？」

御託はいい、とつとと殺らせろ…。

「そういう時は嘘でも何でも使つて標的の警戒を解くのが先決だ。そうすれば標的も自主的に協力してくれる。そしてあわよくば自分の拠点に連れて行き、より優位な状況を作る。」

「しつたことか!！」

「次に、接触する前に必ず標的のことは調べておくことだ。特に性格は先程言つた警戒を解くための手段に必要不可欠。言葉を選ぶための参考になる。」

「てめえの講義もどきなんか聴きたくねえんだよ!!俺は「そして、最後に大切なのは標的の実力を見誤らぬこと。」いい加減にしやがれ!!」

「自分より格上の相手に決して正面から相対せぬこと。任務を遂行せず死ぬのは愚者の選択だ。さて、ひとつ問おう。」

本気で“僕”を殺せると思ってるのかい？三流風情が

途端、男の体に絶対零度に匹敵する悪寒が走った。先程男が発した殺気など比べるまでもない大規模な殺気がフィーアから放たれていた。男はただ恐怖に震えるしかなかった。

「な、なんなんだお前は！？」

「知る必要は無いよ、君は僕に“片付けられる”のだから。」

そう、この世からね。

「それじゃあ、始めようか。」

黒による殺戮劇が今、始まるうとしていた

第十三話 怒狂（前書き）

この話いらなかったかも…

第十三話 怒狂

リリア side

私の主兼相棒のフィアに対するタブーが3つある。

1、彼の身内を傷つけるような言動。

2、自分自身の決めたルールを自分で破って尚且つそれに自覚が無い。

3、フィアの過去（悪夢）を思い出させるもの。

2に対しては度合いにもよるが、まあ彼自身たいてい嫌悪感を抱く程度で済む。3は彼に対して一番やってはいけないのだが…今はあまり語れないので割愛する。で、1についてだがこれは普通の人からしたら誰だって普通に許せないことだろう。しかし、フィアはこれに関して覚える怒りの限度が無い。特に彼の身内を『殺す』なんて言った日にはその日のうちに殺されかねない。これは3のタブーが関係しているが今回は多くを語るのはやめる。さて、そんなフィアの前で

「あのガキは殺しまえば問題無いよな？」

なんて言ったらどうなるのか？その答えが目の前にあった。

「う……ぐ……かはっ……」

「どうしたんだい？もう疲れたのかい？」

先程の言葉を吐いてしまった男、今は『名無し』と呼んでいる男が見るも無残な状況で転がっていた。纏っていた戦闘服は血まみれでボロボロ、武器は跡かたも無く粉碎され、両足も砕かれ、左腕はおかしい方向に曲がっていた。右腕にいたっては“無くなっていた”……。

「この程度で戦えなくなるのかい？なんて脆い生き物なんだろうね。」

「……化け物……ぐはっ……！」

「あ、まだ遊べそうだ。」

追撃の蹴りを喰らわす。因みに今のフィアは手ぶらである。というより最初から何も手にしてない。そう、フィアは彼を最初から最後まで“素手で”文字通り、なぶり殺しにしているのだ。もう『

名無し』に戦闘意欲は微塵も残って無かった。

「さて、もう少し遊びたいけど、あの二人をあまり待たせたくないから用件をすませようか。」

「な…なん…だ…?」

「“お前”の所属が依頼主を“俺”に教える。」

『君』が『お前』に、『僕』が『俺』に戻ったことに少し安心する。ようやく、落ち着きが戻ったようだ。場合によっては“発狂”する前に鎮静剤を打つつもりだったが…もうその必要はないようだ。

「い…言えねえ…言おうとしたら…死ぬよう…に細工され…て…いる…。」

「しょうがねえな…因みに、俺の正体の目星ついてんのか?」

「た…だの…次元…漂流者と…しか…。」

『次元漂流者』という言葉を使いましたか。ということは…。

《ミッドチルダの人間ですね。》

「管理局員か？法の番人にしては素行が悪すぎだな…。裏仕事の間違ってところか。」

《どちらにせよ、コイツはどうします？》

「そうだな……。せええええい！！」

ズドムッ！！

「ぐあああああああああああああつ！！……………」
（がくっ）。」

「お前はもう（魔導士として）死んでいる。（キリッ）」

指で名無しの胸部の中央あたりを指でおもいつきり突いた。そこには魔法を使う者のほぼ全員が持つといわれる秘孔があり、そこを突かれた人間はもう一度そこを同じように突かないと魔法が使えなくなるのだ。

「これで、ただの人間として警察に引き渡して万事解決。」

《解決しません。これからどうする気ですか？管理局と2日目から接触しちやって…。》

「大丈夫だろ。さっきも言ったがこいつは十中八九裏の人間だ。そして多分ベルフィーア連邦のことは知らないだろう。」

《何故です？》

「何もかも雑すぎるんだよ。俺の戦闘能力を知らない、俺の素性も知らない、にも関わらず俺を捕まえにきた人数は雑魚が一人…。連邦の未知の技術、俺自身を最初から狙ったにしては随分と準備がお粗末だ。いくら急に正体不明の人間がこの世界に現れたからってもう少し何かしら準備するもんだろ？」

《そうですね…。つまり、あなたはコイツらに対してのイレギュラーな存在だとも？》

「多分そうだ。おそらく本命は俺じゃあ無い。俺がそこに急に現れたから慌てて対処してきたんだろ。しかも裏の人間が来たってことは、その本命は奴らが表沙汰にできない何かだ…。心当たりはあるけど…。当分は様子見になるが、管理局全体が敵にまわるのはまだ先の話になるはずだ。」

《結局その裏の人間どもはどうしますか？》

「無視だ。流石にこつちから積極的に行ったら奴らに表の人間を使う大義名分を与えかねない。まあ、襲ってきたら正当防衛は続けるけどな…。」

ほんと考えてないようですね、この人は…やらかしたあとに考えてる可能性もありますが、結局いつも万事解決しますからあまり文句も言えないんですね…。

「…おい、フェイトに続いてお前まで何か失礼なこと考えてるだろう？。」

《そんなことないですよ。早くコイツを片付けて帰りましょう。》

「話逸らしたな…？いいや、とにかくそうし…あれ？」

動けなかった筈の名無しがその場から消えていた。

《ワープ反応確認。魔法による転移とみられます。》

「秘孔突いたから魔法は使えないはず…。道具でも持ってたのか？」

《まあ、連れて帰る気はありませんでしたからいいのでは？》

「それもそうだな…。おっと、時間掛け過ぎたな。部屋借りる相談は明日にするか。」

フィーアは夕飯を作るため、フェイト達のもとに帰っていった。そこに先程の魔獣のような雰囲気は一切無く、いつもの明るい彼に戻っていた。

尚、リリアの管理局による更なる襲撃に関する心配は、間接的に2年前の『八神みらい』の手により杞憂に終わる。

第十四話 光に紛れし闇（前書き）

今回オリキャラ二人は直接は出ません…

第十四話 光に紛れし闇

ミッドチルダ某所

～定時連絡～

先日出現した二人目のイレギュラーの報告。以後、この二人目を『魔獣』と呼称。

緊急報告により、休暇中だった隊員番号67番が接触、交渉、交戦。交戦の結果デバイスの全壊、全身打撲、両足骨折、左腕の骨折、右腕の損失、リンカ コア損傷。

67番は隊員として使い物にならないため、サンプルとしてJ・S氏に送りつけるものとする。

被害は闇の書のもとに出現した一人目のイレギュラー通称『魔人』のものを加えると、28人に昇る。

これ以上の『魔獣』との接触は『魔人』による被害の二の舞になる恐れがある。故に『魔人』同様、今後『魔獣』に対してはギリギリまで監視でとどめておくことを進言する。

管理局暗躍機動部隊隊長 ノー・ネーム二佐

「こんなもんか…。」

薄暗い部屋で映像端末を再生しながら報告書を制作している男、

ネーム二佐』は呟いた。そしてチラリと再生中の映像に目をやる。そこには二人目の漂流者、『魔獣』と隊員番号67番の戦闘記録映像が流れていた。

咄嗟に隊員がデバイスを出し、攻撃をしかけようとしたらしいのだがデバイスを相手に向ける前に間合を一瞬で詰められ、腰に捻りを加えた鋭い蹴りが一撃で隊員のデバイスを粉碎した。隊員は驚愕と恐怖の表情を浮かべ、慌てて後ろに下がろうとするも『魔獣』はそれを許さず、彼の左腕を捕まえそのまま間接を決めながらへし折った。絶叫する隊員に一切の慈悲も与えず、『魔獣』は最初にデバイスを粉碎したあの蹴りを彼の右腕に放とうとしていた。そして…。

『ぐあああああああああああああ（ブツッ）

』

「…この映像も送つとくか。」

ネーム二佐は途中で映像を再生するのをやめた。映像でとんでもない状態にされていた隊員番号67番だったが、緊急転移で帰還した彼はもつと酷い状態だった。つまり、右腕を飛ばされた後もまだこの暴虐が続くのだ。別に隊員に同情してるわけではない。ネームの憂鬱の原因は、

「『魔人』とほぼ互角の可能性がでてきたな…。」

2年前、計画のために選んだ第97管理外世界に悪名高きロストロギア『闇の書』が存在していることが分かり、計画の邪魔にならぬよう秘密裏に持ち主ごと処分しようとしたが…散々な結果になった…。『闇の書の主』の家に次元漂流者が居候していたのだ。本局の人間がソイツを保護しにきてしまった場合、当然『闇の書』の存在も同時に知られ増援が来るだろう。表の人間に来られると計画に支障が出かねない。よって、漂流者も抹殺対象になったのだが…この漂流者が恐ろしく強かったのだ。

「まさか暗部の人間が27人、全員使い物にならなくなるとは…。」

最初に1人が抹殺に向かい、振り返ちに逢った。次に腕の立つ隊員を1名送ってまた振り返り討ち。1人がダメなら3人で行かせても振り返り討ち。その後も何度か試みたが失敗。なら暗殺だ、とトラップ専門の隊員を向かわせたら未知のマジック・トラップにかかり振り返り討ち。未知の魔法技術を確認し、なおのこと引けなくなりついには12人で交戦したが結局振り返り討ち。気づいたら他の任務に支障が出る程、隊員の数が減っていた…。

管理局の万年人手不足の影響はこの暗部とて例外では無い。ましてこの部隊は仕事柄、“表”の名のある実力者をヘッドハンティングできないので“表”のハグレ者やゴロツキで構成されている。アラシクなんて片手で数えられる程度しかない。故に一人目の漂流者、通称『魔人』に手を出すのは断念した。

「幸い、こちらから出向かなきゃ何もしてこないようだ…触らぬ神に祟りなしってか…。しかし、こっちの神にはいずれ触らねばならぬのか…。」

『魔人』の扱いが決まって一段落し計画が本格的にスタートした瞬間に奴、『魔獣』が現れたのである。しかもまた居候、さらに今度は計画の重要人物の家。悪い冗談にも程があるだろう…。即抹殺を試みたがあのザマである。『魔人』と同等ならばこちらの被害もまたしかりだ…。早々に抹殺は保留することにした。当分は『魔獣』をうまく計画の歯車に加える方針になることだろう…。

「“脳味噌共”に文句を言われたくないので、これ以上余所者に邪魔されたくないのだがね…。失われた都、『アルハザード』への道を…。」

唐突に自室の扉がノックされ、扉が開き部下が入ってきた。

「失礼します。ネーム二佐、報告書を受け取りに参りました。」

「御苦勞。ついでに現地の人間に通達しろ、『魔獣は監視で留め、人形遊びの魔女を踊らせ続ける』とな。」

「了解。」

せいぜい我々の手のひらで踊り続けるがいい…哀れな『プレシア・
テストロツサ』

「さて、次の書類は…。」

光に紛れし闇が、邪な笑みを浮かべていた

第十四話 光に紛れし闇（後書き）

八神みらいのスコア。迎撃戦17、トラップ4。

リーゼ姉妹のスコア。遭遇線6。

合計27名

第十五話 将校の黒羽（前書き）

温泉は次回

「アタシはドッグフード。」

「退場！！（怒）」

こいつらは…。ていうか一体どんな教育してやがったんだ、フェイトの母親とリニスとか言う教育係は…。一度しっかり『O H A N A S I』したほうがいいかもしれん…。

「しかたねえ、『黒羽』を使うか…。」

《お、こっちの世界に来てついに初使用ですね。》

「「?」?」

おもむろに左手を掲げたフィーアが何をするのか分からず、二人は不思議そうな顔をした。

「【出でよ黒羽】」

フィーアがそう唱えた瞬間、彼の左手に無数の黒い羽根のようなものが出現した。少しの間羽根は舞い踊るように漂っていたが、フィ

「アが手を軽く振ると一か所に集まり形を作り始めた。そして…。

「完成〜。」

黒い羽根は見事な新品同様のフライパンになった。

《相変わらず完璧ですね。》

「当たり前だろ？俺の個人魔法なんだから。あれ？どうした二人とも？」

「……（ポカ〜ン）」「」

《失礼、リリア殿。》

だれの声だ？と思ったらバルディッシュか、そういえばお前喋れたんだっけ…。

《どうしました？バルディッシュさん。》

《今フィーア殿はコレを魔法とおっしゃいました？》

《そうですね、それがなにか？》

《確かに発動中はファイア殿から魔力を確認できました…しかし、今そのフライパンから微塵も魔力を感じないのでありますが…まるで“ただの”フライパンのように…。》

「！？。バルディッシュ、それ本当！？」

魔導師としてフェイトは驚愕した。確かに、鉄製に近い剣や盾を出す魔法は少なからずあるし、バルディッシュみたいな存在もある。しかしそれは、当然それらを生み出すために魔力を消費し、同時にその形を“維持”するためにも魔力を消費する。そのため、その魔法の使用者から離れすぎたり、使用者が死んだりするとそれらは消滅する。それらを存在させ続けるにはデバイスのように、もとからこの世に存在する物質を混ぜたり、ロストログアのようにそれ自体に魔力を持たせるしか無いのである。そのはずなのだが…。

「一応確認してみるか？ほれ。」

「……本当に本物の鉄製の“ただのフライパン”だ…。」

《もしかして、ミッドチルダにはこういう魔法無いんですか？バル

ディッシュさん。》

《その通りですリリア殿。フィア殿が今行った魔法は我々からしたら『無から有を創る』に等しい行いです。正直、目の前で見ても信じられません。》

魔力だけでこの世に物質を文字通り『産み出す』なんて真似、誰にも出来ないし誰も知らない。にもかかわらず、フィアはあっさりとやってのけた。

「確かにこの魔法で作った物は俺が離れようが死のうが独立した存在を維持するが…魔法だけでやった訳じゃ無いしそんなに大層なものじゃないぞ？科学知識がなきゃただの宴会芸が関の山だこんなの。」

まあ、戦闘に使えるレベルまで発展させたけどね…。

「そんなことないよ！！フィアってすごいよ！！」

フェイトが目キラキラさせながらそう言ってきた…なんだろう、なんかこうフェイトを喜ばせるのって、なんか…こっちも色々癒されるような…。

《いい加減料理始めませんか？》

「うおっ、忘れかけてた。さて、今後のために色々と創らせろ。」

さっきと同じように他の調理器具をいくつか創りだす。（そのたびにフェイトは目をキラキラさせてた）

「さうて、はじめるか。」

「今更だけどフィーアって料理できんのかい？」

《愚問ですよアルフさん。ベルフィーアの軍人はみな料理が自然と上達するのです。》

「……あ、やべ…訓練時代を思い出したら涙が…。」

ベルフィーアの訓練兵は入隊初日に御馳走を食わされる。しかしその翌日から三カ月間、出てくる食事は腐ってたり、ヘドロ漬けだったり、毒入りだったりと悪質な嫌がらせのようなメニューが解毒薬と一緒に出される日々が続く。免疫をつけるためなのと贅沢を簡単に言わせなくするのが目的らしいのだが、素直に従う者ばかりなわけもなく、こっそり食材を仕入れて料理する輩も少なくなかった。だってやっぱりおいしいもの食べたいじゃん？と言ってもやっぱり

《リリア殿…味覚あるんですか…？》

《気にしたら負けです。》

《…そうですか。》

第十五話 将校の黒羽（後書き）

次回、魔獣と魔人と魔王と死神がエンカウント。夜天の主は…どうしよう…。

第十六話 狭い世間（前書き）

うっかり投稿する前に消してしまい、ようやく携帯で半分くらい書
けました…せつかくジュエルシードのどこまで書いたのに…チクシ
ヨウ（泣）

第十六話 狭い世間

ファイア side

カポーン

「あ~~~~生き帰る~~~~。」

騒動続きの二日間と何も無かった数日を経て、ファイア達はフェイトが福引きで手に入れたチケットで海鳴市の温泉宿に来ていた。そして早速ファイアは温泉を堪能中である。

「ベルファイアや同盟世界にも温泉はあったが、ここは格別だ。」

この町、さり気なくなんでもあるから観光地として連邦と交流持てないかな？と本気で考えていたら新たに二人の温泉客が入ってきた。

「どうした恭也、そわそわして？」

「いや、なんだかなのは達に淫獣の魔の手が迫ってる気がして…。」

「なんだそりゃ？」

一見するとただの親子（兄弟にも見える）なのだが…。

（明らかに雰囲気が一般人と違うじゃねえか…。）

フィーアはこの二人から戦場の匂いを感じた。魔力こそ感じないが、おそらく実力は先日撃退した男がゴミのように感じるくらい強いだろう…まあ、実際ゴミのように弱かったが…。

（少々手合わせ願いたいものだが、互いに休息を取りにきた身のようにだし、自重するか。それにしても、本当にこの町はなんでもあるし、なんでも居るんだな…）

主に魔導師とかチンピラとか使い魔とか人外なケーキ屋とか…。なんて思考にふけていたら、フィーアはこの二人の会話に『なのは』と言う名前が出たことに気付けなかった…。

「…はあ、はやての奴大丈夫かな…？アリア、頼むから絶対に他人の胸揉ませるなよ。」

何やら今度は苦労性と哀愁感を漂わせる客が入ってきた。

「ん？あんたはこの前のお客さん？」

「おや、どうもこんにちは。あなた方も来てたんですか？」

「ええ、家族とその友達たちと一緒に。」

三人は顔見知りらしく世間話を始めた。一方フィアはそろそろのぼせてきたので温泉から出ることにした。

「おっと、失礼。」

「あ、すいません。」

去り際に三人目の客と目があつた。男は緑色の目をしていたが、それ以外なにも感じなかった。

「それにしても、いい湯だった。また来たいもんだ。」

温泉から出て定番と言われる牛乳を飲みながらくつろぐフィア。

そこへ…。

（ちょっと、フィア。）

（アルフか。どうした？）

アルフから念話が届いた。なにやら困っているようだが、たいしたことでは無いだろーと思ひ、フィアは牛乳を飲みながら話を聞こうとした。

（この前フィアが投げ飛ばした子がいるんだけど？）

それを聞いた瞬間フィアは牛乳を勢いよく吹きだした。

第十六話 狭い世間（後書き）

次回、魔獣が魔王と魔人とエンカウト。あ、魔人とは会ってた…。

第十七話 魔獣と魔王と魔人（前書き）

魔王誕生早期化。そしてちょい長い、昨日の分は半分もいってなかったように…。

第十七話 魔獣と魔王と魔人

なのはside

私は今日、家族と友達みんなで温泉旅行に来ていた。だけど、アリサちゃんとすずかちゃんと一緒に居たところに突然、知らない女の人が話しかけてきた。それも普通の会話をしながら念話で。話によると、先日会った金髪の魔導師の子の使い魔だったらしい。しかも・・・。

（ちょっと、ジュエルシードの回収に関して相談したいんだけど…。）

また襲われたり脅されたりするのかと思ったら、割と穏やかな内容で正直、意外だった。ユーノ君もちよつと戸惑っている。

（この前は襲ってきたのになんで急に？）

（いや、正直言うとアタシたちも最初はアンタらのこと邪魔者として見ようとしてなかったんだけどね？アタシたちの仲間が場合によっては一緒に協力したいって言ってるのよ。）

これは、ちょっと朗報なの。ジュエルシードの回収を手伝ってもらえるならそれにこしたことは無いし。それに…その仲間って言うのは多分……。

（ま、お互い今日は遊びに来ただけだから、別にすぐに話し合わなくてもいいって言うてたよ。日にちもそっちが決めていいってさ。）

その言葉にユーノ君（淫獣形態）は少し考えるような仕草をした。そして、

（分かりました。では明日あたりにでも会って話しましょう。）

（あいよ、フィーアに伝えとくね。それじゃあ明日ね。）

女の人、あの時の子の使い魔さんは帰っていった。念話中もアリサちゃん達に不審に思われないように普通の会話もちゃんと続けていたようで、内容は聞いてなかったけど二人の表情からして、そんなに悪い内容では無かったみたい。それにしても…ふふふ……。

（いや）、よかったよ。これでジュエルシードの回収もきつと楽に…なのは……？）

「ふふふ…フイアって言うんだ、あの時の人…ふふふふふふふふふふ…。」

フイアは分からなかったが、あの時フイアに投げ飛ばされたなのは宙を舞い、“ユーノの結界に顔面から衝突し”、そのまま顔面から地面に落ちるの三連コンボになっていたのである。そのため、彼の予想以上にあのことを根に持っているのである。

「少し頭冷やしてもらって『O H A N A S H I』するの…ふふふふふふふ…。」

「す、すずか…、なのはったらどうしちゃったの…?」

「さ、さあ…?」

アリサとすずか、そしてユーノはなのはから黒い何かが滲み出てる気がしたが、怖かったのでそれ以上何も言えなかった…。

フイア s i d e

あれから時間も経って今は夜中。フイアとフェイトとアルフの三

人は旅館から少し離れた森に居る。すっかり堪能したので帰ろうとしていたのだが、突如ジュエルシードの反応を確認したのでトンボ帰りしてきたのである。

「あゝあ、タイミングがいいのか悪いのか…。この距離じゃあ、あの二人もすぐに来るよな？」

「そうだね。」

「あの子、去り際にすごい怖い笑い方してたけど…？」

「帰っていい？」

《いやあなたはダメでしょう。》

まずい、思った以上にあのことを怒っているようだ…。どうやって許してもらおう…。あれ？誰かの気配がする…。いや違う、これは殺気だ！！

「ちょ、なのは落ち着いて！！」

「【ディバイン・バスター】！！」

突如、誰かの会話が聴こえたのとほぼ同時に桜色の閃光がフィーアに襲いかかる。

「あつぶねええええええええええ！」

フィーアは慌てて魔法陣を書き上げ少し傾けた状態で展開した。ただの防御結界なら結界ごとぶち破ったであろう桜色の閃光は魔法陣に衝突した瞬間、真上に屈折させられ空に向かっていった。途中、通り抜けた雲に大穴が空いた。

「うわあ……。」

「なんて威力だい……。」

フェイトとアルフはその威力に啞然とした。直接撃たれたフィーアも内心ビビっていた。三人は魔砲が撃たれたであろう場所に視線をやると人影が目に入った。そして、その人影はいい笑顔で一言。

「手が滑ったの。」

「嘘つけっ!!」

「今度は外さないの。」

「そっちの意味かい!？」

ファイアに魔法を撃った白い魔王…もとい白い魔導師、高町なのはがそこにいた。ユーノは肩にのっている。

「落ち着いてなのは!!僕たちは話し合いをするんであって、戦いに来たんじゃないからね!？」

「分かってるよユーノ君、『OHANASHIAI』でしょ？」

「多分違う!!」

終始笑顔だが相当ご立腹のようである。アルフは野生の本能故かすでにビビりきっている。正直ファイアも今すぐ逃げたい。生憎、敵と認識していない相手と戦う神経は持ち合わせていない。自慢の悪知恵は使ったあとが怖いのでやめておきたい…。

「ちょっとファイア、アンタがどうにかしてよ?」

「私もあの時はフィーアが悪いと思うよ。だから、頑張ってね？」

「魔王の生贄になるのを頑張れと？ていうか、お前だって最初アイツのこと襲おうとしてたろ！？」

チクセウ、味方がいねえ…。なんであんなことしたのか今更ながら悔やんでも悔やみきれねえが、マジでどうしよう…。

《お話し中失礼、なのはさん、でしたっけ？》

「え？あなたは？」

《フィーアの部下兼相棒であるリリアと申します。この度はうちの相棒がご迷惑お掛けしました。》

「ふえ！？いや、ご丁寧にどうも…。」

おお！！救いの神が降誕なされた！！頼むぞ我が相棒。この場を丸く収めてくれい！！

《場合によつては今後、私達はあなた方と行動を共にするかもしれない。そのため、今あなたは悔を残したくありません。》

「は、はあ……。」

《なので、お詫びの印に一発コイツ（フィア）をブツ飛ばしちゃうてください。》

「待て待て待て待て待て待て待て待て待て待て！
」

「え？
いいの？」

「よくないよくない！！おい、リリア！！」

《元々はあなたが原因でしょう。さっさとやられて水に流してもらってください。》

ぐ…正論でしかも自業自得だから言い返せねえ…。なんて思った
ら、なのはもうこっちにデバイス、『レイジング・ハート』を向
けていた。

「それじゃあ遠慮なく、一発やらせるなの。」

「何故か卑猥に聴こえた!？」

「問答無用なの、『ディバイン・バスター』!!」

有無を言わせず、桜色の魔砲がフィーアを飲み込んだ。

くしばらくお待ちくださいく

「あゝ、未恐ろしい威力だった…。」

「…チツ。」

舌打ちしやがったよコイツ…。だがどうにか先日のは水に流してもらえた。今は互いの軽い自己紹介をすることにした。

「私、なのは。高町なのはっています。あと、私のデバイスのレ
イジングハート。」

《初めまして。》

「僕はユーノ・スクライアです。」

『高町なのは』と『レイジング・ハート』、それに『ユーノ・スクライア』。っと。なのはは地元の人間っぽいがユーノはどうみても違うな…まあ、いいか。

「私はフェイト。フェイト・テストロッサ。そしてこっちが私の使い魔のアルフと、デバイスのバルディッシュ。」

「さっきも会ったけどね。よろしく。」

《以後お見知り置きを。》

「んで、俺はファイア・レイガードだ。あの時はホントにスマンかった…。そしてさっきも名乗ったが部下兼相棒のリリアだ。」

《どうも。》

簡単な自己紹介を終え、身元や素性の詳細うんぬんは今度にして、今はとりあえず先にジュエルシードの封印をしておこうということ

とになった。

「ところでユーノ。」

「なんですかフィーアさん？」

「お前って封鎖結界張れるよな？」

「?…ええ、張れますけど。」

「そうか、分かった。」

アルフと二人がかりで張ってもらえばそれなりに頑丈な結界ができる筈。そうなれば、もう少しだけ…

本気が出せる。

《ッ!? フィーア!!》

「どうした？」

リリアが珍しくうるたえた声を出す。しかし次の言葉は全員を驚愕させた。

《ジュエルシードの反応が消えました！！》

「「「「なっ！？」「」」」」

「っ！！先に行ってるぞ！！」

言うや否やフィアは一人走りだす。

「ちょっと待つてよ、フィア！！って速っ！！」

走り出したフィアのスピードは、魔法で身体能力を上げたフェイトを凌駕していた。あっという間にフェイト達は置いてかれてしまった。

そして、ついにフィアは先程までジュエルシードの反応があった場所に辿り着く。しかし、そこには二人の先客がいた。片方は地に倒れ伏せ、もう片方は茶色いスーツを着ており、魔力反応が無くなったジュエルシードを片手に倒れている男を見おろしていた。そし

て、男はゆつくりと視線をこちらに向け、口を開く。

「…ほう、新手か。」

その男の髪の色はグレーだった。

「昔から懲りない奴らだな、貴様らは…。」

その男の瞳は緑色だった。

「だが、いいだろう！！何度でも来ると言っなら、何度も叩き潰してみせよう！！」

その男の殺気は自分に匹敵していた。

「かかって来るがいい！！目の前の敵は全て我が屠る、ただそれだけだ！！」

闇に恐れられし、怪物二人の戦いが今、始まろうとしていた。

第十七話 魔獣と魔王と魔人（後書き）

次回激戦

第十八話 本能のままに（前書き）

キリが悪いので前置きと本格的戦闘に分割。

第十八話 本能のままに

ユーノ side

フィアに置いて行かれたユーノ達は、ただひたすらジュエルシードがあつた筈の場所へ向かつていた。

「フィアがこんなに足が速いとは思わなかった…。」

「よく考えたら、いつどこにいてもジュエルシードのある場所にすぐ来たよね…。」

フィアのスピードに半ば全員驚く中、ユーノはジュエルシードの反応が消えたことについて考えていた。

（ジュエルシードは一度暴走すれば誰かが止めない限り暴走は終わらない筈…。なのに、反応が無くなったということは…まさか、まだ彼女達以外に誰かが集めているのか！？）

そう推測をたてた瞬間…。

ドゴオオン！！

轟音と共に、黒い何かが周囲の木々をなぎ倒しながら飛んできた。

「な、何なの！？」

なのはが驚きの声を上げる。そして、フェイトとアルフも驚愕の表情を浮かべていた。しかし、なのはが飛んできたモノが何なのか判らなくて驚愕したのに対し、フェイトとアルフは飛んできたモノが何なのか判ってしまい驚いていた…。何故なら、ソレは黒いフード付きジャンパーを着ており、右手に刀とサーベルが混ざったような剣、左手に銃身がやや長いピストルを持っていた…。

「フイーア！？」

赤みを帯びた茶髪の青年、フイーアがフェイト達の足元に倒れていた。

みらい side

さっきまでジュエルシールドがあつた場所はすっかり様変わりしていた。周囲の木々は真つ二つに斬られたものや、根元から折れたもので溢れ、地面にはいくつかのクレーターができていた。そんな中、ひとつの人影が残っていた。

「クソッ… やつてくれる…。」

先程フィアをブツ飛ばしたみらいは片膝をつき、自分の愛銃『オルギニス』で体を支えながら忌々しそうに呟いた。銃剣と刃による打撃斬撃の応酬のさなか、フィアの蹴りがみらいの側頭部を捉えたのである。しかし、蹴られると同時にみらいも全力でフィアを殴り飛ばした。向こうの彼方まで吹き飛ばしてやったのだが、やはりフィアの蹴りは強烈でかなり効いたようである。まだ頭が揺れる…。

「ここしばらく“奴ら”みたいな三下しか相手をしてなかったせい
か、少々鈍ったか…。」

チラリと倒れている男に目をやる。みらいは、はやて達と共に旅館でとくに就寝していたのだが、先日から何度も確認している例の魔力反応を旅館の付近で感じてしまったのである。流石にこの距離は近すぎると思い、はやてのことは最近すっかり仲良くなった『リゼアリア』に任せて、大惨事に至る前にこっそり処理することにしたのである。

目的地に着くと例の反応物が魔力を放出しており、危険な雰囲気

出していた。即座に自分の魔法で強制的に制御したのだが、そこへ見覚えのある格好をした人物が現れた。2年前から八神家に散々ちよっかいを出してきたどこぞの組織の人間と同じ格好だった。

「そいつを渡しても」(バキッ！！)

。」

「だが断る。」

見慣れた敵だったので迷わず速攻で顎に拳を叩き込み、沈黙させた。その矢先にジュエルシードの反応が消えたために警戒心丸出しのフイーアが現れたのである。それを敵意と感じたみらいは、フイーアを奴らの仲間とほぼ断定してしまい戦闘を開始、今に至る。

(それにしても、今の奴は随分な手練だった…。もう少し、続けたかったものだが…。)

ようやく頭痛も治まり、みらいはその場を去ろうとするが途中で足を止める。その表情は歓喜を示すように、うつすら笑みが浮かんでいた。そして、振り向く。

「殺す気でやっただがな…。」

「こっちも首を飛ばしてやっただつともりだったんだけどな。」

奴は…、久々の“強敵”はピンピンしていた。まだ、この時間を楽しむことができる。こちらは最低限の用事は済ませてある。気にするべきは、朝日のみ。だが、生憎まだ夜は続く。はやてが目を覚ますまで時間はまだある。なにより、目の前の存在は奴らの仲間（誤解）。今帰る理由はない！！

「続きといこうか…。」

「望むところだ…。」

「ちょっと待って下さい！！」

二人のやり取りに割って入る声、ユーノの声が響いた。フェイト達のもとにブッ飛ばされたフィアはあの後すぐに起き上がり、そのままみんなと一緒にこっちに來たのである。ユーノは言葉を続ける。

「あなたがそのジュエルシードを封印したのですか？」

「何だ？喋るイタチ？…ふむ、これはジュエルシードと言うのか。確かにコレは俺が暴走を止めた。」

「ソレはとても危険な物なんです！！なんの目的があつて集めてるんですか！？」

みらいに問い詰めるユーノ。しかし、彼らにとって意外な返事が返ってきた。

「む？俺はこんなものいらぬ。」

「「「「え？」「」「」

「俺はただコレが危険なのは分かったから始末しにきたただけだ。逆に問うがお前ら、“アレ”はお前らの仲間か？」

そう言ってみらいが指差す方を見る。そこにはユーノ達には見覚えのない、フィーアには心当たりのある格好をした男が倒れていた。

「…いえ、知りません。僕の仲間は今はなのはだけです。この人たちは僕達に今後協力してくれるかもしれない方々です。」

お互いの素性と事情は明日説明しあう予定でしたが…そう言っユーノは締めくくった。それに対しみらいは少し考えるようにしてから口を開く。

「なるほど、嘘ではないようだ…。俺もこんな物騒なモノはいらぬ。悪用するわけでもなさそうだし、欲しいのならくれてやる。」

「ありがとうございます。」

「ただ、ひとつ頼みたいことがある。」

「え？」

ジュエルシードをユーノに投げ渡し、おもむろに言い出す。ファイアの方を見ながら…。

「不完全燃焼で帰りたいくないのでな…、少し“さっきの続き”がしたい。」

うつすら笑みを浮かべてそう言った。ユーノは目が点になり、なのはは思わず叫ぶ。

「な、なんですか！？話し合いも済んで、もうお互い用は無いでしょ！？」

「いや、本来ならここで帰ったのだが…、なにぶん久々に“本当の意味で”戦えそうなのでな。」

ここ最近はやや一方的な“奴ら”の駆除作業しかしておらず、戦いと呼べるようなものじゃ無かった…。

だが、今、目の前に居るのは…。

「いいだろう、俺もまだ物足りなかったところだ…。アルフ、ユニノ、結界を頼む。」

本物の敵、本物の強者、本物の戦いが目の前にある。

「本当に今更だが、“お前も”あそこでのびてる奴の仲間では無いんだな？」

「…正体に心当たりはあるが、俺の仲間は今はこの子達だけだよ。」

そう言ってフィーアはフェイトとアルフ達の方に視線をやる。

「そうか、さっきは勘違いしてすまなかった。」

「気にしなくて結構。では、色々と仕切り直しといこつか？結界張ってもらったから“お互い少し本気出せる”ぜ？」

「ありがたい。」

感じるのは歓喜、高揚、闘志。ならば、することはただ一つ……。

「さあ、楽しもう（殺し合おう）かつー！！」

今はただ獣の如く、本能のままにー！！

第十九話 たった2人だけの戦場（前書き）

やっとこさ激戦スタート。みらいがなんであのシステムを持ってるのかはまた今度で…。

第十九話 たった2人だけの戦場

なのは side

夜の森を二つの影が舞い踊っていた。片方は魔剣と拳銃を、もう片方は銃身に刃を装着した小銃を嵐のようにぶつけ合い、斬り合い、撃ち合った。そのたびに、二人に『邪魔』と言われて大分遠くに離れ、尚且つ上空から眺めているフェイトやなのは達のもとにまで衝撃の余波が届いた。

（本当にアレはさっきの人なの…？）

さっきまで自分の怒りにすっかり怯えていた人間とはまるで思えなかった。あの人、フィーアは確実に自分より強い。

「えっと…フェイトちゃん、フィーアさんって何者なの？」

「…別世界の軍人だって言ってた。」

「え？」

「彼は次元漂流者なのか？」

ユーノの問いかけにフェイトは首をコクリと頷かせる。不意になのはは忘れかけていた疑問を思い出す。

「そういえば、フェイトちゃん達はなんでジュエルシードを集めているの？」

「そ、それは……。」

フェイトは焦る。元々隠し事も嘘も基本的に苦手である。しかも、さっきの軽い自己紹介の時に分かったのだがこのフェレット、ユーノは実質ジュエルシードの持ち主。本人の目の前で自分が母親の命令で集めており、しかも母親の目的を知らないことを言っているものなの、悩んでしまうのである。

だが、そんなフェイトを救うかのように、

ズツドオオオオオオオオオオオオオン！！

明らかにさつきまで規模が違う爆音が響いた。それにつられさつきの会話を中断し、全員が視線をそちらに移した。フエイトは話がそらせてホツとしたが、同時にフィーアが心配になった。

（フィア、大丈夫だよね…？）

フィア side

「随分と物騒じゃねえか…ジュエルシードよりあんたの方がよっぽど危ねーよ。」

「人のことを言えるのか？お互い様だろう。」

互いに流暢な会話をしているが、その最中も二人は斬り合っている。鉄と鉄がぶつかる音が絶えることなく響く。

ギギギギギギギギギギギギギギギギギン！！

あまりに速すぎて音が一つになりかけていた。みらいは咄嗟に間合をとり、銃剣『オルギニス』の銃口をフィアに向ける。それに反応してフィアも左手のリニアガンをみらいに向ける。二つの銃口が同時に火を噴く。

ドゴオオン！！

放たれた二つの銃弾は互いにぶつかり合い、爆音と共に消滅した。衝撃の余波で二人の間に砂煙が立ち上る。みらいはその場を動かずにオルギニスを構える。それと同時にフィーアが煙を突きぬけ、“二刀”で斬りかかる。

ガキイン！！

みらいはそれをなんなく受け止める。だが、フィーアが左手に持つてるものを見て眉を顰めた。

「…随分と便利で厄介な物をもっているな。」

「いいだろコレ？欲しけりゃ創ってやろうか？」

フィーアの左手の武器、リニアガンの銃身が長さ30？程のプラスマの刃を纏っていた。

「オラア！！」

「ッ！！フンッ！！」

二刀になったことにより激しさを増したフィアの斬撃がみらいを襲う。しかし、みらいも一步も引かず、銃剣格闘でそれを防ぎ、かわし、いなす。その最中、みらいの頭上にリニアの刃が振り下ろされる。みらいはそれを防ぐが、

「もらった！！」

「ッ！？」

フィアが魔剣を魔銃に変形させ、至近距離からみらいに魔弾を放つ。しかし、それをみらいは体を強引に捻ってかわす。

「なっ！？この距離でよけた！？」

「いつまで呆けている！！お返しだ！！」

ボコオオン！！

「うおっ！？」

体制を立て直したみらいが銃剣を力の限り振り下ろした。フィーアは慌ててそれを避ける。“魔法を使ってない”にもかかわらず、その威力は地面にまた一つクレーターを増やした。距離が開き、互いににらみ合いながら息を整える。同時に、相手の力量を計る。

（魔力を使わないであの身体能力、俺の気孔術と同じたぐいか…。
ジュエルシードを封印できるってことは魔法もかなり使えるんだろ
うな…厄介すぎる。）

（上級の魔剣とそれに匹敵する脅威を持つ電磁銃、加えてそれを両
方同時に使いこなすだけの技量…これを脅威的と言わずに何と言う
…。）

二人は互いに相手がかなりの実力者ということを改めて認識しはじ
めていた。そして、相手がまだまだ全力を出していないことを…。

「…準備運動にしては長くないか？」

「それもそうだな…。では、こちらからやらせてもらおう!!」

そう言いみらいは、ボルトアクションでオルギニスから薬莢を弾き
出す。それを見た瞬間、フィーアの顔は驚愕一色になった。その弾
き出された薬莢と、それと同時にみらいの魔力が爆発的に増えたと

いう現象に見覚えがあった、リリアにいたっては半ば熟知すらしているとも言える。何故なら…。

《ベルカ式のカートリッジ・システム！？》

「あんたまさか『アルテミア王国』の人間か！？」

「ッ何故その名を！？貴様ら何者だ！？」

…まさか、目の前の人間が自分の同類、しかもお隣さんと呼んでも差し支えないような奴とは夢にも思わなかった。喜ぶべきなのか、呆れるべきなのか…。

「…これ見りや分かるんじゃない？おい、リリア。」

《了解。》

そう言った途端フィアの服装がこの世界に来た時の軍服に変わった。それを見たみらいは一瞬固まる。

「そうか…、貴様『ベルフィア連邦』の民だったのか。よもやこのような場所で『同盟世界』の人間と会えるとは思ひもなかった

ぞ…。ちなみに俺はこういう身分だ。」

パチンと指を鳴らすと、今度はみらいの服装が変わった。色はそのままだが、ただのスーツから貴公子が着るようなシックなナイトスーツへとその形を変えた。どこから出したのか立派な羽根つき帽子もかぶっていた…。そして、その格好にもフィーアは見覚えがあった。

「なんてこった…。『アルテミアの城壁』と名高い『王家直属近衛銃士隊』と戦っていたのか俺は…。」

「よく言う…階級が戦闘能力を表すと言われる連邦で“その若さでその地位”とは末恐ろしいことこの上無いわ…。で、この空気（雰囲気）でまだ続けるか？」

「うーん、今のカミングアウトで微妙な気分なのは確かだが…あんたもそのミナギツタ魔力は放出したいだろ？それにまだ俺の、連邦の力を見せたいんだが？」

「そこまで言われたらやるしかあるまい…。感謝する。」

「なに、俺もただの戦場好きの馬鹿にすぎないだけさ。てなわけではリア、もう少しよろしく。」

《了解。》

そう言つてリニアガンを魔剣ヴィルガロムで“斬つて霧散させた”。当然、みらいは自分で自分の武器を斬つたフィアの行動に驚く。

「なんのつもりだ？」

「俺のヴィルガロムは魔剣と魔銃の二種類に変形できる。だが、少しレパートリーに乏しい気がしてね、変形する種類を増やすことにした。このリニアガンに搭載した科学プログラムで。」

言うや否やフィアの右手には魔剣でも魔銃でもなく、機械的なアサルトライフルが握られていた。

「…文字通り、科学と魔法の融合というわけか。なるほど、連邦の『魔道科学』は伊達では無いな。」

魔力をダダ漏れさせながらみらいはオルギニスを構える。フィアはライフルになったヴィルガロムを構えながら周囲に『黒羽』を展開させる。

「では、もう少しばかり。」

「お付き合い願う!!」

言葉と共にみらいはカートリッジシステムにより魔力を高めた魔砲を解き放つ。

「【天河瀑布】!!」

ゴォウ!!

轟音と共になのはの【ディバイン・バスター】を凌ぐ魔力の奔流がフィアに迫る。しかし、それを持ち前のスピードでフィアは避ける。同時にアサルトライフルが魔弾を雨あられのごとく放つ。みらいは自分の魔力を地面の土や石を混ぜながら個体化させそれを防ぎ、忌々しそうに口を開く。

「やはり、魔力と実体の両方の性質を持っているのか！厄介な!!」

「初見でそんな防ぎ方したあんに言われたくない!!」

もし、なのはやフェイト達のようにただの魔力障壁で防いだ場合、魔力の部分は消されるだろうが実体の部分、ただの鉛弾の部分は貫

通したはずだった。故に、フィアの弾丸を防ぐには同じように魔力と実体を混ぜた防御が恐ろしく固い実体の防御が有効なのである。

「【サーベル】!!」

フィアはライフルを細身の剣に変え、みらいに斬りかかる。それを受け止めようとするが、悪寒が走り咄嗟に後ろに下がる。

ドカアアン!!

さっきまでみらいが立っていた場所が突然爆発した。よく見るとフィアの後ろに三脚の付いた筒状の物が上を向いていた。

「迫撃砲…?」

「御名答。そして…終わりだ!!」

ポンポンポンポンポンッ

戦場に似つかわしくない間の抜けた音が響く。しかし、何の音か分かったみらいは顔を青ざめさせる。そう、フィアがいつの間にか『黒羽』で造って設置した迫撃砲が一斉に発射された音なのである。

しかし、みらいは迷わずフィアに向かって走り出す。

「ゲッ!？」

「馬鹿正直に全部防ぐと思ったか、馬鹿め!!」

てつきりさっきの防御で全て防ぐものだとばかり思っていたためフィアは焦る。だが、迷いは一瞬で切り捨て、迎え撃つ。剣と銃剣が再度ぶつかり合い、二人の動きが止まる。

それとほぼ同時にフィアの砲弾が、少し離れたとは言えほぼ近距離と大差ない場所にに着弾し、爆炎が二人を飲み込んだ。

第二十話 休戦（前書き）

今回、超都合合わせなお話…グダグダかもしれません…。

第二十話 休戦

フエイトside

さっきまでと明らかに桁違いな爆発が起こり、ついにアルフとユーノの結界にも限界がやってきた。このままではマズイと思い、今フエイト達は二人の戦闘を止めに向かっていた。しかし、

「ねえ…、私達であの二人止めれるかな…？」

「…無理じゃないかい？」

遠くから眺めていても分かるぐらい異常に強い二人を自分達なんかで止めれるのかと問われると、全く自信が無かった…。

「フエイトちゃんが言えば、フィーアさんも止まってくれるんじゃないかな？」

「私もアルフも、フィーアがあんな風に戦つてるところなんて初めて見たよ…。だから、自信ないよ…。」

よく考えれば、まだフィアと出会って一週間も経ってないのだ。分かってることといえば、異世界の軍人で、陽気で、めちやくちゃで、強くて、なんだかんだいってお人好しということ位である。もっとも、出会ってたった数日の人間と仲良くなれて、尚且つそこまですべて知っていれば充分な気もするが…。そんな中、バルディッシュが口を（無いけど）ひらいた。

《マスター、リリア殿から通信です。私を経由して喋っていただきます。》

「え？」

《どうもフェイトさん、お待たせしました。やっと終わりましたよ。》

「よかった…、結界壊れそうになってたんだよ？」

《ええ、承知してます。それを伝えたら二人とも渋々ながら戦闘をやめてくれました。》

そういえばリリアが魔法を高レベルで理解できるのを忘れていた…。結界の耐久度もそれなりに分かっていたのだろっ。それにしても…。

「相手のあの人はともかく、フィーアがあんなに戦いが好きなんて知らなかったよ…。」

《すいません。ですが、大目に見てやってください…彼は…これでは生を感じることができない体なんですから…。》

「リリア…?」

今のリリアの言葉に、フェイトもアルフも少し違和感を感じた。まるで、フィーアが“ただの戦闘馬鹿では無い”と言ってるように聴こえたのである。なにか深い事情がありそうな気がしたので、二人はくわしく訊こうとするのだが、

「オイ、余計なことは喋んなよ?ここは俺達の世界じゃねえんだ。」

《失礼。》

「ほう、疑似人格では無く本物の自我が存在するのか…ますます連邦は侮れないな。」

フィーアとみらいが現れた。今の二人の格好は戦闘を始める前の普段着に戻っている。二人の表情は疲労に染まっていたが、同時に充実したような顔をしていた。

「いや、付き合わせてすまなかったな君達。それじゃあジュエルシード集め、引き続き頑張りたまえよ。」

「待つて下さい！！あなたも手伝ってくれませんか？」

そのまま帰ろうとしたみらいをユーノが引き留める。

「うゝむ、今更だが俺はてっきりこの騒動を静めれる人間が自分しかないと思っていたから来たのであって、ムザムザ事件に巻き込まれるような真似はしたくないのだが？（はやてを巻き込む可能性もあるし…。）」

「そこをどうか！！もし手遅れになったらこの世界中の人が巻き込まれてしまうかもしれないんです！！」

「私からもお願いします！！手伝ってください、お願いします！！」

ユーノとなのはに頭を下げられ、みらいは困ったように頬をかく。みらいとて近衛銃士という名の騎士なのだ、子供にここまで頼まれて断ったら騎士の名折れ。そもそも、大の大人がこんな危険なことを子供達に任せっきりにすること自体間違っている。そう結論付け、みらいは前言を撤回する。

「分かった、協力しよう。」

「ッ！ありがとうございます！！」

二人は嬉しそうにお礼をみらいに言う。そして、みらいは視線をフ
ェイト達に移す。

「ところで、君たちはこの二人と事情が違うのかい？」

「えっと…。」

「俺たちは魔法的にジュエルシードに興味が沸いたから集めていた
だけだ。」

（フイーア！？）

みらいの問いに言葉を詰まらせかけたフェイトを余所に、フイーア
がサラリと嘘をついて助け船を出す。無論、アドリブである。

（いいから合わせろ。アルフも。）

（う、うん。）

（分かったよ…。）

「ほう、では持ち主の彼から盗ろうとしたのか？」

みらいは若干睨みをきかせながら訊いてきた。その視線を軽く受け流しながらフィーアは答える。

「まあ、結果的にそうなるな。でも、まさかジュエルシードがここまで危険で、しかも持ち主がいたのは知らなかったさ。もつとも、本音言っとソレはまだ欲しいけどな…。」

言ってユーノの持つてるジュエルシードを指差す。思わず身構えるユーノとなるのは。しかし、フィーアは言葉を続ける。

「だが、流石にこの世界が滅んでしまうようなことはいただけない。だから、所有権だの分け前だのは一旦忘れて、彼らと協力してさっさと全部封印することにしたんだよ。」

咄嗟に喋ったデマカセ、しかし嘘四割真実六割なので妙に信憑性が

あった。なにより、フィアの目的はこの場を凌ぐことにある。今この場を切り抜ければあとはどうとにでもなる。そして、フィアの口八丁は功を征した。

「…分かった、今は信じよう。さっき、そのイタチモドキ「ユーノです…」。「…ユーノが明日改めて話し合う予定だったと言ってたな？」

「（おつしゃ！！）ああ、その予定だ。そこでお互いの素性と事情を話し合うつもりだな。」

「では、俺も参加させてもらう。そこで色々情報交換といこうじゃないか“ベルフィアの兵士”よ。」

「あいよ、“アルテミアの騎士さん”。」

お互いにこの世界へ来た経由を話せよ？という意味合いを込める。その会話に事情を知らないのはとユーノは頭にハテナを浮かべ、フィアの素性を少し知っているフェイトとアルフは、みらいがベルフィアの名前を出したことに驚いた。

「（あとで二人に事情教えとくか…。）それじゃあ、また明日…そういう名前なんだっけ？」

「今は、『八神みらい』と名乗っている。本名の方が聞きたいか？」

「いや、その名前が気に入ってるなら別にいい。八神と呼ばせてもらおう。」

「すまん。因みに、一般人の家族がこの町にいるんだが…無闇に巻き込んだら俺がこの世界を滅ぼすぞ…？」

さっきの戦闘時以上の殺気を溢れさせ、みらいはそう忠告した。フエイトとなのは、ユーノは震え上がり、勘の鋭いアルフは気絶しそうになった。フィアもこれは本気だと感じ、肝に銘じ真剣に答える。

「俺の家名に賭けて約束する。あんたの家族は決して巻き込まず、決して傷つけない。」

「…感謝する。そうだ、俺もお前の名前を知らなかった…名前はなんて言う？」

「『フィア』だ。『フィア・レイガード』。」

それを聞いた瞬間みらいの顔が凍りつく。

「っ！？…それはまた、とんでもない家名を賭けてくれたな…。」

「故に約束は必ず守る。」

「ああ、信じるとも…。では、そろそろ帰らしてもらおう。また、明日な。」

そう言っつてついにみらいは旅館に帰っていった…なのはと一緒…。

「なんでついてくる…？」

「え？私もあの旅館に家族で来てたんですけど…。」

「あ、そうなの…。」

そして、残ったフィーア達も家に向かって帰り始めた。それを横目で見やりながら、みらいは一人心中で呟く。

（確かに約束は守ってくれるだろうが…やはり、なにか隠していたろうな。まあ、どうせまた明日会った、その時に洗いざらい教え

てもらっぞ？『黒鋼くろがねの不死鳥』よ…。」

故郷にさえ轟くその異名を携えし男のことを考え、魔人は笑う。

第二十一話 今後の方針（前書き）

次回、ギャグ無しで原作介入予定。原作キャラが今回ほとんど出ないのはその布石なんで許して…

第二十一話 今後の方針

??? side

ベルフィア連邦政府軍統合監察部隊本部にて

同盟世界抜きでも全体の規模が洒落にならないベルフィア連邦軍、その大軍勢を監視、統括するのがこの統合監察部隊の役目である。その部隊の本部の一室で、二人の男が会話をしていた。二人とも将校の軍服を着ており、片方は部屋の主ゆえ執務椅子にすわり、もう一人はその部屋の主に執務机を挟み、立ったまま事の報告を行っていた。

「以上が、先日の決定事項であります。“レイガード大将”。」

「ふむ、仕方あるまい…報告御苦労、“ヴェルシア大佐”。」

部屋の主、『トールス・レイガード』大將は自分の息子の元副官、『リオル・ヴェルシア』大佐の報告を聞いてそう答えた。トールス大將のその態度に眉を顰めるリオル大佐。報告の内容のわりに随分と軽い反応なのである。何故なら…。

「息子の搜索が“中止”になったわりにはアツサリしすぎではありませんか？」

そう、先日任務中に行方不明になったトールラス大将の息子、フィアの搜索が中止になったのである。主な理由は、行方不明になった場所そのものが消えたため、搜索のしようが無いというものだった。そのためリオルはフィアの抜けた穴を埋めるために大佐に昇進したのである。本来はフィアの階級をそのまま受け継ぐ予定だったがリオルは辞退した。いつか、フィアが戻ってくると信じて…。

「…報告は以上かね？大佐。」

「…ハイ、以上です。」

言った途端、トールラスは指をパチンと鳴らす。すると、トールラスの執務室の窓はシャッターが閉まり、ドアに鍵が掛かかり、もはやこの部屋に誰も入れなくなり、誰も盗み聞きできなくなった…。

「…説明してくれるんですか？“トールラスさん”。」

「ああ、お前なら構わないよ、“リオル”。」

互いに口調と呼び方を多少なり砕けたものにし、呼び合った。リオ

ルはフィアの副官であるが、それ以前に親友なのである。そのため、プライベートでもトールラスと交流が多少なりあるのだ。今の二人は上官と部下でなく、一人の男の友と父である。トールラスは机に常に置いてあるコーヒーを淹れ始めながら話し始めた。

「実はな、フィアが行方不明になった時に…部下の一人が余計な気を使わして『ベルノア』にそのことを報告したんだ…。」

「御夫人にですか!？」

リオルは驚愕した。『ベルノア・レイガード』はトールラス大将の妻であるが、一般人である…血筋以外は…。

「それでな…、“御隠居”を脅…お願いして、フィアを探してもらった。」

「……自分の父親を脅したんですか、あなたの奥さんは…。」

「出会いがしらに言われたよ、『俺はどこで娘の育て方を間違えた?』って…。」

もう、リオルは苦笑いするしかなかった。トールラスは会話を続けながら淹れたコーヒーに“白いの”を混ぜながら話を続ける。

「それで今朝連絡をくれてな、一応見つけたそうだ。時空の彼方だから簡単に迎えに行ける場所じゃないが、ピンピンしてるらしい。いつか連れて帰ってきてくれるとよ。」

「時空の彼方の人間を探せて迎えに行けるって、相変わらずのチートっぷりですね…いや、そんな人を脅せるベルノアさんの方が凄いのか…。」

内容は多少なり衝撃的だったが、なにはともあれ親友の無事が分かりホッとする。自分を含め、事件の当事者はあまりにシヨックが大きすぎ、しばらく任務に支障が出るほどだった。これ以上の混乱を招かないためにも、一部の者たちを除き連邦軍全体ではフィーアは単独で極秘任務に出たことになっている。

「伊達に『不死鳥』と呼ばれていないということですね。流石は…。」

“あの世から戻された男”

「そもそも私の息子で、あの人の孫だぞ？これぐらい当然だ、心配など必要ない。」

そう言つてトーラスは出来上がったコーヒーを口に運ぶ。それを見てリオルは苦笑を浮かべる。

「…そんなこと言ってますけど、実際はさっきまで動揺してましたね？」

「…何のことだ？」

そのまま“白いの”を混ぜたコーヒーを一口飲むトーラス。

「トーラスさん…それ、ミルクじゃなくて“修正液”混ぜてましたよ…。」

「ブフォッ!？」

口からコーヒーを噴き出したその姿は、親子でそっくりだったそうだ…。

フイアー side

一方、こちらは海鳴市で知る人ぞ知る名店『翠屋』。今日はそこにジュエルシードの関係者で集まる予定だったのだが…。

「…お互い、相手が子供なのを忘れてたな。」

「…全くだ。」

今、待ち合わせの場所にはフイアーとみらいしか居なかった…。昨日の夜、それも深夜までずっと起きてたのに、尚且つ今日旅先から帰ってきたばかりのお子様組はもう疲れきっており、ユーノの『すいません…やっぱり…今日は無…理…（ガクツ）』という念話を最後に音信不通になった。フェイト達も眠そうだったので、二人はマシオンで休ませてフイアーだけ来たのだった。

「しかたない、先に同盟世界の人間同士の話をしよう。」

「そうするか。じゃあ、俺から話s「あ、桃子さん、オススメケーキ詰め合わせを一つ用意しといてください。」…聴く気はあるのか？」

「当然だ。」

「あら、みらいさん。はやてちゃんへのお土産？」

「ええ、はやてもこのケーキが大変気に入ったようで…。」

「…（???）。」

因みに、今回リリアは喋らない。流石の彼女も同盟世界の人間と主人の会話に口を挟むような真似はしない。そしてフィーアは（微妙な表情で）語る。自分は任務中にこの世界へ飛ばされたこと、そこで最初に会った人間がフェイトとアルフだったこと、そして行動を共にしているうちに今に至ると。先日話さなかった事は伏せて…しかし…。

「…それで？」

「え？」

「とぼけるんじゃない。ただ興味が沸いてジュエルシードを集めるなんて大嘘、誰が信じるか。”あの程度のもの”、連邦に腐るほどあるだろうが。」

「…やっぱり、バレたか。」

観念したフィアは昨日伏せた部分を話す。フィアはみらいはしっかりと説明すれば話しの分かる人間であると感じていたので、どうにかなるだろうと思った。そして、

「つまり、フェイトとか言うあの子はその母親の命令で集めているんだな？」

「そして俺もフェイトも、その母親の目的を知らねえ…。だが、ジエルシードをそのまま放置するのはユーノの言うとおり危険だから、今はとりあえず一緒に集めている。もっとも、一番の理由はほっとけなかったって言うのもあるが…。」

一通り話し終え、一息つく二人。そして、みらいが再度口を開く。

「その母親の目的の予想はできているのか？」

「いや、会ってないから全くわからねえ…。娘のフェイトでさえ定期的な連絡以外させないそうだ。もしかしたら、本当に興味があつて集めてるのかもしれないし、世界を滅ぼす気かもしれない…。まあ、そのうちその定期連絡があるらしいからその時にどうにかする。」

「そうか…そっちは任す。」

フィーアの話はとりあえず終わり、次はみらいが話す番になった。

「俺は二年前、近衛銃士を辞めて旅をしていたんだが…気づいたらこの世界に飛ばされていた。」

「おい、雑すぎるだろ…。」

「仕方あるまい、事実なんだから。歩いていたらいつの間にか今の居候先の家の前にいたんだ…。その後、色々あって今は家族の一員として暮らさせてもらっている。」

「で、この世界の住人として2年間平和に暮らしてたら俺達が来た、と？」

それにみらいは微妙な表情を見せる。フィーアは不審に思い説明を促す。

「この世界の住人として生きているのは認めるが、それ程平和ボケ出来無かった…。昨日、俺の足元に転がってた奴がいたよな？」

「ああ、覚えてる。」

二人は昨日戦闘をやめた時に、みらいが気絶させたその男も連れて帰ろうとしたのだが、フィアの時のように転移して逃げたあとだった。そのあと、八つ当たりで木を二、三本へし折ったのは御愛嬌である…無理か…。

「あいつと同じ格好した奴が二年前から何度も俺と家族を襲って来てな…まあ、その度に返り討ちにしたんだが、去年の年末に12人同時に叩き潰したらしばらく来なくなつた。」

「…こういう時って、なんて言えばいいんだ？」

「知るか。それで、お前はあの時『仲間では無いが心当たりがある』とか言ってたがどういうことだ？」

「俺も似たような奴に襲われた。」

そしてフィアは自分がこの世界に来て二日目に奴らの仲間と思わしき連中に襲われたことと、それが時空管理局の暗部の類ではないかと推測していることを。みらいは考え込むようにして口を開く。

「ふむ、時空管理局の暗部か…。確かに、管理局との共通点と矛盾点を考えると納得がいく。」

「あんだ、管理局のこと知っているのか？」

「俺の友人の知り合いに管理局員がいるそうだな、少なからずその友人に教えてもらった。先言つとくが、そいつは奴らの仲間じゃないからな？」

因みにその友人、嘘は言っていないが友人本人が管理局員なのをみらいには教えてない…。

「分かったよ。じゃあ暗部（仮）の奴らはあんだに任す。」

「任せろ。では一足先に交渉成立ということだ。」

二人はがっしりと握手を交わす。傍から見れば会社員が契約とったような光景に映ったかもしれない。

「なのはとユーノには俺が説明しておく。お前はフェイトとアルフのところに帰って説明して来い。」

「ああ。でも、できればフェイトの母親の件はまだ内緒にしておいてくれないか？」

「何故だ？」

「ちょっとないやな予感がするんだ……。」

「……分かった、一応協力するのなら問題ない。好きにしろ。」

「すまない。では、今日はこれで。」

そう言っただけで、フィアは店を出てみらいと別れた。いつの間にか暗くなった夜道を歩いてフェイト達のもとへと向かう。そんな中、リリアが口をついに開いた。

《何故内緒にしてもらったのですか？》

「……さあな、自分でもわからん。ただ、俺の勘がこれは俺が解決しろと言ってる気がしてな。」

あの夢を、自分の過去を思い出さす何かが待っていると、そ

う囁いてる気が…。

その刹那、リリアが何かに気づき、叫ぶ。

《ッ！！フィア、大変です！！》

「どうした？」

《ジュエルシード反応です！！あと、フェイトさんの反応が！！》

「何…！？あいつ疲れて寝てたんじゃないのか…アルフはどうした！？」

《分かりません！！しかも、ジュエルシードが本格的に暴走始めます！！フェイトさんが一人で封印しようとしてますが、無理そうです！！》

「ッ！？ヤバイ、急ぐぞ！！」

海鳴市、三度目の夜の大騒動が始まろうとしていた。

第二十二話 闇は囁く（前書き）

だれか、助言くだしやい…そして、いつもより長い…しかも分割…

第二十二話 闇は囁く

フエイトside

く少し時間を遡るく

旅館付近でジュエルシードの反応を確認したのが夜。フィアとみらいの試合（死合い）観戦が真夜中。そして、全て終わらせて家に着いたのが深夜。ただでさえ、ジュエルシードの回収で寝るのが最近遅かったフエイトとアルフにとってこれは流石にキツかった…。特に、昨日の試合のために結界を張り続けたアルフはもう限界だったようで、すでに爆睡中である。そのためフィアはフエイト達を休ませて、明日の…実質今日のなのは達との話し合いは1人で行くことにした。まどろみの中、フエイトはフィアのことを考えていた。

（フィアって、結局どんな人なんだろう…。）

無論、見た目や素性のことでは無い。初めて会った時や日常ではちよつと抜けた感じの人だと思った。けれども、ジュエルシードの暴走体やみらいと戦う時はまるで別人のように様変わりする…。いや、正確には違う。日常と戦闘時では無く、“常に別の人間性がチラついている”気がするのだ。それこそ、理性的なフィアと本能的なフィアの二人と同時に会話していると感じる時がある。

（でも、どっちも優しいのには変わらないし…どっちもフィーアなんだよね。それに、私の気のせいなだけかもしれない…。）

なにかと軍人だからと言って手伝ってくれるフィーア。でも、フィーアは自分達と一緒に買い物に行ったり、食事に行ったり、遊びに行ったりとジュエルシードと関係ないことでもよくしてくれる。こんなに仲良くなれた人はアルフとリニス以外では初めてだった…。

（フィーアとも、ずっと一緒に居たいなあ…。）

私にはいなかった父親や兄。もし、いたらフィーアに感じたこの気持ちと同じような気持ちになれるのかな…？ずっと一緒にいたいと思えるのかな？……何にせよ、フェイトはアルフ同様フィーアに心を許していた。

（よし！とにかく、今日は休んで明日も頑張ろう！）

そう気合を入れ、今は休むことにした。そして目を閉じ、意識を手放そうとしたその時…

（本当にそれでいいの？）

瞼を閉じ、真っ暗な世界に入ったフェイトの頭に声が響く。咄嗟に体を起こそうとするが現実なのか夢なのか判別がつかず、体が思うように動かない。

（誰なの？）

思わず尋ねる。だが、その声には聞き覚えがある。いや、聞き覚えのあるところかこの声は…

（私はあなた、そして、あなたは私。）

それは“自分の声”そのものだった…。そして、声は話し続ける。

（君は、いくつジュエルシードを集めたのかな？）

(…2つだけ。)

ジュエルシードは全部で21個ある。なのに、まだそのうちの2つしか集めていないという事実を思い出す。これだけでもそうとうフエイトは焦燥感にかられるのだが、無情にも声はさらに非情な事実を突き付ける。

(違うよ、“君が”集めたジュエルシードはゼロだよ?)

(え…?)

(1つ目のジュエルシード封印の時は、ほとんど君は気絶してただけだね?)

(あ…。)

フエイトは思いだす。あの日、蜘蛛の大群を見て気絶していたことを。その最中、アルフは自分を抱えて逃げ続けてくれて、フィアは蜘蛛を蹴散らしてくれた。

(2つ目だって、彼が来なければあの白い魔導師に負けていたかもしれないんだよ?)

（そんなこと…。）

無いと言いかけたが自分は白い魔導師、なのはの実力を知らない。
戦って勝ってジュエルシードを手に入れたかもしれないし、負けて
手に入らなかったかもしれない。フィアがいたからこそ、あの時
は楽に手に入れることができた…そう、思えてきた。

（昨日だって、彼がいなかったら君たちはどうなっていただろうね
？）

（…。）

もう返す言葉も無い。自分が八神みらいと戦って勝てる道理なんて
無い。もし、みらいが敵にまわったら自分はもうどうすることもで
きない。それに追い打ちをかけるように自分の声が頭に響く。

（結局、君は何もできない役立たずなんだよ。）

（そ、そんな…。）

突然、声が自分の使い魔、アルフのものに変わる。

（アタシに愛想をつかされて…。）

（やめて…。）

今度は彼の、フィアの声に変わる。

（俺にも嫌われて…。）

（お願いだから…もう、やめて…。）

現実と夢の狭間でフェイトは泣きそうになっていた。だが、そんな彼女に声はトドメをさす。フェイトがジュエルシードを集める一番の理由…。

『そして、母さんに捨てられてしまうのよ。』

母親の声、プレシア・テストロッサの声でそう囁かれた。

「あああああああああああああああつ!!」

叫びながらフェイトはベッドから飛び起きた。辺りを見渡すと、時間が夕方頃になって周りが暗くなり始めていたこと以外、特に何も変化してないいつもの自分の寝室だった。アルフもそこで眠っている。フェイトは乱れに乱れた呼吸を徐々に整える。

「ハア…ハア……。今のは、夢…?」

そうとしか思えない。だが、例え夢だったとしても、さっきの聲に告げられたことは事実。そう考えると急に惨めな気持ちになった。

「私は…、何もできていない…。私は役立たず…。」

このままじゃ本当にみんなに見捨てられてしまうんじゃないだろうか？アルフにも、フィーアにも、そして、母さんにも…。

「嫌だ…そんなの嫌だ…！！みんなに嫌われたくないよ！！」

フェイトは泣くように叫びながらバルディッシュとバリアジャケットを展開した。

《マスター！？》

「ん…あ、おはようフェイト。ってちょっとフェイト、どうしたの！？」

バルディッシュとアルフはフェイトの様子に戸惑う。いきなり戦闘状態になったのには当然驚いたが、なによりフェイトは今、泣いているのだ。声をかけて問うも、フェイトは半ば理性を失いかけており、二人の声を聴こうともしない。

「私、みんなの役に立ってみせるから！！一人でやって見せるから！！だから、私のことを嫌わないでえ！！」

そう泣き叫びながらフェイトは部屋から外へと飛び出す。一人置いて行かれたアルフは一瞬茫然としてしまったが、すぐに気を取り直す。

「ハッ！！ボ…っとしてる場合じゃなかった。フェイトを追いか…」

け…な…いと…。(ドサツ)」

突如、不自然な眠気に襲われたアルフは意識を失い、再び眠りについていた。

「遠慮するな、もう少し眠っていたまえ。」

そんなアルフを一瞥し、黒装束の男、ネーム二佐はフェイトの飛んで行った方へ飛び立った。

フイーア s i d e

そして今、フイーアはただひたすらフェイトのもとへ向かっていた。いまだに念話の返事をよこさないアルフは一旦放置して、ジュエルシードのもとにいるであろうフェイトのもとに急ぐことにしたのだ。

「あいつ一人で大丈夫そうか？」

《現在、結界内で奮闘中のようです。ですが、いつもはアルフさんがやっている封鎖結界を自分で張りながら一人で封印しようとして

ますからいつもより集中力が…。」

あんの馬鹿…なにがしたいんだ…？俺を信頼できなくなったつうのなら、悲しいが…まあ、納得できる。だが、なぜアルフまでいない？

「アルフの現在位置は？」

《反応からして、マンションで寝てると思われます。》

喧嘩でもしたのか？いや、今はとにかく急ごう。

「フイーアさん！！」

「お、なのはとユーノか。」

ジュエルシードの反応を感じ、二人も向かい始めていたようだ。

「昨日の疲れは大丈夫か？」

「私もユーノ君もギリギリまで寝てたから大丈夫です。」

確かに二人の顔色は平気そうだった。フェイトは…大丈夫だろうか…一人でいる時点でやな予感がしてしょうがない…。不意に、あることに気づく。

「八神は？」

自分並みに勘のいい八神みらいがいないのだ。あの男に限ってこの騒ぎに気づかないなんてことは有り得ないはずなのだが…。その疑問にユーノが答える。

「みらいさんなら、血相抱えて家に帰りましたけど…？」

「ハアツ？」

逃げたのか？イヤイヤ有り得ない…待てよ、家に帰った？

「ユーノ、八神はなんか言ってたか？」

「ええ、『奴らめ、また俺の家族に手を出す気か！』とか言っていましたけど…奴らって誰です？」

「ああ、なるほど…そりゃ仕方がない…。」

そうか、そういうことか…八神がジュエルシードを無視したのも、アルフが眠りっぱなしなのも、フェイトが一人でいるのも…。

「全部、お前達のせいだ…。」

そう言ってなのは後ろの方を睨む。なのはがつられて後ろを振り向くと、いつの間にかそこには十人程の黒装束の男達が立っていた。辺りを見渡せば封鎖結界もすでに展開済みのものである。そんな中、連中の一人が口を開く。

「この件から手を引け。もう、ジュエルシードとあの小娘に関わるな。」

ふん、やっぱりコイツラの本命はジュエルシードとフェイト達か。さらに男が口を開く。

「貴様は次元漂流者であろう？たかが異界の小娘一人に命を懸ける理由は無かるう。」

それに対し、

[illegible]

フィーアは嗤う。“笑った”のではなく、“嗤った”。馬鹿にされたと感じた男たちは殺氣立つ。なのはとユーノは何故フィーアが笑い声をあげたのか分からず、目を白黒させていた。

「何かおかしい!？」

「ハハハッ……ああ、すまない。そういや、こんな時に“僕”はこんなところで何をしているんだろって思ってたね……。」

なんだ、そういうことか…。男たちはそう心で呟き、フィーアが予想よりアツサリ手を引いてくれるものだと思った…。思ってしまった…。フィーアの“口調が変わっている”ことに気づかずに…。

「話しかかるようで助かる。ではとつと何処へでも行つ

「我が銘に答えよ、
夜叉鴉」

男の言葉を遮るようにフィーアは呪文を唱える。すると、フィーアの足元に魔法陣が出現し、そこから鴉のような使い魔が複数現れた。

そして、その中の一匹がさっきまで喋っていた男に体当たりを喰らわす。フィアの使い魔、『夜叉鴉』は見た目も大きさも普通の鴉のそれと変わらない。にもかかわらず…。

ドオオオオンッ！！

体当たりを喰らわされた男は派手な音と共に、民家をぶち壊しながら吹き飛ばされた。男たちの表情は全て驚愕と怒りで染められていた。

「き、貴様ッ！！我々とやる気が！？」

「おい、なのは。」

男の怒声を見捨てたのは視線を移し、声をかける。

「ハ、ハイッ！！」

「…。（ガタガタガタガタ）」

雰囲気がガラリと変わり、なのはとユーノは今のフィアが怖くしょうがなかった…。そんな二人に構わずフィアは話を進める。

「薄々感づいてると思うけど、今フェイトが無茶して一人でジュエルシードを封印しようとしてるみたいなんだ。先に行って助けてあげてね。一応、僕の使い魔も一緒に行かせるから。」

「わ、分かりました…。でも、フィーアさんは？」

するとフィーアは視線を男達の方に視線を戻し、恐ろしくて冷たい笑みを浮かべる。

「彼らを片付けてから行くよ。だから、早く行ってね…。？」

「（怖ッ！？）ハイツ！！先に行ってます！！」

言うや否や、フィーアの夜叉鴉を率いてなのはフェイトのもとへ飛んで行った。夜空を鴉の群れを率いながら飛ぶ姿は中々絵になっていた。フェイトならもつと似合ってたかもしれない…。

「そんなに死にたいのか貴様！！突然飛ばされたこの世界も、昨日今日会ったあの小娘共も、別に命を懸ける程のものでもないだろう！？なぜ貴様是我々の邪魔をする！？」

男の怒声に、めんどくさそうにながらもフィアは口を開く。

「僕は、欲張りだからさ。」

「…何？」

意味不明な返答に思わず呆けてしまう。それに構わずフィアは続ける。

「一度知ってしまった…全てを失うということの怖さを…失った多くは戻ってきたけど、その中に愛した人たちは居なくて…。それ以来、僕は失うことが怖くて怖くて怖くて怖くて仕方がないんだよ…。」

男たちは段々フィアが得体のしれない不気味な存在に見えてきて、背中に悪寒が走った。

「だからさあ…僕からあの子たちを奪わないでよ…悲しくなるじゃないか…泣きたくなるじゃないか…君たちを…。」

殺したくなるじゃないか…！！

冷たい笑みを張りつけたままフィアは魔剣を取り出し、引き抜き、プログラムを喰わせ、サーベル状態のヴィルガロムを構える。そして、魔剣はフィアの言葉と同時にランチャーへと姿を変える。

「【グレネード】。」

ボオオン！！

あまりの恐怖に動けなくなっていた男達、黒装束達に向かって容赦なく爆撃が叩き込まれる。今ので3人がヤラレ、残りの者達はそれに動揺し、混乱するが、フィアはすでに彼らの中心に居た…。

「【スライサー】。」

今度はフィアの手日本刀にそっくりな剣が握られていた。そのことに気づく暇も与えず、一閃二閃と斬りつけ、さらに二人を沈黙させる。

「11のッー!」

「【ショット】。」

後ろでデバイスを構えていた奴を散弾銃に変化させたヴィルガロムで撃ち抜く。男は弾丸の壁をもろに喰らい、吹き飛んだ。

「なんなんだよお前は!? 人の皮を被った化け物か!？」

瞬く間に仲間の半数以上を失い、恐怖と混乱が込められた声で黒装束の一人が叫ぶ。それにフィーアは『黒羽』で手榴弾を創りながら自嘲気味に答える。

「いや…、ただの死に損ないさ…。」

自ら張った檻（結界）の中で、彼らは爆音と断末魔と共に次々と消えていった。

第二十三話 それぞれの理由（前書き）

苦情殺到覚悟…

第二十三話 それぞれの理由

フェイトside

「【ジュエルシード封印】！！」

ジュエルシードの封印に成功したフェイト。しかし、その顔は浮かない。その原因は彼女の周囲を羽ばたいてる数羽の鴉が原因だった。

「君たちは…、ファイアの……。」

そう、ファイアの使い魔の夜叉鴉たちである。先程ジュエルシードを封印する際、日頃の疲労と、基本アルフに任せている慣れてない封鎖結界の展開が重なり、集中力を切らせたフェイトはジュエルシードを暴走させかけたのだ。半暴走中のジュエルシードを直接握りしめ、そのまま魔力を送り込み、手に傷を負ってでも強引に制御しようとしたその時、突如フェイトの周囲に魔法陣が展開され、中から数羽の夜叉鴉が現れたのである。

ファイアは黒装束と接触したその日、用心のためフェイトにこっそり夜叉鴉を護衛につけていたのである。フェイトの危機が迫ったと判断した夜叉鴉たちは出現し、己の魔力をフェイトに差し出し、その上封印の補助までこなしてた。

「やっぱり…、フィーアもアルフも私のこと…役立たずだと思ってるんだ……。」

いつもなら礼の一つくらい言ってたろうが、“あの声”に話を聴かされた今のフェイトには、『フィーアがフェイトを信頼してない』という意味合いに感じてしまった…。

「このままじゃダメだ…何か、何かしないと…みんなに嫌われちゃう…見捨てられちゃう……。」

思考が悪い方へ悪い方へと傾き、震えた声で呟き続け、表情はどんどん虚ろな物になっていった。その姿はまるで、“壊れた人形”のようであった…。その時、フェイトに呼びかける声が響く。

「フェイトちゃん!!」

フィーアの夜叉鴉を複数引連れたなのはがそこにいた。ぼんやりとした思考の中、フェイトはなのはを見てあることを思いついてしまう。そして、虚ろな表情のまま、笑みを浮かべる。その姿になのははゾクリとする。

「ねえ、なのは…、勝負しよう…。」

「え…？フェイトちゃん、何言ってるの…？」

フェイトは考えてしまった…歪みに歪んだ自分なりの名誉挽回の方法を…。

「私が負けたら、今私達が持つてるジュエルシールドは全部あげる。私が勝ったら、なのは達が持つてるジュエルシールドを全部ちょうだい…。」

「ちょっと待つて！！なんで今、戦わなきゃいけないの！？せめて理由を教えて！！」

なのはを倒せば“あの時”、フィアがいなくてもジュエルシールドを手に入れることができた…と証明できる…そして同時に、一気に自分の元にジュエルシールドを手にすることができる。そうすれば自分はアルフにも、フィアにも、そして母さんに嫌われなくて済む…。

そんな考えが今のフェイトの頭の中を占めていた。そのため、なのはの声は口々に頭に入ることは無かった…。

「どうせ言葉だけじゃ、何も変わらない…何も伝わらない…。だから私は、行動で示す…！」

《サイス・フォーム》

バルディッシュに魔力刃を形成させ、なのはに斬りかかる。

ガキンッ！！

「きゃあッ！？」

かろうじてレイジングハートで防ぐものの、なのははそのまま弾き飛ばされた。体制を取り直し、なのははフェイトに向かって叫ぶ。

「言葉だけじゃ何も変わらないって言うけど…話さないと、言葉にしないと伝わらない事だつてきつとあるよ！！」

「そんなの、今の私に意味はないよ！！もともと、私たちは敵同士の筈だったんだから！！」

フィーアが居なかったら、なのはの名前さえ覚えることも無かった筈なのだから…。

再度バルディッシュをなのはに振るうフェイト。なのははそれを再びレイジングハートで防ぐ。

「目的がある同士だから、ぶつかり合うのは仕方ないのかもしれないけど!!」

半ば気合で押切、フェイトと距離をとったのはは彼女に問う。

「戦うのが当然だって言うなら…、どうしてもそんなに寂しい目をしているの!？」

「ッ!？」

「私がジュエルシードを集めるのは、それがユーノ君の探し物だから。最初はユーノ君のお手伝いで集めてたけど、ジュエルシードの力で街の人や大切な人に危険が降り懸かったら嫌だから!!だから私も簡単には譲れない!!」

今のフェイトとは対照的に決意の籠った真っ直ぐな目で見つめながらなのは言いきった。

「これが…私の理由!!フェイトちゃん理由は!？」

「……私は…私は!!」

なのはの言葉に声を詰まらせ、顔を俯かせるフェイト。だが、やがて何かを決心したように顔を上げ、宣言するかのようになのはの問いに答える。

「ジュエルシードを集めること、それが母さんの願いだから！！その願いを叶えて母さんを笑顔にしたい！！それだけが私の望み！！」

言いたいことを言い切り、フェイトは思考も気分も少しスッキリした。表情も先程の虚ろなものではなく、なのは同様強い意志が宿っていた。その様子になのはは少しホッとする。しかし、安心したのも束の間。フェイトは再びバルディッシュを構え、なのはに向ける。

「だけど、このままじゃ私はただの役立たず…きつとみんなに見捨てられてしまう…。だから君を、なのはを倒して信用を取り戻す！！」

《フラッシュ・ムーブ》

「ッ！？」

言うや否や魔法による高速移動で瞬時になのはとの間合を詰める。
そしてバルディッシュを振りかぶり、それを振り下ろす……つもり
だった…。まるで、“何かに掴まれた”かのようにバルディッシュ
が動かせなかった。

「 こんのっ…。」

背後から聴き覚えのある男の声が聴こえた。なのははフェイトの背
後に居るであろう声の主を見て顔を青くしていた。フェイトは恐る
恐る後ろを振り向く。するとそこには…。

「バカタレがああああああああああああつ!!」

ゴッスン。

「キャンッ!!」

“四枚の黒い翼を生やした”フィアが鬼の形相で怒鳴りながら、
フェイトの頭にそこそこ手加減された拳骨をお見舞いした。

フィア side

拳骨を喰らったフェイトは空中でうずくまっていた。それを同じ高度で、フィアは仁王立ちしながら見おろしていた。さっきとは別の種類の怒りオーラを纏ったフィアに内心ビビりながらも、なのはフィアに声をかける。

「あのー、フィアさん？」

「あん？どうした？」

「その翼はなんなんですか？」

言ってフィアの背中に生えた黒い翼を指さす。それはフィアの背中から横向きに一对、縦向きに一对生えていた。横向きの一对は結構動くようだが、縦向きの一对はさほど動かず、代わりに赤い火花がチラついていた。

「俺の『黒羽』を本格的に展開しただけだ。空を飛ぶ時は大抵コレ使ってる。あ、とりあえずフェイトの相手してくれてありがとな。」

「え…、いえいえそんな大したことは…。」

「さてと…、フェイト。」

フェイトはビクツと体を震わせ、顔をゆっくり上げる。そしてフィアと目が合う。その表情は何かに怯えてるようだった。当然、怒ってるフィアにも怯えているのだろうが…フェイトはもうフィアが自分に失望してしまったのでは？という考えにも恐怖していた。

「『嫌われるから、信用を取り戻す』ってのはどういうことだ？」

視線を泳がすもフィアのプレッシャーに耐えれず、フェイトは口を開く。

「私、ほとんどフィア達に任せっきりだから…みんなの役に立ててないから、そのうちみんなに愛想をつかされて、嫌われて、見捨てられるんじゃないかと思ったたら怖くなって…。」

「それで一人でジュエルシードを封印しようとしたり、なのはと勝負したりしたのか？」

「…うん。」

ゆっくりと頷くフェイト。それを見てフィアは溜息をつく。フェイトになにかしら黒装束共がちょっかい出したのは確かだろうが、フェイト自身の性格にも原因があるようだ…。

「……フィアだって私のこと、役立たずだと思ってるんでしょ？」

「…そうかもな。」

「ッ!」

その言葉を聴いてフェイトは泣きそうになる。やっぱり自分は…。しかし、フィアは言葉を続ける。

「だからこそ、簡単に見捨てれるわけないだろうが。」

「…え？」

「少し目え離れた途端、一人で無茶するし、勝手に思いつめて暴走

するし…危なっかしすぎてほっとけない…たらありやしない…。」

自然とフェイトの目に熱いモノがこみ上げる。しかし、それはさっきまで悲しくてこみ上げてきたモノとは質が違った。それでもフェイトはフィーアに問う。

「こんな役立たずの私なんだよ…？」

「…なあ、フェイト。お前は、なんで母さんの笑顔を見たいと思った？ 見ると何かお礼の品でも貰えるのか？ 魔力が増えるのか？ 天才にでもなれるのか？ 違うだろう？ ただ『母さんの笑顔が見たい』だけで他に複雑な理由なんてないだろう？」

「…うん。」

フィーアの言葉に頷くフェイト。

「俺だって、フェイトに見返りを求めて一緒に居るんじゃないよ。ただ、フェイトを手伝いたくなっただけ、悲しませたくなくなっただけなんだからさ…別に役に立とうが立つまいが関係ない…俺はお前を、お前らを最後まで見捨てないさ。出会って一週間の俺がこう思ってたから、ずっとフェイトと一緒にだったアルフだって同じ気持ちに決まってるさ。」

笑みを浮かべながらフィアは言う。ソレを聴いてフェイトは何も言えなくなった。悲しいからでは無い、フィアの言葉が嬉しかったからである。フェイトはフィアに抱きつく。そして泣きながら言った、

「勝手に疑ってごめんなさい……！そして、ありがとう……！！」

「どういたしまして。そこで空気になりかけのなのはと、家に置いてきたアルフにもちゃんと謝つとけよ？」

フェイトの頭を撫でながらフィアはそう返す。そして、しばらくして泣きやんだフェイトはフィアから離れ、なのはと向き合い、さっきのことを謝罪した。

「……ごめんね、なのは。」

「気にしないからいいよ。それにしても、よかったねフェイトちゃん！」

「うん！ありがとう！」

もう、フェイトの顔に暗いものは無かった。それを確認し、フィーアは言う。

「それじゃあ、また徹夜になる前に帰るぞ。」

「うん！」

「ハッイ！」

時刻は夜中。辺りは真っ暗だったが、三人が居る場所だけは明るかった。それはきっと、魔力光のせいだけではなかっただろう。

幕間 その影で…（前書き）

コイツのプロフィールも作るべきかな？

幕間 その影で…

ネーム side

「おのれえ…忌々しい……。」「

遠く離れた建物からファイアたちを監視していたネーム二佐は吐き捨てるように呟いた。

「私自ら出てきたと言うのにこのザマか…。『魔獣』め…。」「

何を隠そう、フェイトに散々酷いこと言った“あの声”の主はネーム二佐なのである。彼のレアスキルである『変声念話術』はその名の通り、一度聴いた声なら簡単に念話で真似できるのだ。実質ただの念話と変わらないため守護魔法の類に滅多に反応せず、彼はそのレアスキルによる洗脳紛いで任務中に何人もの人間の心を弄び、壊し、利用してきた。

「このままではプレシアの手元にジュエルシードがいかないではないか…。」

わざわざスクライアの輸送船を襲撃してジュエルシードをこの世界にばら撒いたというのに…。スクライアの小僧、持ち主と協力関係を築きおつて…。計画上、ジュエルシードが“私が狂わせた”プレシアの手に渡るのは必須事項。そのため、あの“人形”を小僧と面倒な奴らと別離させ、いいように利用して残りを集める予定だったのだが…。

「あれではもう無理ではないか!!」

魔獣と人形が、出会った当初より仲良さそうに帰るところを見ながらネームは呻いた。ただでさえ魔人と魔獣の足止めのために金で雇った次元犯罪者を全滅させられ、おまけに勘の鋭い二人の化け物に同じ手を使う気にはならなかった…。

「ネーム二佐!!」

「なんだ…?」

数少ない正規の部下の報告を聞いて彼は後悔する。

「表の連中が動きました。しかも派遣されるのは『アースラ』とのことです。」

「クソッ！あの女狐か！！……しかたあるまい、監視をプレシアに集中し、奴らの監視は最低限に留めろ。」

「了解。」

（覚えていろ貴様ら……最後に嗤うのは私だ！！）

そう言って闇は姿を消した

プロフィール3（前書き）

本格的に出る回数増えそうなので…

プロフィール3

名前 ノー・ネーム（偽名）

年齢 黙秘（三十代と思われる）

階級 時空管理局暗躍機動部隊隊長・二等空佐

魔力 A A -

外見 赤い瞳をしており、黒の7：3ヘア。部下達同様、黒装束を身に纏う。

性格 紳士的なフリをしてるが、最近はフィア達のせいでボロが出始めてる。基本外道。

特技 レアスキル『変声念話術』による洗脳。スキル自体に洗脳能力は無いが、寝ぼけてたり、意識が朦朧としている相手に印象的な声を選択し、巧妙に話しかけ惑わす。

戦術 自身は滅多に現場に行かず、主に部下や金で雇った犯罪者を使う。基本的に捨て駒として使ってるので失敗したら簡単に切り捨てる。しかも作戦を失敗したり、捕虜などにされた部下が情報を漏らさぬように嘘の任務内容を渡すこともある。（例・フィアによる一人目の犠牲者）。

備考 ネームの部隊はスカリエッティ達と同じ様な立場である。そのため、『アースラ』などの表の局員に発見されると犯罪者扱いさ

れる。

余談 本当は第十四話で出番終了だった。だから適当に考えてノー・ネーム(名無し)に…。

プロフィール3（後書き）

いつか名前つけよう…

第二十四話 お話しよう (O H A N A S H I to o u yō) (前書き)

やらのんびり

第二十四話 お話しよう（O H A N A S H Iにあらず）

フイアー side

「申し訳ない。」

昨日のフェイトの暴走から一夜明け、時間は正午を過ぎたところ。六人は再び、否やつと『翠屋』に集まった。そこでフイアーはみらいに頭を下げていた。頭を下げられた本人のみらいと、なのは達はキョトンとしていた。

「一昨日、約束をしたにも関わらず、貴官の家族を巻き込んでしまった…。家名を賭けた手前、どんな罰でも受けよう。煮るなり焼くなり好きにしてもらって結構。」

どうやら、一昨日みらいと約束した『みらいの家族を巻き込まない』という約束を早々に破ったことを謝ってるらしい。とは言っても、直接フイアーが巻き込んだわけではなく、黒装束がみらいの足止めのために八神家の方に向かって行く“フリ”をしただけであったのだが…。そして、まんまと騙されたと知ったみらいはしょんぼりしながらフイアー達と合流したのである。

(((誰…?)))

その場にいる全員がそう思った。目の前にいるのは確かにファイアなのだが、明らかにいつもの彼じゃない…。いつもの陽気で気さくなものでも、なのはが目撃するハメになった冷酷狂気のものでもなかった。そこにいたのはクソ真面目な青年ただ一人である。

「……どうした？」

「いや、ギャップがすごいとしか言いようがないと思うよ。」

その場の空気に違和感を感じ、顔を上げ疑問を口にしたファイアにフェイトが答える。

「あのな…、俺は軍人だって前から言ってただろう？その場に合わせて口調ぐらい変えるわ。ああ、ついでに言っとくが謝罪は本気だ、殴るなり斬るなりして構わねえよ。」

「…いや、俺が“巻き込むな”と言ったのはジュエルシードの封印そのもので奴らのことでは無い。奴ら、黒装束には昔から目をつけられていた…、あの約束があるうとなかろうと関係無かった。むしろ、非があるとしたら首を突っ込んだ俺自身だ。」

「…感謝する。」

そうしてこの話は終わりになった。そしていよいよ本題である。

「では、本題であるフェイトのお母さんのことだが…。」

そう言った途端フェイトの体が強張り、アルフは心配そうにフェイトを見つめる。

「大丈夫かい、フェイト…?」

「平気だよ、ありがとう…。それに、私が自分で言っちゃったんだし…。」

本来なら、ジュエルシードを求めているのはフェイトの母さん、『ブレシア・テストロツサ』であることはギリギリまで黙っている予定だったが昨晚、フェイトはなのはの問いかけへの答えとして言うてしまったのである。そのため結局、なのはとユーノにも洗いざらい説明することにした。

「つまり、フェイトちゃんもなんでお母さんがジュエルシードを欲しがってるのか知らないんだね?」

「うん、黙っててごめん…。ユーノも…」

「いや、僕も今は特に気にしてないよ。」

特に黙ってたことは咎められなかった。それにフェイトもアルフも安堵する。

「で、と思うユーノ。何か他のジュエルシードの利用方法とか無いのか？」

「うん…特に無いと思います。あるとしたら、込められた莫大な魔力ぐらいだと思います…。」

「まあ、アレ一個でこの世界滅ぼせるもんな…。」

どうすつかねーホント…情報足りなくて何も予想できない…否、逆に様々な可能性がありすぎて予想が絞れない…。そんな中、ユーノが口を開く。

「ところでフィーアさん。」

「ん？」

「あなた、何者なんですか？」

ああ、そっぴや素性については名前以外なにも言つてなかつたな……。にもかかわらず目の前で激闘したり豹変したりしたのか俺…。

「次元漂流者。」

「いや、そうじゃなくて…」

「魔法と科学が共存した世界で軍人やつてた。」

「え！？」

「ちなみに、八神は俺の祖国の『同盟世界』、管理局でいうところの『管理世界』みたいなところ出身だぞ。」

「管理世界と違い、あくまで対等関係だな。」

祖国の誇りに賭けてそこは譲れないためか話に割り込むみらい、と
ころが…。

「…え？」

何故か意外そうな顔をしたユーノ。不思議に思ってたらユーノの口
から驚くべき言葉が出た。

「でも…みらいさんのデバイスって、『カートリッジ・システム』
が付いてるってことは『ベルカ式』なんですよ？なんで持つてる
んです？」

「ハアッ!？」

「ユーノ、何故お前がその単語を知っている!？」

「え？え？ちよつ、待つ…わわっ!！」

思わずみらいと二人がかりでユーノに掴みかかる。二人の豹変つぱ
りになのは達は困惑する。そりゃ俺たちだってビックリするわ…俺
達の世界はフェイトに話したときの様子からして未知の世界であり、
認知すらされてない辺境地だと思っていたのだ。にも関わらず、何
故ユーノはこっちの世界の技術の一端を知ってるんだ!？

「聞きたいのはこつちですよ！僕たちの世界の二大魔法大系の片方をなんであなたが持つてるんですか？」

「…八神、どうなんだ？」

「数世紀も前から普及してたから俺にも分からん…。ユーノ、ちょっと貸すからよく見てくれ。」

そう言つて魔法陣を“堂々と”展開したみらいはそこから愛銃『オルギニス』を引っ張り出す…て、オイ！？

（（（何堂々と魔法展開してんのおおおおおおおおおお
おおおおおお！？）））

先程も書いたが、ここは『翠屋』。魔法を知らない一般人も大勢いる。そんな中で堂々と魔法を使ったみらいに全員焦る。なのはにいたっては家族の目の前なので一層パニック寸前である。

「ちょっと、みらいさん！？何してるの！？」

「あら、みらいさん新作かしら？」

「ええ桃子さん、ちょっと新ネタを見てもらおうかと。」

「よかったわね、なのは。みらいさんの『手品』見せてもらえて。」

「え…？ああ…うん、よかった…。」

それ以上特に反応せず、いたって普通に仕事へ戻っていくのはの母、『桃子』さん。周りの客も同じような状態であった。思わず呆ける五人。

「…あんた、今まで二年間そうやってきたのか？」

「そうだが？」

「…参考にさせて貰うなの。」

なのは、お前じゃ多分無理だ…。でも確かに手品で魔法のフリするより、魔法で手品のフリする方が楽だろうな。マジック（手品）のようなマジック（魔法）ってか…今度、広めてみよう…。

〈閑話休題〉

結局、一部独自の技術が加えられているがアルテミアとベルカの技術はほぼ同一とユーノは判断した。しかも、アルテミアで普及した時期とベルカの歴史を比べると、技術がベルカからアルテミアに渡った可能性が出てきた。

「つまり、もしかしたら俺達も『こつち』から『あつち』に渡れるかもしれないということか…。」

時空のジャンプが一方通行では無い可能性がある。それがこんな形で判明とは、人生分からないものだな…。そんな中、リリアがじれったそうに声を出す。

《すっごい話が脱線しましたが、プレシアの件はどうするんですか？》

「………忘れてた。」「……」

「…私、母さんに直接聞いてみる。」

「フエイト!？」

おもむろにフエイトが言ったことにアルフが驚く。しかし、確かに現状では本人と話をしない限りどうにもならない。ここは一度問い直すべきなのかもしれない…。

「んじゃ、俺もついてくか…。」

「え?」

「なぐに、こつち来てから娘さんにお世話になってるって礼を言いに行くついでだ。」

「むしろ私達がお世話になってばかりだよ…、でも分かった、フイアもついてきて。」

「はいよ。」

とりあえずフエイトとアルフ、そしてフィアは報告を兼ねてプレシアに会いに行き、なのはとユーノ、みらいは引き続きジュエルシードの探索を続けることになった。

「うまくやれよ?」

「ただの家庭訪問みたいなもんだ、大したもんじゃないさ。」

みらいの言葉に軽く返すフィア。

あの日見た夢の意味が、己の過去と重なるモノが待ち構えているとも知らず…。

第二十五話 魔道科学

ファイア side

時空の狭間に存在するとある豪邸、むしろ城とよべるような屋敷の入り口に三人の人影が立っていた。

「ここがそうか…、結構でけえな…。」

ファイアとフェイト、そしてアルフは転移魔法により高次空間内にあるテストロッサ邸、『時の庭園』に来ていた。

「それじゃあ、母さんもファイアのこと待ってるみたいだから、行く?。」

「…おう。」

今更ながらファイアは不安であった。実は居候初日にフェイトはファイアのことをプレシアに伝えていたのだ。その時は、ファイアが『魔法を知っている次元漂流者で自分たちに協力してくれる人』と伝えたらしいのだが、特に何も言われなかったらしい。ところが今日の定期報告のために出発する直前、

『その人を必ず連れてきなさい。』

と、プレシア直々の御指名がきたのである。元々、呼ばれなくても行くつもりだったが、今頃になって自分に興味を持たれたり、用件ができたりのかと思うと不安になる。

（一体、俺を自分から呼ぶ気になった原因は何なんだ…？）

一番可能性が高いのは、また黒装束が関わってるということぐらいだろうか？ 奴らは心なしかフェイト達が“直接”ジュエルシードを手に入れるのだけは邪魔をしない。そして、フェイトに指示を出したのはプレシア…。黒装束がプレシアの部下という可能性も考えたが、それなら娘にこんな危険なことさせないだろうし、なにより一人目の奴は『邪魔をすればフェイト達をも殺す』みたいな発言をしていた。

「まあ、それも今から確かめりゃいいか。」

「どうしたんだい？」

「いや、なんでもない。」

三人は屋敷の中を進んで行った。

プレシア side

屋敷の中の大広間、そこにプレシアはいた。

ああ…ついに例の男がやって来る…。フェイトの報告を聞いた当初はどうでもよかったのだけど、そのあと監視中に見た男の魔法、あれは大魔導師と呼ばれた私でさえ知らない、理解できない未知の技術…あの男の持つ魔法は例の場所へ辿り着く近道に…いや、ひよつとすると……。

（もっと早くあなたに会えるかもしれないわ…、アリシア……。）

その時、プレシアのいる広間の扉が開き、フェイトとアルフ、そしてフィーアが入って来た。最初にフェイトが口を開く。

「母さん、報告に戻りました。」

「ジュエルシードはまだ2つだけしか集まってないのでしょうか?」

「…はい、ごめんなさい。」

「あなたは大魔導師と呼ばれた私の娘、ガツカリさせないでちょうだい。」

「はい…。」

「もういいわ、下がちなさい。次の報告を期待するわ。」

「…え？あ、はい。」

（…アレ？）

フェイトとアルフは首を傾げた。二人はいつもならここでプレシアはフェイトに折檻という名の虐待を行うと思っていたのだった。しかしプレシアは、ジュエルシードが全く集まってないにも関わらず、あんまり気にしてない様子さえ見せた。フェイト達が不思議に思う中、プレシアはフィーアの方を向く。

「それで、あなたがフェイト達に協力してくれてる方？」

その問いにフィーアは例の真面目な口調で答える。

「そうです。フィア・レイガードと申します。こちらに漂流した際、あなたの御息女にお世話になりました、以降その御礼を兼ねましてジュエルシード集めを協力させていただきました。」

「そう、でもどのみち礼を言っわ。」

「いえ当然の義務であります。ところで、何故に自分まで呼びびに？」

「少し、あなたの魔法に興味を持ったのよ。」

それを聴いたフィアは少しフェイトと目を合わせ、考えるような仕草を見せた…

「…て、なんでうちの娘と目を合わせるのよ？」

「失礼、そういえば御息女にも自分の魔法は雑な説明しかしておりませんでしたので、ついでにこの場で披露しようかと…。」

別に大した意味は無かった…いや、別にこの男と私の“人形”が意志の疎通をしててもどうでもいい…、それにしても、親密になるには年齢が離れすぎじゃないかしらって何を考えてるのよ私は

？私の娘はアリシアただ一人、こんな優しく素直な子、アリシアとは別人よ……今の、遠回しに褒めただけかしら…？

「あの、テストロッサ殿？どうかなさいました？」

「ッ！なんでもないわ。丁度いいから教えてちょうだい…あと、口調は楽にして構わないわ。」

「…やっぱり、見てたんですかい。」

バツが悪そうにするフィア。それを気にせず、早く始めると促すプレシア。フェイトも結構興味があったようで、アルフと一緒にフィアを見つめている。

「ハイハイ、分かったよ。リリア、助手。」

《了解です。》

返事と共にリリアから資料が一部載ったホログラムが展開される。口調は楽にしろと言われたが最低限の敬語を使いながら、フィアとリリアは説明を始める。

まず、ベルフィーア連邦には基本的に魔法と科学の二つの技術系統

が存在している。連邦の魔法技術、科学技術は単体でも恐ろしい高水準を誇っている。魔法のみなら『ゼロ？使い魔』を強化したもの、科学のみなら『ガ？ダム00』の世界に匹敵する。しかし、この栄華に拍車をかける技術が生まれた。

「それが、その『魔道科学』ってことかしら？」

《そうです。》

文字通り魔法と科学の融合である。しかし、その実態は全くの新種の技術というわけではない。魔法で科学を、科学を魔法で強化するといった方が正しい。

「一つ、代表的な例を出しましょうかね…これを見てくださいな。」

そう言っただけで魔法の弾を作り出す。それは、プレシアはもちろんフェイトでも簡単に作れるような代物である。

「プレシアさん、ここに壊している物ありますか？できれば同じ硬度の物を3つ程。」

「ちょっと、あなたソレ撃つつもり？」

「一番手っ取り早いんです。」

「……しょうがないわね。」

そう言った途端広間に騎士鎧の傀儡兵が3体現れた。

「では、失礼して。」

そう言つて魔力の弾を発射し、的の兵に命中する。対象は胸部に穴を空けながら吹き飛んだ。プレシアは怪訝な表情を見せる。

「ただの魔法じゃない……。」

ミッドチルダでも普通に見られる基本的な攻撃魔法、あんなの“今の自分”でも簡単にできる。

「まあ、待つて下さいよ。とりあえず、さっき俺がやったのは『弾を作る』、『弾を維持する』、『弾を発射する』の三つの魔法です。それでは次にコレをご覧あれ。」

今度はフィーアの左手にはいつの間にかリニアガンが握られていた。

管理世界出身のプレシアは少々動揺した様子を見せる。

「それって質量兵器じゃない…。それにフェイト、あなたは何で平然としてるの？」

「私もアルフも、もう見慣れたから…。」

それを無視するかのようにリニアガンを放つフィア。傀儡兵は先程と“全く”同じように吹き飛んだ。フェイトとアルフはさっきからフィアが何をしたいのかが判らず首を傾げる。プレシアも同様である。

「確かに質量兵器の中では優秀な道具かもしれないわね…でも、所詮さっきの魔法と同じ程度の威力じゃない。違うのは魔力を一切使わないことぐらいじゃ…。まさか…。」

プレシアは自分で言っただけで気づいたようである。それにフィアは二やりとする。

「今のリニアガン、質量兵器は魔力を使わず弾を『作ってあるし』『維持できるし』『発射できる』。そして、一回目と同じ結果を出せる。では、二回目に使わなかった3つの魔法を『電磁波の出力上昇』『弾丸の威力向上』『銃本体の硬質強化』に使ったら？」

その言葉と同時に強化されたりニアの弾丸が明らかに桁違いな威力を纏い、解き放たれた。

ドゴオオオオン！！

轟音と共に傀儡兵は跡かたも無く粉々に粉砕された。その光景に、プレシアは啞然とする。自分の知る魔法でも、この光景は作ることのできるだろう。しかし、フィアの説明を考えると恐ろしい事実が分かる。

「…コレと一回目に使った魔力量が同じだと言うの？」

フィアの魔道科学は今の『結果』を傀儡兵を“吹っ飛ばしただけ”の魔力量で同じものを“消し去る”ところまで強化したのだ。それはただの弾丸がひとりでに砲弾に変わったようなものである。もし、同じ魔力量を持った2人の人間が魔法と魔道科学で撃ち合った場合、結果は明らかだ。持つてる魔力量は同じはずなのに燃費のよさと威力が違いすぎる…。

「これが一番の具体例ですかね？見ての通り、連邦の魔道科学のコンセプトは『より少ない対価でより大きな結果を』なんですよ。片方の技術だけでは足りない分をもう片方の技術で強化することにより、連邦の技術は革命的に進歩したんです。」

さらに具体的に言うと、魔法は燃費の向上により更なる大規模及び高性能な魔法の開発が可能になり、科学は半ば非現実的な魔法を技術として組み込むことにより、夢で終わるはずだった物を現実にすることに成功した。

「根本的な説明はこの辺まで。あとは機密に関わるんで、それなりの理由が必要です。」

魔道科学の根本が判ったところで科学技術、いわゆる化学や物理が理解できなければ魔道科学を理解することは不可能なためここまで教えたが、ここから先はその核心に迫る。そのため、秘伝とも言える連邦の技術はこれ以上教えることはできない。

「理由ねえ…、天才科学者と呼ばれた者として、というのはどうかしら？」

「お断りします。」

……参ったわね、この魔道科学という未知の可能性は『アルハザード』の技術に匹敵するかもしれない上に、そのアルハザードと違い目の前に、確かに存在している…もし、それをモノにすることができれば娘を、アリシアを……何としてもこの男から技術を手に入れてみせる！！

そして、プレシアはフィアに自分の目的の片鱗をさらす。

「…あなた、死者の蘇生に興味はないかしら？」

しかし、それに対する返答は…

「け…な。」

「?…どうかしたのかしら？」

関心でも興味でもなく…

「ふざけるなああああああああああああああああああああああああああ
あああああッ!！」

ありつたけの怒声だった。

フェイトside

何故彼が、フィアがこうまで怒り狂っているのか解らず、フェイトもアルフも混乱していた。プレシアも同様で、フィアの豹変ぶりに呆然としている。『死者蘇生』という言葉が起爆剤だったのは判ったのだが、何故ここまで怒りをあらわにするのか理解できなかった。それに構わずフィアは吠える。

「あんたは…、あんたもそう思っているのか！？死者が生き返りたがっていると、この世に残っている者達の命を対価にしてでも甦りたいと思うと、本気で信じているのか！？死者が喋れないことをいいことに、勝手な思い込みで他者を巻き込むつもりなのか！？」

「フィア！！お願いだから落ち着いて！！」

「どうしたんだい！？いつものアンタらしくないよ！？」

自分を叱る時とも、なのはが見たと言う狂った時とも違う全く別の怒り。そこには様々な感情が入り乱れていた。今にもプレシアに跳びかかりそうなフィアはフェイト達に抑えられ、正気に戻る。

「ッ！…失礼、取り乱した……。しかし、自分は死者蘇生に興味は無いし、それに活かせる技術は無い。すいませんが、今日はもう失礼させていただく…ああ、ジュエルシードの件はこれからも協力するので御安心を…では、ごきげんよう。」

そう言っただけで去っていくフィア。フェイトとアルフは急いでプレシアに別れを告げそれを追いかけた。ちなみに、プレシアはフェイトが声をかけるまでボーっとしていた。そして、フィアに追いついたフェイトは早速尋ねる。

「一体、急にどうしたのフィア!？」

「すまない、嫌なことを思い出したんでつい…。」

そう言っただけで歩くフィアの顔は、どこか暗いものがあった。まるで悪夢を見たような…。

第二十六話　フィアの決意

アルフside

「…………ハア……。」

落ち込んだように溜息を吐いたのはフィアである。場所は『時の庭園』から帰ってきていつものマンション、フェイト達の部屋である。資金を調達したのでフィアもマンションの一室を所持しているのだが、日中はフェイト達とジュエルシードを探索してるし、それ以外は二人の部屋で食事を作って一緒に食べており、結局ただの寢床と化している。

そして、今日も例によって夕飯を作り（献立は肉野菜炒め）、3人で食べているのだが、フィアが何かを思い出したかのように溜息を吐いて落ち込み始めたのだ……なにかこう、さっきと違う『やつちまった……』感を滲ませて……。ためしにアルフは尋ねてみた。

「一体どうしたんだい？落ち込んだのは、帰りもだけど……。」

「いや……、プレシアさんに目的とか事情とか色々訊くつもりだったのに、『魔道科学』を見せびらかしたただだった、て……。」

ああ、それでか…と、アルフは納得した。プレシアに激昂したあと、フィアの表情はマンションに帰るまで暗いままだったが、夕飯を作り終えたとたんこうなったのである。暗いのに変わらないが、内容が若干間抜けてる分、マシといえる。

「…それにしても、本当にあの時どうしたのさ？」

勿論、あの時とはプレシアに激昂した時のことである。その言葉にフィアの顔に再び影が挿す…。

「……ちよつと嫌なことを思い出したんだって…。」

「あんなに怒る程のことがちよつとなのかい？」

明らかに誤魔化そうとしたフィアに、アルフが続けて問いかける。バツが悪そうな表情を見せつつも、フィアは口を開く。

「…よく考えたら勘違いかもしれないし、もうこの話はやめないか？」

「でもさ…。」

「アルフ、やめよ?」

「フエイト?」

尚も問い詰めようとしたアルフを止めたのはフエイトだった。彼女とてフィーアの豹変っぷりには驚いており、同時に自分と同じくらい疑問に思っていた筈だった。

「中々教えてくれないってことは、フィーアが言いたくないってことなんだから、これ以上無理に訊くのはフィーアに悪いよ...」

「けれど、「アルフ。」...分かった、悪かったよ...」

「二人とも、ゴメンな...。いつか話すからさ、それまで待っててくれ。」

「うん。」

そうして三人は食事を再開した。しかし、その食卓は終始気まずい空気のままだった。

ファイア side

夕飯も済ませ、フェイトとアルフは食休みをしながらテレビを眺め、ファイアは皿洗いをしながら再び考え事をしていた。

（ジュエルシードの収集、未知の技術への関心、そして『死者蘇生』……。もう、キーワードは揃っている。どう考えても、プレシアは誰かを生き返らすつもりだ……。）

そこまで考えて、不意に近くに置いてある鏡に映った自分を見た。近日、稀に見る暗さである……。とてもフェイトたちに見せれる顔じゃないので慌てて整えなおした。

（振り切ったつもりだったのにな、“あのこと”は……。いや、ただ忘れようとしただけか……。情けない話だよ本当に。初日に見た夢はこのことを表してたのか？）

あの日見た忌まわしき“あのこと”の夢。そして、夢に現れた彼女は、『エミリア』はどちらを願うだろうか？

（君の二の舞になりそうなプレシアを止めると言っかい？それとも手伝えと言っのかな？）

自分の信じた彼女なら前者を選ぶかもしれない。しかし、そんなものが当てにならないのは、自分の存在が証明している。自分の知っている彼女はとくに壊れていたのだ…。

自分の死が決まった、あの時に。

（プレシアさんよ…あんたの気持ちは理解できるさ。けどな、同時にあんたが蘇らそうとしてる人間の、“蘇らされた”人間の気持ちも理解してるからこそ…あんたの気持ちを認めることはできないんだよ！！！）

その思いと同時に食器を洗い終え、何かを決心したかのような表情を見せる。その何かを察したリリアがフィーアに話しかける。

《行くんですね？あなたの決着をつけるために。》

「これで過去にケリがつくとは限らないさ…この先、何度も似たような奴に会うかもしれない。けどな、その度に逃げるわけにもいかなえ。そいつらに大切と感じた人間が関わってるなら尚更だ。」

そう言っただけでフェイトたちの方を見る。二人は仲良く、フィアの視線に気づかずにテレビを見ている。二人はすでに深いところまで関わってるかもしれない…しかしまだ最悪の、手遅れの状況にはなっていない筈だ。まだプレシアを止めれると、自分を助け続けた勘が告げている。

「正直何が正しいのか、どうすればいいのか“俺にも僕にも”解からない…。けれど、このまま放っておくのは絶対に間違っている。」

言うや否やフィアは出かける準備をする。もう一度、『時の庭園』に行くために。

分かってなかったら教えてやるよプレシアさん…、死者蘇生の対価は、蘇えった人間が一番多く払うことになるってことを。

「フェイト、アルフ。俺、今日はもう部屋帰って寝るわ。お前らも、どうせ夜勤みたいなもんなんだから早めに寝ろよ?」

「分かったよ。」

「おやすみ、フィア。」

言葉と共にフェイトたちの部屋を出る。そして、自分の部屋（寝床）ではなく、屋上に向かう。

「リリア、座標は？」

《バッチリ記録済みです。いつでも行けます。》

「上出来だ。では、行こうか。」

《了解。目標地点『時の庭園』に設定。転移エネルギー、チャージ。》

リリアから青白い光が噴出され始め、フィアを包み始める。

（たとえ自分自身と君を否定することになっても俺は…“僕は”自分の心に従うよ、エミリアー！！）

《カウント開始します。 5 4 3 2 1 ゼロ！！転移、発動
！！》

フィアを包んでいた光が一瞬強く、激しく光った。閃光が治まった場所に、マンションの屋上にフィアの姿は消えていた。

第二十七話 過去（前書き）

かなり修正しました

第二十七話 過去

プレシア side

『時の庭園』にある、プレシアが大抵居る大広間。そこに存在する隠し部屋の奥に彼女“達”はいた。

一人は、もちろん屋敷の主のプレシアである。彼女は今、同じ部屋の中に居るもう一人と向かい合っていた。そのもう一人は幼い金髪の少女であった。しかし、その少女は目も開けず、口も開かず、眠るように、培養液で満たされた試験管のようなカプセルの中で沈黙を保っていた。

当然である。彼女は死んでいるのだから。

そんな彼女に向かってプレシアは呟く。

「……私は、間違っているのかしらね？…アリシア。」

思い出すのは、今日やってきた彼の激昂する姿とその言葉。

『死者が生き返りたがっていると、この世に残っている者達の命を

対価にしても甦りたいと思うと、本気で信じているのか！？死者が喋れないことをいいことに、勝手な思い込みで他者を巻き込むつもりなのか！？」

たった一人の肉親であるアリシアが死に、十年以上の日々を犠牲にしなから一心不乱に彼女を取り戻すためにあらゆることをしてきた。全ては、幼くして人生を終わらせたアリシアのためにと……。だがしかし、フィーアの言葉が彼女に一瞬の迷いを生じさせた。

「あなたは…いつも元気で優しかったあなたは…、私ともう二度と会えなくても構わないの…？この世に思い残すことは無いの…？」

プレシアは思い出す、かつての愛娘のことを。常に笑顔で、活発で、健気で、優しかったアリシアのことを。そして、彼女と過ごした幸せな日々と……。全てを失ったあの日のことを…。プレシアは考えるのをやめ、さっきまでの迷いを切り捨てた。

「…ふふつ。今更あんな若僧の言葉に、私は何を迷っているのかしら…。今までの全てを、アリシアのために費やしてきたんじゃない…。違法研究にまで手を染めて、あの忌々しい人形まで生ん…。」

そこまで言っ言葉が尻すばみになった。何故か最近、あの人形のことを傷つけようとする苦しく感じる。自分の抱える病の苦しみとは全く別の苦しみを…。まるで、悲しんでいるときのよう胸の苦

しみを感じるのだ・・・。

「…まあ、いいわ。もう止まれないところまで来たのだから、私はこのまま突き進むだけよ…アリシアとの幸せな日々を取り戻すために。」

そう呟き、プレシアは隠し部屋から出ようとする。その間際、もう一度だけアリシアの方に視線をやり、心の中で彼女にささやく…。

もう少しよ、アリシア。もう少しであなたと会えるわ。

そして、プレシアは隠し部屋から大広間に出た。しかしそこには、招いた覚えの無い客人がいた。

プレシアに迷いを与えた張本人、フィーアが大広間に立っていた。

フィーア s i d e

リリアの転移で『時の庭園』にやってきたフィーアは、この屋敷に

使用人がいないのを思い出し、勝手に大広間まで入ってきたのである。プレシアに確かめねばならぬことを尋ねに…。

屋敷の主は顔を思いつきり不機嫌なものにし、フィアを睨みながら口を開く。

「なんの用かしら？」

「本日働いた無礼の謝罪を。」

即答するフィア。それにプレシアは眉を顰める。

「用件はそれだけ？意外と律儀な男ね。」

「それと、もうひとつ。」

「…何かしら？」

途端にフィアは緊張したような顔をしながら静かに深呼吸をする。すでに精神的に追い詰められてる彼の様子に、リリアが不安げに尋ねる。

（《大丈夫ですか？あなたにとって一番のタブーと向かい合って…》）

（…やばくなったら殺してでも止める。）

（《なっ！？できるわけ無いでしょ！？》）

（これは命令だリリア中尉。発狂したら鎮静剤を全部撃て。）

（《…了解。》）

明らかに沈んだ雰囲気を出すリリアに構わず、フィーアは覚悟を決めたかのようにプレシアに切り出す。

「…誰を生き返らすつもりなんです？」

その言葉にプレシアは表情を変えずに沈黙する。だが、やがて口を開き答える。

「やっぱり、分かってしまうわよね…。」

「…そりゃ、あの状況であの言葉ですよ？」

未知の可能性を秘めた技術を見せた途端に『教えて』と『死者蘇生』だもの……ちよつと考えれば分かる……。そんなフィニアにプレシアは言葉を続ける。

「私は、十年前に娘を失ったのよ……。」

「娘？…フェイトの姉ですか？」

「……ふふふ、あはははははははははははははははは
はははは！！」

フィーアのその言葉にプレシアは狂ったような嘲笑で答える。その様子にフィーアはフェイトに関して、ある可能性が頭に浮かんだ。そして、それは的中する。

「はははははは…、笑わせないで！！ あんな子」…アリシアの妹
どころか私の娘ですらないわ！！」

「…じゃあ、何者なんです？」

「あの子は”アリシアを蘇らす過程で生み出した、アリシアの記憶を持ったクローンよ！…せつかくアリシアの記憶を持たせたいのに、そっくりなのは見た目だけ…、性格も何もかもアリシアとは全く別のただの“人形よ”！…“そんな子”をアリシアと同じ娘ですって？冗談じゃないわ！！」

プレシアの口から語られる事実。

娘、アリシアを蘇らすという目的。

フェイトが造られた人間であるということ。

そして、プレシアの心情。

沈黙を保つフィーアに構わず、プレシアは語り続ける。

「やはりアリシアの代わりを造るのは不可能だった…だから私はこの世界を次元震で滅ぼしてでも、次元の狭間に存在し、未知の技術が眠ると言われし『失われた都』への道をこじ開け、そこでアリシアとの幸せな日々を取り戻すのよ！…そのつもりだったけど、そこへあなたが『魔道科学』を持ってきたのよ。」

そう言ってプレシアは自分のデバイスを起動させる。そして、それをフィーアに向ける。

「あなたの『魔道科学』なら、この場でアリシアを生き返らすことができるかもしれないわ……。今すぐに知っている全ての技術を渡しなさい。そうすれば、痛い目に遭わずに済むわよ？」

オーバーSランクの魔力と殺気を滲ませながら、フィーアに脅しをかけるプレシア。しかし、フィーアはいまだに沈黙を保つ。正直、彼はフェイトが誰かのクローンという事実は気にしていない。似た境遇の人間は身近に“いくらでもいた”のだ。今更フェイトに対する態度を変える気は無い……。それよりも今は…。

その時、いつまでも黙り続けるフィーアに苛立ちを覚えたプレシアはついにキレた。

「ッ！！いい加減、何か言ったらどうなのよ！！」

その瞬間、プレシアが紫色の稲妻をフィーアに向けて放つ。稲妻はフィーアに直撃し、轟音と爆炎がフィーアを包む。

「はあ、はあ、……ッ！！……ゴボッ。」

ビチャビチャと音を立てながら自分の足元に吐血するプレシア。病に蝕まれ、今の魔法の反動にすら耐えれない自分の体に齒軋りする。

（この程度で…根を上げてたまるものですか！！アリシアのためにも、私は…。）

あなたは、ちゃんと理解しているんですか？

「な…ん…ですって…？」

顔を上げると、放った魔法による爆煙が晴れ、無傷でその場に立っていたフィーアが視界に入った。それに驚愕するプレシアを余所に、フィーアは言葉を紡ぐ。

「そのアリシアって子がどんな子か、僕には解りませんよ…。ただ、その子が人に優しい子だったというのなら、こんなことは辞めてください。」

今までに見せたことの無いような口調で、諭すように語り掛けるフイーア。だがプレシアはそれに怒声をもって答える。

「…あなたに何が解ると言うの！？アリシアを、たった一人の肉親を失った私の何が解ると言うの！？解らないでしょう！？そんな、あなたが知ったような口を利かないで！！」

「あなたの気持ちは理解してますよ。ただ、それ以上にアリシアの気持ちが解るんですよ…、“あなた以上にね”。」

その最後の一言はプレシアの怒りの炎に爆弾を投げ込む形になった。プレシアは言葉を発する前に先ほどの紫色の稲妻をフイーアに放った。しかし、フイーアはそれを正面に右手をかざし、己の魔法で弾く。魔法を防がれたことにも構わずプレシアは怒りを露わにする。

「あなたが“私より”…私のアリシアの気持ちが解るですって…？よくもそんな戯言を…、よっぽど私に殺されたいのかしら…？」

さつき以上の魔力を込め始めるプレシア。もはや自分の体など関係ない。今、目の前にいるこのふざけたことを抜かした男を殺せればもう、どうでもいい…。

「逆に訊きましょう、あなたに死人の気持ちが解りますか…？」

「な…。」

そんなプレシアの憤りをフィーアは一言で霧散させた。しかも、彼は止まらない。

「この世に残された人たちの幸せを願い、死んでいった人の気持ちが解りますか？」

「ア、アリシアはまだ十歳にも満たなかったのよ！？まだ、そんな想いを抱きは…。」

「自分が愛した人が、自分が死んだせいで狂い、堕ちていったと知った人の気持ちが解りますか！？」

「っ！？」

彼は…フィーアは自分とアリシアのことを言っているようにプレシアは感じた。同時に、フィーアが今語っているのは、ただの想像ではないということも感じていた…。

そして、何かを抑えきれなくなったかのように、フィーアが感情を爆発させた。

「僕はこんなこと望んでなかったのに……“彼女”は僕のためにと叫び続け、狂っていった……狂ってしまったんだ！！なんで“無関係な人間を殺した”！？なんで“僕の弟まで殺した”！？なんで“君自身まで殺した”！？……なんでそうまでして……！？」

僕を生き返らせた？

その独白にプレシアの表情は驚愕に染まる。

自分の求めたもの、死者蘇生の結果が目の前にいる……、にも関わらずプレシアに歓喜や高揚などの感情は芽生えなかった。何故なら、彼を蘇えらしたであろう人物の取った手段と、自分自身がやろうと

したことは同じに思えたのだ。そして…、

（もし、最初に考えた方法を使ったら……アリシアの心は…。）

最初に考えたジュエルシードの暴走による方法は、この世界の人間すべてを犠牲にすることになる。自分はアリシアが生き返ればどうでもいいとさえ思っていた。アリシアが人を傷つける行いを嫌っていたにも関わらず…。

“あなたのため”と言いつつ、結局自分のエゴを満たすだけの結果に行き着いていた。

（私は間違っていたの…！？アリシアを、“彼”のように悲しませようとしていたの…！？）

彼、フィーアは完全に取り乱し始めていた。プレシアはすでに視界に入っていないようである。焦点の定まっていない瞳で天井を見上げ、泣き叫ぶように、吼えるように、答えが返ってくることの無い問いかけを続ける。

「僕はどうすればよかったんだ！！こうなると分かっていたれば、愛されなくなかった！！憎まれたかった！！怨まれたかった！！君に殺されるほど嫌われればよかった！！…いっそ、生まれてこなければよかった！！」

「あ、あなたは…いつたい……。」

…どんな過去を経験したの？

そう問いかけようとしたその時、フィーアがまるで糸の切れた操り人形のように倒れた。

《死なないくださいよ！？》

「…わりい、心配かけたが…少し眠るだけで済みそうだ……。」

完全に発狂する前にリリアが鎮静剤を打ち込んだようである。お陰で大惨事は免れそうだ…。

「フィーアッ!!」

薄れ行く意識の中でフェイトの声が聴こえたような気がしたが、確かめる前にフィーアは意識を手放した…。

そして、彼の意識は遡る。忌まわしき過去へと…。

第二十七話 過去（後書き）

次回過去巡り

回想第一章 14年前 前編（前書き）

短くして分割

回想第一章 14年前 前編

??? side

（14年前（民暦42年）、ベルフィア連邦のとある町で…）

「とっつー!!」

――ボカアアン!!

「ウボオアアアアアッ!？」

ファンタジーとSFがごちゃ混ぜになった世界、『ベルフィア』。この世界が『連邦』という一つの組織にまとまるまで、長い長い二大勢力による戦争の時代が続いた。その名残故か、村にも街にもかつての兵士、傭兵、騎士、戦闘兵器が闊歩している。そのほとんどが連邦の正規兵になったが、一部の者たちは傭兵稼業を続けたり、賞金稼ぎへと鞍替えした。

そのような職業に就いた身とはいえ、己は戦士。自分の腕前に絶対

の自信と誇りを持つ。故に、それを誇示するために行われる決闘は、この世界では日常茶飯事である……もつとも…。

「勝った〜！！ちゃんと見てたかリーマス？」

「うん！！兄ちゃんすげえー！！」

「……（返事が無い、ただの屍のようだ）。」

この辺りでは名の知れた傭兵を圧倒する“八歳児”は流石に珍しい光景である…。傭兵を倒した少年に、彼の弟がはしゃぎながら駆け寄っていった。さらにそこへ…、

「相変わらず強えな、フィー坊…。」

「あ、行商のおじさん。こんにちわ。」

野次馬達が倒されて気絶した傭兵（負け犬）に集まり始めたとき、顔馴染の行商人がフィーアに声をかけた。

「ご褒美だ。あっちに行った時に手に入ったい品だぞ？」

「本当！？ありがとう！！」

そう言って受け取ったのは『コーヒー豆』である。もう一度言おう、ファイアは今“八歳”である。

「兄ちゃんよく飲めるよね、そんな苦いの…。俺はココアの方がいいや。」

「まったくだ、リー坊。しかもファイア坊はバリバリのブラック派ときやがった…。こいつは将来が楽しみなような不安なような…。」

「ひどいよ二人とも…。父さんが無理やり飲ませたのがキツカケだったけど、本当においしいんだもん…。」

ちなみに父さんこと『トラス・レイガード』はその時、調子に乗って酒も飲ませようとしたが…。妻、『ベルノア』に見つかり、半殺しにされたそう…。(ベルファイアに飲酒の法的年齢制限は無いが、未成年に飲ますのは体に悪いことにかわりないので各自の家族が責任を持って管理している。)

「ところで、リー坊の方は最近どうなんだ？兄貴に追いつけそうかい？」

「まだまだ無理だよ。俺、兄ちゃんほど魔法使えないし…。」

「そう言うけど、リーマスは僕より剣の扱いがうまいじゃないか。」

フィーアもリーマスも、戦士としてかなりの領域にいる。二人ともある程度のことはこなすが、フィーアは特に魔法、リーマスは剣の扱いがうまかった。リーマスは5歳の時に初めて剣を握ったのだが、才能があつたようで1年経った今では『天才剣子』の異名を持っていた。

「はっはっはっ、頼もしくも末恐ろしい小僧共だな。これなら二人とも夢を叶えられるんじゃないか？」

……二人で軍に入り、父と祖父のような英雄になる。

「うん、絶対に叶えてみせる!! な、リーマス。」

「うん、兄ちゃん!! ……あ、そういえば今何時かな?」

「え…?」

そう言つて広場の時計台を見て時間を確認するレイガード兄弟。そして、二人は顔を青ざめさせた…。

「しまったあああ！！」

「……またエミリアの嬢ちゃんとの約束を忘れて、道草くつてたのか…。」

行商のおじさんは呆れたように呟く。彼にとっては見慣れた光景のようである。

「な、なんで時間のこと言わなかったんだよりーマス！？」

「兄ちゃんが『僕の戦う所をちゃんと見てろ』って言ったんじゃん！！」

「バカ、そんなの優先しなくていいよ！！“アクマリア”に会いたいのか！？」

「『アクマリア』って何よ…。」

「怒って、暴走して、残虐な悪魔みたいになったエミリアのこと……
って、あれ？」

フィーアは気づいた。今の会話にリーマス以外の誰かが加わったことを……行商のおじさんが逃げるように去ったことを……リーマスが顔をさらに青くさせていることを……そして……

「へえ、知らなかったな」フィーアが私のこと、そんな風に言っていたなんて……ね？」

フィーアは声のした方へと恐る恐る振り返る。するとそこには……

「約束すつぽかしかけたことと、今の言葉の説明……してもらったよ……？」

フィーアとリーマスの幼馴染であるエミリアが、笑顔で青筋を浮かべながら立っていた……。

回想第二章 14年前 後編（前書き）

次回からついに暗くなります。

回想第二章 14年前 後編

フイアー side

「…痛い。（泣）」

「兄ちゃん、頭がすごいことになってるよ…？」

特大のたんこぶを頭に作らされたフイアーは蹲っていた。そんな彼に拳骨をくらわせた少女は、長い黒髪をなびかせながら、紫色の瞳でフイアーを見下ろしていた。

「フンッ！！私との約束忘れかけた上に、余計なこと言うからよ。」

レイガード兄弟の幼馴染、『エミリア・クロムウェル』は辛辣な言葉を投稿かける。

「だって、しょうがないじゃないか…、腕試しは僕たちの趣味だもん。」

「兄ちゃん、俺はそんなに好きじゃないんだけど？」

その言葉に弟を肘で小突くフィア。そんな二人に白い目線をやり、エミリアは溜息をつく。

「ハア…、もういいわ。早く行きましょ？」

「はいはい。」

「ほい。」

そして三人は歩き出した。目的地はエミリアの自宅である。そこで新しい魔法を“創って”遊ぶ予定だったのだ。自称魔法が苦手のトラスは大抵実験台にされるのだが、天才の兄とそれに匹敵する才能を持ったエミリアの試作魔法のほとんどは一発で成功するので、そんなに嫌がってない。

「今日はどうする？」

「新しい治療魔法でも作らない？」

「え…、もしかして俺に今すぐ怪我しろとか言わないよね？」

「「言わない（わ）よ。」」

身に余る才能故に、三人には同年代の友達がほとんどいなかった。そのため、三人は互いの絆をとても大切にしていた。滅多に表に出さないが、フィアにいたっては特別な感情をエミリアに抱いていた。

「ところで、エミリア…。」

「なによ?。」

「さっきはゴメンね…。」

フィアの謝罪にエミリアはムスツとした表情を見せて返す。

「どっちのことかしら?。」

「え?。」

「遅刻の方? “アクマリア”の方?。」

「…両方。」

素直に認めると、エミリアはすんなりと表情を優しいものへと変えた。その表情に、フィーアはホッとした。同時に、少しドキッとした。

「いいわよ、許してあげる！さ、早く行きましょ？」

「うん！！」

「…俺、帰っていい？」

三人は自分たちの夢と未来のために歩き続けていた。周囲から尊敬されようが、恐れられようが、三人が一緒なら何も気にならなかった。何でも成し遂げれそうな気がした。不可能なんて無いと感じた。

一人は、英雄になるために。

一人は、尊敬する兄を追いかけるために。

一人は、自分の才能で誰かを救うために。

自分たち三人は、いつまでも一緒に居て、笑いあい、泣きあい、喜び合い、共に生きると信じて疑わなかった。ずっとこの楽しい日々が続くと信じて疑わなかった。

――この2年後、フィーアが死ぬまでは。

回想第三章 12年前（前書き）

ファイア・10歳

エミリア・10歳

リーマス・8歳

回想第三章 12年前

トラス side

ここは連邦軍お抱えの最先端医療施設。魔道科学を用いた医療技術は『治せぬ者は死者のみ』と豪語するだけの実力と実績があった。にも関わらず、今日ばかりは病院の一室に暗い雰囲気漂っていた。

フィーアが10歳を過ぎて少し経ったころ、異変は突如起きた。唐突にフィーアが倒れたのである。すぐさま精密検査を受けたフィーアだったが、彼とその家族たちは絶望するしかなかった。

――連邦のあらゆる医療技術を持っても治療不可能。余命は長くて一ヶ月。

それがフィーアに与えられた現実だった。厳密に言うと、フィーアの症状は怪我や病気では無かった。フィーアの人体にある魔力源（結構違う部分があるが、リンカーコアみたいな存在）が出す自身の膨大な魔力に、自分の体が耐えていなかったのだ。この症状自体は珍しくないで、魔力源そのものを抜き取り、魔法が使えなくなる代わりに命を取り留めるという治療法が存在した。しかし、無情にもフィーアにはこの手段すら使えなかった。何故なら…

「魔力源がフィアの魂そのものとはどういうことだ!？」

彼の父親、トールスが医者に詰め寄る。いや、もはや怒号だけで殺しかねない勢いだっただ。その怒気に若干震え上がりながらも、医者は懸命に説明する。

「こ、言葉のとおりです。検査の結果、お子様の魔力源は独立した器官ではなく、彼自身の魂と一体化しているのです。」

通常魔力源は、実体を持っているわけでは無いが一種の内臓器官として存在しており、それが無くなっても命まで失うことは無い。魔法と科学の両方を使いこなす連邦の技術を持つてすれば、簡単に取り外せるし、取り付けることもできる。

しかし、連邦の魔道科学を持つてしても解明できないものがあつた。『靈魂』である。魔法を理解してるが故その存在は認められたが、その存在そのものの謎は解明できていない。判っているのは恐ろしくデリケートであり、それが無くなった生き物は死ぬということぐらいである。

「つまり、このまま放置したら死ぬが、死ぬ原因を切り離してもフィアは死ぬというのか…?」

「残念ながら…。」

「魂から魔力源を切り離すというのは無理なのか？」

「今の連邦の技術ではとても無理です。魂は肉体から一定時間離れると自動的に消滅してしまいます。ただでさえ魂の構造が判らないというのに、ぶっつけ本番で彼の魂を解剖したら治療どころではありません…。」

まさに八方塞がり。敵を屠るしか能の無い自分の無力感に、連邦の英雄は絶望した。

ファイア side

ファイアは、世間的に見たら短くも充実していた自分の人生に思いを馳せていた。不思議と自分の命のタイムリミットが近づいていることに恐怖を感じなかった。それは実感が湧かないだけなのか、自分が異常なのかは分からなかった。

今、ファイアは病室のベッドでおとなしくしていた。リーマスと母親は自分の傍で眠っている。さっきまで母は『ファイアの病は自分のせい』だと泣き続けていたのだ。確かに自分の魔法の才能は母親譲りと自負していた。しかし、仮にこの病の原因が本当に母親の才能のせいであっても、彼は母親を恨む気にはならなかった。むしろ感謝したかった。何故なら…。

「こんにちは、フィア。お見舞いに来たわよ。」

「ありがとう、エミリア。」

彼女と仲良くなる機会をくれたのだから。出会って4年経った今、フィアはエミリアのことが好きであることを自覚していた。まだ、本人にそのことは教えてないが…。

「退院はいつになりそうなの？」

「僕にも分からないや。でも、いつか元気になってまた3人で遊ぼう？」

「……うん。」

そして、自分の余命がヶ月も無いことも教えていない。これはフィアが家族に自らお願いしたことである。『エミリアに僕のことには教えないで』と。彼女に泣かれたくないから、と家族にそう頼んだ。

「…ねえ、フィア。」

「なに？」

「……私は諦めないわよ……。」

「え……？なんだって？」

「ッ！？……なんでもないわ。とにかく、あなたが元気になるの、リマスと待ってるからね！！！」

「うん、ありがとう！！！」

この時、ファイアがエミリアの呟いた言葉を聴いていたら、あるいは自分の運命とそれに対する想いを彼女に打ち明けていたら、未来は変わっていたかもしれない。

……そしてこの2週間と3日後、『ファイア・レイガード』は十年という短い生涯を終わらせた……筈だった……。

回想最終章 10年前、運命の日（前書き）

二次創作が禁止される前に無印だけでも書き上げてやる…

回想最終章 10年前、運命の日

??? side

とある大屋敷。本来なら、家の住人と使用人であふれているこの場所も今は廃墟と化していた。そこにいるのは、光る何かを手に宿した少女だけだった。

- - - いつからだろう…、ヒトを人として見なくなったのは…。みんなが彼のことを諦めるなか、私だけは彼を諦めなかった。それは彼が消えたあとも変わらなかった。そして、この日のためにあらゆるもの費やした…。

- - - 自分の才能

- - - 自分の時間

- - - 自分の誇り

- - - 自分の夢

- - -そして、他者の命

自分の持っていた、失いたくなかったモノの全てを使った…。そうまでして、私は彼を取り戻そうとした。いったい何から取り戻すのかはワカラナイ…。でも、何を取り戻すのかはワカッテイル。

- - -全ては、彼のために。

かつての黒髪は所々に白髪が混じり、すっかり濁った紫の瞳を持った少女は虚ろな表情で、その手に握った“彼の魂”を見つめ、笑みを浮かべた。

フイア side

何も認識できない真っ暗な空間。自分の体も、声も、気配も何も認識できない。あるのは自分の記憶と意識だけ。それが2年前に死んだ少年、フイアが居る場所だった。

死んだ直後、彼の意識はこの真っ暗な世界にたどり着き、そのまま眠るように意識も記憶も徐々に消えていった…。しかし、まるで急に

たたき起こされるような衝撃と共に、自分の意識がハッキリしたのである。その後、このなにも無い空間に意識と記憶だけの存在として、今も留まり続けている。

「…僕は、死んだんだよね？」

眠ることも意識を手放すこともできず、この空間に長い間存在する中で、フィーアは恐怖に襲われた。

…消えたのは僕じゃなくて世界の方なの？

『自分が死ぬ』…それは大きな世界から小さな自分が消える。ただそれだけのことと思い、家族やエミリアが生きていれば未練は無かった。ところが、もしも逆だったら？

…自分のもことから世界が消えたのだとしたら？

…何もかも失ったのだとしたら？

…全て取り戻せないとしたら？

記憶と意識があるが故に、自分以外の全てを失ったことを意識しながら存在し続ける。その孤独感是最早、地獄のような苦しみを彼に与えた。

「父さん、母さん、リーマス……、エミリア……。」

記憶に残り続けている自分にとって大切な人たちを思い浮かべ、涙を流せないまま彼は泣いた。

……しかし、その時間は唐突に終わりを告げる。何かに引っ張られるかのように、彼の意識がどこかへ飛ばされた。

エミリア side

かつての我が家の一室にいくつもの複雑な魔方陣を展開し、エミリアはその魔方陣の中心に置かれたモノを見て歓喜の笑みを浮かべる。

……ついに……、ついに彼を取り戻す時が来た！！治療法を見つけるまでの時間稼ぎのため、フィーアがあのだ世に旅発たぬように“彼の魂をこの世に押し留めてきた”。そして今日、治療に成功した！あとは魂を彼の肉体に戻すだけ……。そうすれば、フィーアは帰ってくる……フィーアに会える……フィーアと過ごせる……会って、お話して、そして……

-
-
- また、一緒に遊びましょう？

[illegible]

狂ったように笑いながら、エミリアは己のほぼ全てをつぎ込んだ。
『死者蘇生魔法』を発動させた。

魔方阵の輝きが一層強くなり、彼女の手から放たれたフィアの魂は、その中心に置かれた彼の肉体へと飛んでいった。

――そして、魂が肉体に入り込んだ。

「ははははははは……はは……え？」

瞬間、エミリアは異変に気づく。……おかしい、予想していた反応と違う……と。

「っ！！まさか…、そんな！？彼の肉体が自身の魂に耐えれないと
いうの！？」

…その時、フィアアの肉体が崩壊を始めたのである。

「そんな、なんで！？……ダメ…こんなのダメよ！！こんな結末、
絶対認めない！！」

…何か…、何か無いの！？今までやってきた『魂維持魔法』の
準備をするヒマは無い！！このままじゃフィアアは確実に死ぬ！！
なにか方法は！？

その時、誰かがエミリアのいる部屋の扉を開けた。この光景を目撃
し、侵入者は何かを叫ぶ。

「~~~~~ッ！！」

「あ。。」

しかし、今のエミリアにその侵入者の言葉は耳に入らなかった。彼女はその侵入者が何者なのか判らなかった。しかし、あることに気づいた。フィアのために“千人近い人間を殺してきた”彼女は一目で理解できた。

――このヒトはフィアの器になれる。

その瞬間、彼女は即座にフィアの魂を呼び戻す。ほんの短い間しか魂を操れないが、今はそれで充分。そして、侵入者に彼の魂を解き放った。

「エミリアッ!？」

「…え？」

侵入者がエミリアの名を呼んだのとほぼ同時に、放たれたフィアの魂が彼の体に入りこんだ。そして、彼の声に反応し、ようやく自分是谁に何をしたのか理解した…。

「あ…あ、ああ……わ、私は…今、何を…したの……?」

「エミリア……いたい、今まで何をしてたんだ!？」

――大切な人の大切な弟、リーマスに彼の魂を撃ち込んだのだと。そして、それは取り返しのない結果を迎える。

[illegible]

「イヤあああああッ！？リーマズー！！！」

フィーアの魂に拒絶反応を出したリーマスの体が崩壊を始めた。彼の肉体のあらゆる部分が裂け、同時に目や耳から血を撒き散らした。激しい激痛にリーマスは悲鳴を上げながらのた打ち回った。

「……ダメ、ダメよ！！これ以上失ってたまるものですか！！」

エミリアは自分に残された全ての魔力を彼の治癒に使った。肉体の破壊と修復の繰り返しの中、ついに激痛に耐えなくなったり、マヌは意識を手放した。それでも肉体の崩壊は止まらず、エミリアは

治癒魔法を続けた。

――そして、彼の肉体の崩壊が止まった。

自分の魔力を使い果たしたエミリアは、白髪混じりの黒髪を完全な白髪に変え、その場に倒れこんだ。やがて、死んだように静かだつたりーマスがむくりと起き上がった。崩れたフィーアの体と、自分の体を驚くように見比べ、エミリアの姿に驚愕の表情を浮かべた。最後の力を振り絞り、彼女は彼に問いかける。自分のやってしまったことがどんな結末を迎えたかの…。

「今のあなたは、誰なの…？」

その問いに、彼は答える

「僕は”…”。

その一言で、彼女は全てを察した。そして、

「ごめんなさい、許して…フィーア……。」

――それが彼女、『エミリア・クロムウェル』の最後の言葉となつた。

第二十八話 今を生きる死者として（前書き）

ようやく帰ってきた…

第二十八話 今を生きる死者として

リリア side

「そ…そんなことが……。」

《私が彼に聞いたのはこの位です。》

場所は『時の庭園』にある一室。その部屋のベッドに意識を失った
フィーアは寝かされていた。そして、その間にリリアはプレシアに
フィーアの言葉の真意と過去を一部語った。

- - - 彼は12年前に一度死んでいること。

- - - 彼の幼馴染が死者蘇生を成功させたこと。

- - - 今のフィーアの肉体は弟のものであること。

- - - その代償があまりに大きかったこと。

その事実にも、プレシアはただひたすら驚愕するしかなかった。今す
ぐにでも叩き起こしてフィーアに死者蘇生の術を聴き出す……本来

の彼女ならそう思っただろう…。しかし、気絶する前のフィアの叫びと、フィアの過去を一部聞いた今の彼女に、その気力は湧かなかった。

《あとの詳しいことは本人に訊いてください。》

「ほとんど喋ってんじゃねえか馬鹿野郎。」

《あ、お目覚めですか？》

意識を取り戻したフィアはリリアに愚痴りながら、むくりと起き上がる。そして、プレシアの方を見るなり頭を下げる。いきなり頭を下げられたプレシア少々戸惑う。

「お見苦しいものをお見せしました…。」

「…そんなもの、どうでもいいわ。それより、詳しく聞かせてくれないかしら？」

「先に断っておきますが、僕の方法でアリシアさんは救えませんか？」

「それはそれよ。とにかく、あなたの過去も含めて詳しく聞かせてちょうだい。」

「……ある意味、あなたはアリシアと同じなのだから。」

フィーアは渋々ながらも過去の続きを語り始めた。

「生き返った僕はあのあと、騒ぎを聞きつけた軍警察に保護された。そして、エミリアが死んだことと、彼女が何をしていたのかを聴いた……。」

そもそも彼女、エミリアはフィーアの命が長くないことをすでに知っていたらしく、フィーアの死ぬ一週間前には『魂維持魔法』を完成させ、『死者蘇生魔法』の準備を始めていたそうだ。そしてフィーアの死に際、『魂維持魔法』を発動させフィーアの魂を強制的にこの世に縛り付けたのだ。死後、フィーアの意識がこの世でもあの世でもない例の空間にいたのはこの魔法が原因だったらしい。

「つまり、あなたは死んだというより仮死状態だったわけ？」

「あながち間違ってますけど、そこから自力で目覚めることは無いに等しいので死体のようなもんです。そして、今で察したと思います……。」

「…あなたの言う『死者蘇生魔法』は“死んだ人間”ではなくて“死ぬ予定の人間”にしか通用しないということね。」

「…そういうことです。」

その言葉にプレシアは少し落胆する。だが、何故か思ったよりショックは少なかった。興味が他のことに向いているからだろうか？

「まあ、いいわ。それじゃあ、そのまま話を続けて。」

「…ハイ？」

「あなたの今は、私が目指したものの結果と同じようなものなのよ…。だから、私がこのまま突き進んだらどうなるか教えてちょうだい。」

…このまま蘇ったら、アリシアはどのような想いを抱くのかを…。

何かを察したフィーアは話を続けた。

「エミリアが『死者蘇生魔法』を使用したことを聞いたあとに、使

用するまでの過程を聴かされました…。 “魂の仕組みが判らないから僕の治療ができなかった” とリリアは言っていましたか？」

「ええ、聴いたわ。…ん？…そういえば彼女はどうかやってあなたの魂を治療したの？」

その問いにフィアの表情が一気に暗くなった。その様子にプレシアはその答えを聴くことを躊躇った。しかし、もう遅かった。

「簡単なことですよ…判らないのなら、判るまで調べればいい…サンプルが無くなれば、サンプルを集めればいい…魂が手に入らないのなら……。」

…殺して手に入ればいい。

その言葉を聴いてプレシアは絶句した。エミリアはフィアの治療のために何人もの命を奪い、他者の魂を調べては壊し調べては壊しを繰り返し、ついに魂の構造を理解してフィアの魂を治療したのだ。

「最初にそのことを聴かされた時は“さつき”より酷く狂いましたよ…。あんなに優しくかった彼女が僕のために“972人”も殺していたと知った時は…。僕が愛されたせいで、みんな彼女に殺されたんだと…。」

「……そんな、なんで…なんでそこまで彼女は…。」

「そんなの、娘のために世界を一つ犠牲にしようとした貴方の方が解ってるんじゃないんですか？」

「ッ！？……そうね…その通りよね…。」

ついさっきまで生々しい話を聴いたせいか、自分のことを棚にあげていたプレシア。自分だってアリシアを愛するがあまり、世界を次元震で潰そうとしていたのだ。しかし、今の彼女はアリシアのためにも彼女と…エミリアと同じ道を歩む気にはなれなかった…。

「でも、もうできそうにないわ…、私自身が罪を犯すことを気にしなくても…アリシアにもその罪を背負わすことになるのだから…。」

約60億人もの命を犠牲にしてアリシアを生き返らせても、アリシアの心はきつと耐え切れずに死んでしまう…。

「でも、私はこれから何のために生きればいいのか？」

うな垂れ、呟くプレシアにフィーアは話を続ける。

「もう少しだけ、その後を語りますね。僕はその後、とりあえず家に帰されました。事情を聞いた家族は死に損ないの自分を迎えてくれました…。ところがある日、異変に気づきました。」

「…？」

「コーヒーが嫌いになってました。」

「…は？」

意味不明な言葉に、プレシアは思わずそんな言葉を吐いてしまった。だが次の言葉で何が言いたいのか解った。

「…代わりにココアが好きになってました…さらに、剣の腕が生前より上がってました…。そして身に覚えのない記憶まで…。」

「ッ！？まさか…。」

「ええ、弟の…リーマスの名残が出てきました。元々これは彼の肉体ですからね…。」

そこから新しい地獄が始まった。蘇ったあの日、自分は反射的に『僕』と言った。だから自分は『フィア』だと思った。しかし、日に日に『リーマス』の部分がでてきたせいで自分がどっちなのか判らなくなった…。

…俺は『フィアの魂を持ったリーマスなのか』

…僕は『リーマスの体を奪ったフィアなのか』

…それとも『どちらでもない“ナニカ”なのか』

己のアイデンティティーが解らず、苦しみ続けた日々を少なからず送った。そしてある日、父親に無理を言って軍の士官学校に入れてもらった。『かつての兄弟の夢を叶えるため』と。しかし、実際は…。

「死に場所を探しに行っただけだったんですね。その短い日々で何回死にたくなったことか…死のうとする度に、自分のせいで死ん

だ人間を思い出して自殺できませんでした…。」

「…。（絶句）」

プレシアはもう言葉がなくなっていた、これが自分が迎えようとしていた結末の一つであることに。そんな彼女を気にせずにフィアは言葉を紡ぐ。苦笑いを浮かべて…。

「ところが、死に場所を探しに行ったら居場所を見つけてしまっています…。」

士官学校の最速卒業記録を叩き出し、軍に正式に入隊した。その後、色々な部隊に配属されたのだが、そこには色々な人間がいた。

「孤独な天才、犯罪者の子供、元テロリスト、人体実験の犠牲者、人種差別の犠牲者…そして、誰かのクローン。」

「ッ!？」

無論、プレシアはフェイトのことを思い出す。

「その誰かのクローンとして産まれた彼とは親友になりました…。」

互いの出生と事情も教えあいました…彼は誰かの代用品として創られ、あっさりと捨てられたそうですよ？」

「…そう。」

「ところが、彼は毎日全力で精一杯生きてます。僕は『何故そこまで前向きになれる？』と彼に尋ねました………そしたら……。」

「……俺（今）を造ったのはオリジナル（過去）だ、でも俺の道（未来）を決めるのは俺（今）だ。」

「『だから俺は、オリジナルなんか気にせず、俺の思うがままに生きる。』と言ったんですよ。それを聞いた途端、気づきました。』」

「……僕は“あの日（過去）”を気にするあまり、一步も進んでいなかった。」

「だから“僕と俺の部分”の両方を含めて『ファイア・レイガード』として生きることになりました。そしてそこから比較的、いきいきと働くなか、ここに漂流した次第です。」

最後はやや強引な気もしたがファイアの話は終わった。その話、特に最後の言葉がプレシアは心の中で反芻した。

（あの日を気にするあまり、一步も進んでない…ね。）

アリシアが死んだあの日から、自分の時間は確かに一步も進んでいない。死んだアリシアのためにひたすら幻を追いかけていた……そして、“あの子”を……。思考の波に沈む中、ファイアが再び口を開く。

「プレシアさん……。あなたは『何のために生きればいい？』と言いましたね？」

「……ええ、言ったわ。もう、私にはアリシアしか居なかったもの……。」

「……まだ、あなたを母と呼ぶ子が居るじゃないですか。」

その瞬間プレシアは様々な感情の入り混じった表情を見せた。そして叫ぶ。

「あんな子」…アリシアの代わりに造った“あの子”のために生きるというの!？」

「あなた、さっきフェイトのこと人形呼ばわりしてましたよね？」

「当然よ!！」

「フェイトのことを『人形』と呼んだ回数より多く『あの子』と呼んでた自覚あります?」

「ッ!？」

言われて自覚する。自分が『人形』と貶していたフェイトを『あの子』と、一人の『人間』として認めていたことを……否、とつくに気づいていたのだ…ただ認めたくなかったただけなのだ、自分がフェイトを…。

「……フェイトを自分の娘であると…愛していると認めるのが怖かったのよ…まるでアリシアを諦めるみたいで…。でも、これがあなたの言う『一步も進めてない』状況だったのかしらね?」

プレシアは自嘲的な笑みを浮かべ、後悔するように涙を浮かべた。

「でも、もう手遅れよ…。私はフェイトに散々酷いことをしてきたわ…。あの子は私のことを憎んでいるわ…。」

「…ファイアは『そんなことは無い』と、プレシアに言おうとした。しかし、その言葉を言ったのは彼では無かった。

「そんなことないよ!!」

扉が開かれる音と、声のした方を見ると部屋の入り口に金髪の少女が、フェイトが立っていた。

第二十九話 自分の意思で（前書き）

今回でようやく『時の庭園』の話が終わる…

第二十九話 自分の意思で

フエイトside

「フイーアがフエイトたちに内緒で『時の庭園』へ向かったあの時……」

フエイトとアルフの二人は、フイーアが部屋を出て行ったときもテレビを見ている“フリ”をしていた。

「……アルフ、行くよ。」

「本当に追いかけるのかい？」

さつきはアルフに『無理に訊くな』と言ったフエイトだったが、彼女もフイーアが何を隠しているのか気になっていたのだ。

「でも、フイーアは本当に部屋に帰っただけじゃ……？」

「ううん、大丈夫。バルディッシュ！」

《Yes, sir. …リリア殿の反応を確認しました。屋上に向か
つてます。》

「…流石、私の御主人様。」

「さ、行くよ!!」

そんなわけでフィアがこっそり出掛けたのはバレバレだったのだ。
フィア自身、二人を侮ってたのもあるが、自分のトラウマと向か
い合うことを気にしすぎていたようである…。

〈数刻後、プレシアとフィアの口論時〉

「ははははは…、笑わせないで!! “あんな子”…アリシアの妹
どころか私の娘ですらないわ!!」

「…じゃあ、何者なんです?」

「“あの子は”アリシアを蘇らす過程で生み出した、アリシアの記

憶を持ったクローンよ！！…せっかくアリシアの記憶を持たせたというのに、そっくりなのは見た目だけ…、性格も何もかもアリシアとは全く別のただの“人形よ”！！…“そんな子”をアリシアと同じ娘ですって？冗談じゃないわ！！」

広場の入り口前で二人の様子を窺っていたフェイトは、その言葉を聴いて崩れ落ちた。

…私は母さんの娘では無い…？

…私はアリシアのクローン…？

…自分は母さんに拒絶されていた…？

突如つきつけられた事実によりフェイトは絶望に打ちひしがれた。この世の全てがガラガラと音をたてて崩れていく感覚を味わい、表情と瞳から生気が失われ、意識が虚ろなものになっていく…。

「フェイトッ！！しっかりしてよフェイトッ！！」

アルフの呼びかけも耳に入らず、フェイトはそのまま意識を手放そうとした…だが、

…ドオオオオオン！！

突如響いた轟音にフェイトは我に返った。何が起きたのか確かめようとすると、プレシアがフィアに攻撃魔法を放ったのが分かった。

（（フィアッ！？））

アルフと共に息を呑む。しかし、やはりというかフィアは無事だった。右手から魔方阵を出現させ、防いだようである。フィアの周囲の爆煙がはれた時、フェイトは衝撃的なものを見た。

（ッ！？母さん、血が！？）

プレシアが吐血しているところを目撃したのである。思わず大広間に飛び込んで母の元に駆け寄ろうとしたのだが、そうするよりも早くフィアが口を開いた。

「あなたは、ちゃんと理解しているんですか？」

その言葉にフェイトの動きが止まる。プレシアは無事な姿のフィアを見て驚愕していたが、フェイトはフィアの方に意識を集中させていた。

「そのアリシアって子がどんな子か、僕には解りませんよ…。ただ、その子が人に優しい子だったというのなら、こんなことは辞めてください。」

今までに見せたことの無いような口調で、諭すように語り掛けるフイーア。だがプレシアはそれに怒声をもって答える。

「…あなたに何が解ると言うの！？アリシアを、たった一人の肉親を失った私の何が解ると言うの！？解らないでしょう！？そんな、あなたが知ったような口を利かないで！！」

「あなたの気持ちは理解してますよ。ただ、それ以上にアリシアの気持ちが解るんですよ…。“あなた以上にね”。」

その言葉にプレシアは再び魔法を放つが、フイーアはそれを再度防ぐ。フェイトは彼の言葉の真意が解らず、尚も聴き入る。

「あなたが“私より”…私のアリシアの気持ちが解るですって…？よくもそんな戯言を…、よっぽど私に殺されたいのかしら…？」

「逆に訊きましょう、あなたに死人の気持ちが解りますか…？」

「な…。」

（死人の気持ち……？）

――この世に残された人たちの幸せを願い、死んでいった人の気持ちが解りますか？

――自分が愛した人が、自分が死んだせいで狂い、堕ちていったと知った人の気持ちが解りますか！？

フィーアが言っているのは、プレシアとアリシアのことだとフェイトは思った。しかし、頭で解ってても何故か違和感を感じた。

（フィーアがまるで自分のことのように語ってるのは、なぜ……？）

そして、何かを抑えきれなくなっただかのように、フィーアが感情を爆発させた。泣き叫ぶように、獣の雄たけびのように、彼は語る。

「僕はこんなこと望んでなかったのに……“彼女”は僕のためにと叫び続け、狂っていった……狂ってしまったんだ！！なんで“無関係な人間を殺した”！？なんで“僕の弟まで殺した”！？なんで“君自身まで殺した”！？……なんでそうまでして……僕を生き返らせた！？」

「…え？」

「な…なんだって……？」

フェイトとアルフは一瞬フィアが何を言ったのか理解できなかった。

…フィアは昔、死んで生き返った人間？

…母さんが求めたものの一つ、死者蘇生の成功例？

自分の正体を知った時と同じような感覚に襲われたフェイト。アルフも同じように混乱しており、プレシアでさえ衝撃を受けていた。そんな彼女らに構わず、フィアは狂ったように叫ぶ。

「僕はどうすればよかったんだ！！こうなると分かっていたれば、愛されなくなかった！！憎まれたかった！！怨まれたかった！！君に殺されるほど嫌われればよかった！！…いつそ、生まれてこなければよかった！！」

だが、突然フィアの叫びが止まった。同時に、彼は倒れた。

「フーアッ!？」

ついに耐え切れず、フェイトは広間に飛び込み、倒れたフィアに駆け寄った。そんな彼女を見たプレシアは動揺する。

「な…!？フェイト、どうしてあなたまでここに!？」

「……母さん……。」

先ほどの会話を聴き、自分の正体とプレシアの気持ちを知ってしまったがために、そこから先は何も言えなかった。しかし、以外にも言葉を続けたのはプレシアの方だった。

「…いいわ。とにかく、今は彼をここから動かしましょう。…アルフもきてるんでしょう？運ぶのを手伝わせなさい。」

「…はい。」

そしてフェイトとアルフはフィアを寝室まで運び、彼が目覚める

まで別室で休んでいたのだが…。

フイーア s i d e

く 今に戻るく

「話し声が聴こえたから来てみたら、僕じゃなくてリリアがベラベラ喋っていて、ずっとそこで聴いていたと…？」

「…うん、勝手に聞いてゴメン。」

今日、何度も盗み聞きを繰り返したフェイトは罪悪感でいっぱいである。ちなみにアルフはその別室でまだ眠ってる。

「別にいいよ、僕も二人に内緒で来たわけだし…。先にフェイトの秘密を本人より知ったんだ…僕の秘密の一つや二つ、ばれても気にしない。」

「ありがとう…それと、私は……。」

「フェイト、僕の親友の話も聞いたんだろ？君がアリシアのクロールであることは関係ない、君は君なんだ。先日も言っただけ、僕は君たちを見捨てない。だいたい、フェイトが人じゃないって言うなら、僕も人と呼べるような代物じゃ無いんだから……。」

「……フィア……。」

「そういうことで、この話はおしまい。……あ、ところでリリア。」

《なんでしよう？》

フィアは自分の左腕にくっついてるリリアに視線をやる。

「お前、気づいてたろ？」

《……さて、なんのことやら。》

「ほっ？。」

おもむろに左腕からリリアを取り外し、右手に握る。

「リ・リ・ア・ン・ヌ?」

――メキメキメキメキメキメキメキ!!

《アイダダダダダダダダダダダダダダダダ!!?ゴメンナサイごめんなさい御免なさい!!本当はバルディッシュさんにサーチされた時点で気づいてました!!》

「まったく…。」

今のコント染みたやり取りのせいで、三人のいた部屋に微妙な空気が漂う。その責任をとるようにフィーアが口を開く。

「…んで?フェイトはプレシアさんに何か言いたいんじゃないのか?」

「うん…。あのね、母さん…。」

その言葉にプレシアは体をビクリと震わす。そして、フェイトがその言葉の続きを言おうとするが…

「母さん、私…。」

「駄目よ、フェイト…。」

「え…?」

「私は、あなたに今まで散々酷い事をしてきた…人としても、誰かの母親としても、私は最低な人間よ…そんな人間を『母さん』と呼んじゃ駄目よ…。」

でた言葉は拒絶。しかし、その言葉はフェイトの存在を否定するものでは無かった。今まで自分がしてきたことへの罰のつもりだった。

「だから、あなたの母親としてあなたと一緒にいることは、もうできないわ…。」

「…私は確かに、『アリシア・テストロッサ』のクローンなんだよね…。」

「ッ!? 待つて、そういうことじゃないの…!!」

フェイトが、自分がアリシアのクローンであることが原因で拒絶されたのでは?と誤解されたと思い、プレシアは焦る。しかし、彼女

の意思是プレシアが思ってるより強かった。

「でも、母さんが感じたように、私は『アリシア』じゃなくて『フ
エイト』って言う一人の人間なんだよね？」

「…ええ、その通りよ。」

「だったら…私が『母さんの笑顔を見たい』と思うこの気持ちは、
アリシアのもので、母さんが埋めつけたものでもない私自身の想
い…だから!!」

意を決したようにフエイトはプレシアを見つめ、自分の想いを言葉
にして発する。

「私は私の意志で母さんの傍にいる!! 例え母さんが望まなくても、
私がアリシアのクローンであることも関係ない!! 私は母さんを笑
顔にしたい!! 母さんを愛したい!!」

「ッ…フエイト…!!」

…今を作るのは過去、しかし未来を決めるのは今。

フェイトのその言葉にプレシアは涙を浮かべた。こんな最低な人間を『母さん』と呼び、笑顔にしたいと、愛したいと言ってくれる目の前の少女に、ただ涙した。フェイトも目に熱いものを浮かべて尚も言葉を続ける。

「だから母さん、一緒にいさせて…お願い……。」

「…フェイト……!!」

そして二人は涙を流しながら、互いに抱き合った。今までの罪を懺悔するように、今までの想いが伝わり喜ぶように、今までの埋め合わせをするように……。

「ごめんなさい…ごめんなさい、フェイト…愛してるわ……!!」

「…母さん…母さん……!!」

その親子の姿を、フィアは目に涙を浮かべながら見ていた…。その様子に気づいたリリアが静かに話しかける。

《…よかったですね。》

「…何がだ？」

《あの日たてた誓いを、あなたの過去に対しても守れたことです。》

…あの日、自分が死んだせいで人が死んだというのなら、俺は生きている限り人を救い続ける。

「俺の過去そのものと同じってわけじゃなかったさ…けど、俺みた
いな…この“死に損ない”の経験で人を救ったのは初めてだったな
…。」

そして、フィーアは天井に視線を向け、心の中で呟く。

（君はどう思う？ エミリア…今の僕は、かつての君も救えるかな？）

…ええ、きっと。

彼女のそんな声が聴こえた気がした。

第二十九話 自分の意思で（後書き）

次回、『アースラ遭遇』

第三十話 アースラ、来る（前書き）

ぐはあ！！ぐだぐだあ！！

第三十話　アースラ、来る

フイアー side

場所は海鳴市のとある場所。そこに不気味な人面樹と向き合う複数の人影があつた。

『時の庭園』から帰ってきた翌日、フイアー達はなのは、ユーノ、みらいと合流してジュエルシードの探索をしていた。プレシアがジュエルシードをもつ必要としておらず、今は全面的になのは達に協力する形になったのだ。しかし、プレシアは興味本位でジュエルシードを集めていたことにしておいた。さらに、昨日判明したフイアーとフェイトの真実はしばらく黙っておくことにした。

そして今、目の前にはジュエルシードの暴走により怪物化した樹がいるのだが…気の毒としか言いようがなかった…。

「【ディバイン・シュート】――！」

「【フォトン・ランサー】――！」

「【三日月閃光波】！！」

「【スナイパー、タイプTB】！！」

桜色の魔法弾、稲妻の矢、光の斬撃、対戦車ライフルの一斉射をもろにくらった人面樹は一瞬で消え去ってしまった…。結界の展開をしており、この場にいないユーノとアルフがいないのがせめてもの救いか…そうでもないか。

「お前のソレは小銃だけじゃないのか…。」

みらいは対戦車ライフルと化したフィアのヴィルガロムをみてそう言う。

「他にもまだあるぞ？バズーカに機関銃にビーム砲に…。」

「…いや、もういい。」

しかもフィアはみらいとの戦闘で、『黒羽』を使って迫撃砲を造った。おそらく他にも兵器を造りだせるのだろ…。さながら『戦う武器工場』といったところか。

そんなみらいを余所に、フィアはジュエルシールドを回収しようと

する。

「なにはともあれ、とっとと回収しまおうぜ？ フェイト、なのは、封印よろしく。」

「うん。」

「任せて。」

そして二人はジュエルシードに近づく。ところが…。

「ストップだ!!」

いきなり6人のうちの誰でもない声がした。空を見上げると、全身黒い服装をした少年がデバイスを構え、こちらを見下ろしていた。

クロノside

「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらう、まずは全員武器を引いてもらおうか。」

そんな少年、クロノを見て全員何を考えていたのかというと…。

（ふえ？時空管理局？）

（時空管理局！！…やっと来てくれたのか…。）

（時空管理局！？どうしよう……て、私達ってもう捕まるようなこと、してないんだっ…。）

（黒い格好でクロノか…。）

（ほお、こいつがアリアの言ってたクロ助か…。）

（…俺と服装が被ってんじゃないか。ええか。）

緊張感の欠片も無かった…。口に出さずとも雰囲気では何かを察したクロノは額に青筋を浮かべる。

「とにかく色々説明してもらおう!!特にその黒い奴!!」

そう言ってフィアを指差す。

「鏡見て言え、黒装束。」

「うるさい!!…君は見たところ魔導師でもあるようだが、さっき質量兵器を使ったな?」

「(年下に『君』呼ばわりされんのがこんなにムカツクとは…!!)…おたくら時空管理局の基準で言ったら、その通りだ。」

クロノの言葉を肯定する。すると、クロノはとんでもないことを言い出した。

「君を逮捕する。」

「…ハア?」

唖然とするフィア。フェイトやなのは達も同様である。とりあえず話を聞いてみる。

「理由は？」

「そんなの、魔導師の身でありながら質量兵器を使用したんだ。当然じゃないか。」

「ここは『管理外世界』だろ？ましてや俺は管理世界の住人では無
いんだが？」

「そんなこと知るものか。とにかくついて来てもらう。」

その時、フィアの中で何かがプツンしたようである。それを察
したフェイト、アルフ、なのは、ユーノはその場から少し遠くに離
れた。そして、控えめであるがフィアの例のあれが始まった。

「あはははははははははは、交渉決裂だな…。リリア、録音は
？」

《バッチリです。》

「な、何を言ってるんだ？…抵抗する気か！？」

「さあ？どつだろうね？少なくとも俺自身は“まだ”抵抗しないよ。」

「ッ！？【バインド】！！！」

言うや否や捕縛魔法を放つが、フィアを拘束する前にクロノの魔法の方が消滅した。その現象に衝撃を受けるクロノ。

「なんだと！？」

「悪いな、そういう体質なんだ。」

腹の立つようなニヤケ顔で答えるフィア。体質というのは、ぶっちゃけ嘘である。今はフード付ジャンパーと化しているフィアの軍服は、軽い魔法や弾丸なら防げるのである。

「クソッ！！だったら、【ステインガー・レイ】！！！」

今度は本格的な攻撃魔法を放つクロノ。しかし、フィアは笑みを浮かべる。それが彼の狙いだったのだから…。

「それを待ってた！！…正当防衛の口実ありがと！！！」

「なに!？」

クロノの魔法が放たれた場所にフィーアはすでにいなかった。即座に回避してそのまま移動したようである。慌てて周囲を見渡すクロノ。しかし、自分の背後から声が聴こえた。

「牛乳飲んで出直せ、チビ。」

……ドゴン!!

という音と共に、クロノは翼を生やして飛んできたフィーアに蹴り飛ばされた。

フィーア side

「そんなの毎日飲んでるに決まってるだろ——————
————ぐえッ!!」

という断末魔(?)と共に、クロノは地面に叩きつけられた。一応手加減はしてあるが、それなりに効いただろう…。クロノの心配も

そこそこに、フィアはフェイト達のもとに舞い降りた。

「さてと、ぶっ飛ばしといてなんだけど…どうする？」

「うーん、一応俺の友人経由で話は通ってた筈なんだが…。」

「なに？…ああ、いつだか言ってたな、友人の知り合いに管理局員がいるって。」

とりあえず気絶したクロノを見る。彼は今、アルフに枝で突つつかれていた。それを止めようとするフェイト、さらにそれを眺めるユーノとなのは、そんな光景が目に入った。

「おい、生きてるか？（ツンツン）」

「ちよっ、アルフ！！一応管理局員なんだからやめよう！？」

「うーん、なのはやフェイト達の方が頼りになりそう…。」

「ねえねえユーノ君、管理局員って何？」

…フィアとみらいはその光景を見なかったことにした。話を管理局のことに戻す。

「…とりあえず、俺は保険用に今のやり取りを『職権乱用の証拠』として手札に加えとく。あんたは？」

「さっきも言ったが俺は友人を信用してみる。問題は『同盟世界』か…。」

もし『同盟世界』と『管理世界』が遭遇したら、今のフィアとクロノのやり取りと同じことになるだろう。ようは大戦争だ。その時、フィアは思いついた。

…帰ろうとしてる俺達が帰れないなら、探す気を無くした管理局はなおさら無理なんじゃ？

「…なあ、あんたは『アルテミア』に帰れなくても平気か？」

「…向こうに未練は無い。俺の家族は、この世界にしかないない。」

それを聞いてフィアはニヤリとする。

「これならある程度素性を喋っても問題無いはずだ…。任せろ。」

フィーアがそう言ったのとほぼ同時に、二人の目の前に立体映像が現れた。そして、

『時空管理局所属、次元航行艦アースラ艦長、リンディ・ハラオウン』提督です。少しよろしいですか？』

連邦と管理局の将校が邂逅した瞬間だった。

第三十一話 暴露大会（前書き）

PV7万突破！！みなさん、ありがとうございます！！

できれば感想もください！！

第三十一話 暴露大会

みらい
side

時空管理局の提督、『リンディ・ハラウン』に事情説明を求められ、時空管理局次元航行艦『アースラ』に招かれた6人。フィアーにノされたクロノは、終始仏頂面のままだったが……。ところが、しばらくしてアースラ内部からひとつの叫び声が響いた。

[illegible]

フェレットから人型に戻ったユーノになのはが驚いたのだった。しかも、気づいてなかったのはずっと一緒にいたのはだけらしく…。

「へえ、見た目は予想外だったな…。もうちょいカッコいい系だと思ってたよ…。」

「ふむ……中性的な顔だな。『淫獣』のわりには……」

「ちよっ、みらいさん！？淫獣ってどういふことですか！？」「

不名誉な称号に憤慨するユーノ。しかし、彼は墓穴を掘った…。

「ユーノ…、俺も温泉に居たの忘れたのか…?」

「それと僕が淫獣呼ばわりされると、どう関係するんですか!?!」

「お前の気配を感じたんだよ。なのはとずっと一緒だったな?……女湯に入る時も…。」

「……ッ!!???」

「あ、そう言えばなのはが更衣室から出てくるときには、もう肩に乗ってたね…。」

みらいの言葉とアルフの証言を聴いた瞬間、その場の空気が瞬時に変わった。ユーノは『ピシリ』と音を立てて固まり、みらいを含めた4人はユーノに軽蔑の眼差しを送った。

なのは被害者はそのことを思い出したようで、顔が真っ赤である。

「待つて!!あれは不可抗力で…!!」

「ユーノ……。」

「フエ、フェイト……？」

今まで黙ってたフェイトが笑顔で口を開く。だがそれは救いの言葉では無く……。

「しばらく私とアルフに近づかないでね」

「……orz。（撃沈）」

とどめの一撃であった。そこへ、この混沌とした空間にいい加減嫌気がさしたのか、クロノが口を挟み、ようやく移動を再開した。そんな中、みらいは念話では無く、思念通信でフィーアに語りかける。

（そんなデマカセで大丈夫か？）

（大丈夫だ、問題ない。）

（お前それ……死亡フラグ……。）

（大丈夫だつて。連邦や同盟世界が救援に来ちまったらしようがねえけど…現状、管理局に同盟世界を探す気にさせないのためには、この大嘘が一番だ。そもそも、連邦の魔道科学はもう見られたから言い訳できないし…。）

（…分かった、お前に合わす。）

（感謝する。）

二人の会話が終わった時、丁度艦長室の前に着いたようである。扉が開いた。

（さて、どうなることやら…。）

フイーア side

…なんだこの部屋は？俺の父さんも結構な趣味してたけど、ここま
でじゃ無かった。中途半端に『和の文化』が混ざってらっしやる…。
いや、知らない人からしたら『和の文化』はすごい魅力的なのは分
かる。連邦の同盟世界に『和の文化』を持った世界と交流が始まっ
た時、ある意味社会現象的なブームが巻き起こったが…。とりあえ
ず、緑茶に砂糖を入れるな。

「飲みます?」

「…では、おひとつ。」

フィーアの言葉にその場にいた全員がギョツとしたが、フィーアはあえて飲んでみた。

「…嫌な意味で懐かしい味がする。」

「…苦いのか甘いのか分からない、訓練時代の地獄飯と一緒に出された『解毒剤』の味がした。」

「改めまして。時空管理局所属次元航行艦『アースラ』艦長、『リンディ・ハラオウン』です。先程は私の部下が失礼しました。」

先程のクロノの対応を早々に謝罪され、相手が高官ということもあってフィーアは仕事口調に変えた。フィーアの雰囲気が先程と変わったことにクロノは驚く。フェイトたちは、もう慣れたようで反応が薄い。

「ご丁寧にも。名字が先程の執務官殿と同じですが、ご姉弟ですか?」

「あら、お世辞ですか？そんなに若く見えます？」

「ははは…もしいと思いました、やっぱり親子なんですね？」

「ええ、クロノは私の息子です。実はよく間違えられて驚かれるんですけど、あなたはそれほど驚かなかったわね？」

「身近にいい例がいますからね…。」

そう言うと、6人中なのはを除いた5人がなのはに視線を向けた。

「ふえ！？私！？」

「なのは…君の家族、特に桃子さんがね…。」

ユーノが苦笑いしながら言った。初めて『翠屋』に行った時はフィアもフェイトもビックリしたものだ…なのはの姉でも通じそうな容姿だった。リンディと桃子さん。この二人を研究したら不老不死の薬でも作れるんじゃないか…？

余計なことを考えていたらみらいが話しに割り込んできた。

「お話中失礼、ハラオウン提督。そちらにリーゼアリアから紹介状がいつておりませんか？」

「な！？あなたは、アリアを知っているんですか！？」

見知らぬ人間が、自分の師匠とも言える人物と交流があることにクロノは大変驚いた。

「ついでに君の呼び方もな。クロ助。」

「間違い無さそうだ：orz。」

本日二人目の撃沈者が出た。その時、艦長室の扉が開き、一人の女性が入ってきた。執務官補佐の『エイミィ』である。

「艦長！！今さっき、リーゼ姉妹からメッセージが入りました！！
…一応、クロノ君あてだけど…。」

「内容は？」

「『親愛なるクロ助へ（笑）。今度、第97管理外世界に行くらしいけど、『ミランダル』って奴に会ったら間違っても喧嘩売らないでね？私たちの友達だからってのもあるけど……そいつ、メチャクチャ強いから。でも、悪い奴じゃないから大丈夫。仲良くしてね。――追伸・今は別の名前を名乗ってるから気をつけてね。』……以上です。」

この紹介状（もはや、ただのメール）の内容を聞いて頭を抱える人物が二人。一人は、どう考えてもからかわれてたクロノ。あの追伸の内容……絶対にクロノがみらいに喧嘩うる状況作るために書いたな？……そして、もう一人頭を抱えてるのはみらいである。

「……あの馬鹿、本名の方で書きやがって……。」

――本名……？『アルテミア王国』の『ミランダル』……？……ゲツ！？

その瞬間何かを思い出したかのように、フィーアは勢いよくみらいの方を振り向いた。

「『ミランダル・ラインベルト』！？あんだ『銀河の守護霊』の『ラインベルト』か……！？？？」

「その異名で呼ぶのはやめろ……俺にとっては黒歴史なんだ……！」

状況に全くついていけず、フィーアとみらい以外の全員はポカンとしていた。しかし、フェイトやなのは達は、フィーアとみらいの世界の話なんだと察したようである。アースラ三人組は以前と混乱していた。とりあえずクロノが口を挟む。

「……君たちの間で見解の相違があったようだが…そろそろ事情の説明をしてくれないか？」

埒の明かないカオススパイラルはこうして終わり、ようやく説明が始まった。

「フィーア一行、アースラクルーに説明」

「なるほど、そうですか。あのロストロギア、ジュエルシードを発掘したのはアナタだったんですね。」

「それで、僕が回収しようと。」

説明の大部分はユーノに喋ってもらった。フィーアやフェイト達、みらいは現地での協力者ということにした。事実、ユーノから強奪したのは一回だけで、回収したのはもう返した。しかも、あれは強奪と言うよりネコババである。ちなみに、まだユーノとなのは以外の素性はまだ説明してない。

ユーノの説明が終わり、リンディが口を開く。

「立派だわ」

「だけど、同時に無謀でもある」

「だったらもっと早く来い、ノロマ。」

「何だと!？」

クロノの一言につい口を挟んでしまった…。だが、ユーノは事故に会った当日には通報していたのだから、組織の名前に『管理』の文字を入れるなら、そのぐらいしっかりしてほしい。

「落ち着きなさいクロノ。フィーアさんの言うことも一理あるわ…。」

「母さ…、艦長…。」

リンディはお茶（砂糖入り）を一口飲んで一拍置いた。そして言い放った。

「これより、ロストログア、ジュエルシードの回収については時空管理局が全権を持ちます。」

その言葉に、責任感の強いなのはとユーノは戸惑う。フェイトとアルフは『どうすればいい？』と視線をフィーアに送る。そんな中、クロノが言葉を続ける。

「君達は今回の事を忘れて、それぞれの世界へ戻って、元通りに暮らすといい。」

「でも、そんな。」

「次元干渉に関わる事件だ、民間人に介入して貰うレベルの話じゃない。」

「でも!」

なのはは尚も食い下がろうとするも、クロノはバツサリと断り続ける。まあ、危険なことに民間人を巻き込まないのは、軍や警察組織の鉄則だから間違ってるない。

「まあ、急に言われても気持ちの整理がつかないでしょ、今夜一晩よく考えて、それから改めてお話しでしょ。」

リンディのその言葉にフィアとみらいが反応する。

「...優しい顔して意外と腹黒いじゃねえか。」

「いいや、今決めさせてもらいましょう。」

「...あら、どうしてかしら？」

「明日になったら主導権が変わってしまうでしょう？」

「...。」

二人のそのやり取りに、大人3人を除いた全員が首を傾げる。不思議

議に思い、なのはは隣にいたみらいに問いかける。

「あの、みらいさん…。どういう意味です？」

「なのは…お前、絶対に明日になってもジュエルシードの回収を辞めないだろ？」

「…うん。」

「ということはだ…必然とアースラに『手伝わせてください』と言う羽目になる。もし、コイツらが『いいよ』と言つても、お前は形式上協力者ということになるが…多分、『手伝わせてください』と『頼んだ側』として少なからずコイツらの命令をきくことになるぞ？」

遭遇したばかりの現時点では、かろうじて対等の立場である。つまり…。

「まあ警戒しないでくださいよ、邪魔なんかしませんから。むしろ、『手伝つてさしあげます』よ。」

…立場は最低でも対等、最高で上から目線。

「いないと言ったら？」

「それでも勝手に回収させていただく。あなた方だけに任せるのは少々心細い。」

「な！？ふざけるな！！」

フィーアの遠まわしな『役立たず』発言に半ばキレるクロノ。しかし、そんなどこ吹く風とフィーアは言葉を続ける。

「ですが、こちらも人数が心もとないのも事実。我々は質のいい戦力がある。代わりに、そちらは人数がある。同じ目的を持った者同士、足りないものを補いませんか？」

「...。」

リンディは考えるように沈黙する。さっきのやり取りをふまえ、フィーアの言いたいことはこうだ。

...進んで争う気は無い。

――むしろ協力させる。

――ただし、対等な関係であり服従する気は無い。

そして、暗にこうも言ってる。

――戦って勝てると思うなよ？

協力しなくてもお互いに損はしないが、やはり協力した方が得である。A A Aランクの魔導師二人を指揮下におけないのは少し残念だが……もともと勧誘が任務ではないので諦めるとしよう……。

「分かりました。そちらの要求……いえ、提案を吞みます。」

「艦長！？」「」

アースラクルーの二人は驚愕した。フィアは自分の思い通りになりニヤリとし、フェイト達は苦笑いをしていた。そして、なのははフィアに近づき、

「えっと、ありがとう？フィアさん。」

「何故に疑問符を付けた？…まあ、悪役にしか見えなかったか。」

こうしてアースラとフィーア達の交渉及び協定は終了した。

リンディ side

それにしても…青年とはいえ、まだ20代そこらの彼がこうも頭が回るとは。彼はいったい何者なのかしら？……ていうより…。

「あなたは明らかにこの世界の人間では無いわよね？」

「ええ、そちらの言うところの次元漂流者です。」

「ついでに、俺はもう静かに暮らしていたかったから、リーゼアリアには俺のことを黙ってもらっていた。」

リンディのその問いに即答する二人。さらに自分達の世界がどんなところかを軽く語った。魔法と科学の世界、ベルフィア連邦。何故かベルカの技術を持つアルテミア王国。二人の語る世界にリンデ

イとクロノ、エイミイは目を丸くした。『管理局の知らない世界にそのような場所があったとは』、と。そして、リンディはみらいの黒歴史に触れる…。

「時に『ミランダル』さん。…さっきフィアさんが言っていましたけど『銀河の守護霊』って?」

「そ、それは…その…。」

「ああ、それはですね…」

「ッ!?! 貴様!?!」

みらいは触れてほしくないようだが、フィアはあえて穿り返す。交渉も終わったので普段の口調に戻っている。

「俺達の世界では、このヒト有名人なんですよ。『アルテミアの王家に手を出すもの、星を従えし亡霊に葬られん。かのものの名は銀河の守護霊、ミランダル・ラインベルト』って。今ではアルテミア王国で子供の絵本にもなってるんですよ。随分物々しい内容だから老人かと思ってたら…こんなに年が近いとはねえ…。」

「え?! フィア、二人って何歳なの?」

フェイトが尋ねたので、必死に止めようとするみらいを無視して答える。

・ファイア・20歳

・みらい・26歳

「「「「え？」「」「」

今更だが、みらいの見た目は30代前半で通る。（プロフィール2参照）

「だあああああ！！だから、嫌だったんだ！！ただでさえ近所の子供が『ミランダルごっこ』してるとこ見るたび恥ずかしかったのに、このこと話すと最終的に俺の老け顔の話になるんだよ！！」

いつもの彼らしくないヤケクソっぷりに周囲はポカンとなる。いつもの冷静沈着なみらいからはとても想像できなかった…。

「そんなに気にすることでも無いだろうに…。」

フィーアが呆れたように言った。しかし…、彼は自滅の道を辿ることになる。

「（カチン！！）…お前のことを俺が知らないと思ってるな？…『黒鋼の不死鳥』。」

「（ギックウウー！！）…な、なぜその異名を？」

「自分の活躍っぷりくらい自覚しろ、馬鹿め…お前も充分有名人だ。」

「あら？フィーアさんも有名人なのかしら？」

先ほどの交渉で実質負けた恨みなのか、ニヤニヤしながらリンディはフィーアに問いかける。しかし、仕返しもかねてか、みらいが先に口を開く。

「ほれほれ、提督殿も説明を求めてるぞ？……特務“准将”閣下。」

その瞬間、アースラの艦長室の時が止まった…と、後にクロノ執務

官は語っている。

第三十一話 暴露大会（後書き）

管理局対策のデマカセは次回に使用します。

履歴書（武装説明追加）（前書き）

ファイアの経歴^{ネタバレ}

履歴書（武装説明追加）

本名 フィーア・レイガード（20歳）

所属 ベルフィーア連邦政府軍第七師団 L大隊（通称『連邦の何でも屋』）

階級 特務准将（有事の際は少将権限あり。）

経歴 本来なら14歳から入学可能な連邦軍士官学校に10歳で入学、4年制プログラムを僅か2年で首席卒業。将来を見込まれ、卒業と同時に12歳で大尉に抜擢される。軍務1年目で多大な戦果を挙げ、少佐に昇格。その後も戦果を挙げ続け、15歳で特務佐官（中佐待遇）に昇格。同時に特殊遊撃隊、『レイガード（L）隊』を設立、隊長の座に着く。そこから3年間、なぜか出世を拒み続けながらも活躍。しかし、ついに半ば強制的に准将の座に着か“される”。『L隊』も『L大隊』に格上げされ、今にいたる。

備考 諸事情により情緒不安定（軍務に支障なし）。出世を拒むのは、本人曰く『書類に殺される…』とのこと。連邦軍統合監察部隊総司令、『トーラス・レイガード』大将の御子息である。母親は『ベルノア・レイガード』であり、ベルフィーア連邦で最も重要な方の血を引く。

武装について

・ヴィルガロム

フィーアの魔剣。刀とサーベルが混ざったような剣である。魔銃形態に換装でき、魔弾を撃てる。フィーアは剣の状態で魔方阵を書いたが、これはヴィルガロムの能力では無い。その気になれば爪楊枝でも書ける。

・連邦製、リニアガン正式採用電磁銃

連邦の主力拳銃。連射もでき、威力をチャージすれば対物ライフル並みの威力を発揮する。また、銃身にプラズマの刃を纏うことが可能。フィーアはコレに特殊なプログラムを搭載している。

・ヴィルガロム、プログラム搭載状態。

リニアガンに搭載したプログラムを吸収させることにより、形態変化を増させた状態。基本的に剣と銃だが、総数はかなりのもの。
『サーベル』：細身の剣。『スライサー』：日本刀。『アサルト』
：小銃。『ランチャー』タンク・ブレイク：グレネード。『ショット』：散弾銃。『スナイパー、タイプTB』：対戦車ライフル。『マジック・ガン』
：純粋な魔法専用銃。この他にもまだまだ存在する。

・黒羽

フィーアの背中に生えた4枚の翼。連邦の魔道科学の結晶のひとつで、魔力を素に非魔力物質を生成でき、電気で魔力を生成できる。飛ぶもよし、造ってよし、撃ってよしの万能兵器である。

履歴書（武装説明追加）（後書き）

いつだか書いたフィア^①の祖父、『御隠居』を出す日はいつになる
だろうか…。

第三十二話 実はポーカーが苦手（前書き）

タイトルは…あまり気にしないでください。

第三十二話 実はポーカーが苦手

フ
エ
イ
ト
s
i
d
e

先程のmiraiのカミングアウトにより、リンディの艦長室はなんともいえない空気に包まれていた。フェイト達は、出会った当初にフイーア本人から軍人であると聞いていたが、正直あまり実感が湧いていなかった。それがどうだ…最も冗談が似合わないmiraiの口から、冗談のようなフイーアの経歴が暴露されていく…。

「確か、実質少将待遇だったか？」

「……厳密には『准将以上少将以下』な……」

こういうことにあまり詳しくない、なのはが首を傾げる。

「ユーノ君、准将って偉いの？」

「……なのは……フィアは実質、將軍でことだよ……。」

[illegible]

本日二度目の絶叫である。フィアに非があったとはいえ、なのは
は一国の軍隊の将軍に『デバイン・バスター』をぶち込んだこと
になる。

そんな中、リンディが驚き半分、呆れ半分の表情で口を開く。

「どつりで頭の回転が早いというか、場慣れしてると思ったわ…。
うちのクロノもエリートの部類に入るけど…あなたは、それ以上ね
…。」

「……まあ、半分は弟のお陰ですけどね…。」

リンディに聞こえない程度に呟いた言葉をフェイトは聞き逃さなかつた。そして、フィアの過去を知っているフェイトは思い出した。フィアが自身の才能だけでなく、リーマスの記憶と才能も所持していたことを…。つまり、天才二人分の資質を持っていたからこそ、彼はこの経歴を作り上げたのである。

「それで、あなたたちは次元漂流者なのだけど…“自力で”元の世界には帰れそうなのかしら？」

リンディが『自力で』の部分を強調して二人に問いかけた。

「無理ですね。」

「俺は帰らなくても構わないんだが…。」

「だったら、管理局が責任を持って『保護』するわよ？もちろん、『現地協力者』として。」

ようするに、『こちらに本格的に協力すれば、故郷に帰る手段を提供する』と…。本来なら『ギブアンドテイク』で従ったろうが、今回は連邦と管理局を“遭遇させない”のが最優先。だから…

…すまん、戦友たちよ。俺、当分帰れないかも…。

「それは無意味でしょうね…。」

「あら、何故かしら？」

「…俺が飛ばされたときに、俺の世界は全部…。」

――跡形も無く消滅したんですから…。（大嘘）

フイーア s i d e

「なッ！？」

「そんな…。」

「…。」

クロノとエイミイは驚愕し、リンディは沈黙する。フェイトやなのは達には、事前にデマカセを言うとおいたので、割と落ち着いている。みらいは…落ち着きすぎだろ、というくらい微動だにしない…。

「原因は不明ですが…突如巨大な次元震が発生し、こちらの世界は空間の歪みで破壊されました…。連邦の唯一の同盟世界であるアル

テミア王国も同じように…。多分、帰ったところで待っているのは次元震で空間が不安定になった危険地帯だけでしょうね…。」

『巨大な次元震』も『連邦の唯一の同盟世界』も全部デタラメである。今も全世界は絶賛繁栄中だろうし、同盟世界の数は実際は管理局の管理世界並みにある。

そんな勢力が存在していると知ったら、管理局は同盟世界を放置するわけがない。しかし、その脅威がとくに滅亡し、尚且つ危険地帯に存在していると思ったら？そして、なにより…。

「だいたい…俺自身、帰る方向すら分からないのに、あなた方に探せるんですか？」

目的地があるかどうか分からない上に、手がかりゼロで苦勞した拳句、それに見合った見返りも得も無い可能性が大きいのだ。そんな場所、誰が探すというのだろうか？

「故郷は無くなりましたが、折角拾ったこの命。似たようなこと（次元震）で無駄にする気はさらさら無いです。だからジュエルシードの回収は協力します。その後のことは、とりあえずこの騒動が終わってから考えますよ。」

「…分かりました。ですが、こちら側も何かしらあなた方を支援させてください。一応、仕事ですから。」

「感謝します。」

「では、今日の話はこれでおしまいということぞ。」

「ええ、また明日お会いしましょう。」

してやったりの笑顔を浮かべながらフィーアは心の中でガッツポーズを決めた。

リンディ side

そうして、今日の話は終わった。ついでとばかりに、エイミィがフィーア達6人を艦長室から連れて行った。残されたのはハラオウン親子二人だけである。そんな中、クロノが口を開く。

「母さ…艦長は彼らをどう思います?」

「誰もいないから母さんでいいわよ。それにしても、魔力がAAA級のなのはさんにフェイトさん、スクライアー族のユーノさんに使

い魔のアルフさん、リーゼ姉妹が認めたミランダル…今はみらいさんね。いずれも只者じゃ無いけど、特にフィーアさんは結構なやり手ね…。おそらく彼の最後に言ってたことは嘘よ。」

「自分の世界が消滅したことがですか？」

「ええ、多分彼に対するあなたの態度を…管理局の性質を踏まえて、軍人として彼の世界と管理局の接触を避けたかったんじゃないかしら？」

「うぐつ…。」

リンディに言われ、クロノは言葉を詰まらす。今更ながら、あの対応の仕方は問題があったと後悔はしていたのである。

「フィーアさんの言う通りだとしたら、連邦は魔法と質量兵器の両方を扱うのよ？そんな世界を管理局が管理外世界で片付けるわけもないし、管理世界にするにしても質量兵器は無視できない。だからって、いきなり彼らの武器を取り上げるような真似をしてみなさい？戦争になるわよ。」

「そこまで彼が考えていると？」

「多分そうね…。だからこそ彼は手強いわ…。」

そこまで配慮した上で、あのハツタリをかますのだから…。でも、残念ねフィーアさん。あなたは、まだまだ若いみたいよ？

「…でも、なんで母さんは彼が嘘をついていると？」

「彼ね、私と話を終わらせた時、顔が笑ってたわ…。」

「…悪戯を成功させた子供のような笑顔を…。」

知らぬ間に、リンディに弱点をひとつ発見されたフィーアだった。

第三十三話 黒鋼の不死鳥（前書き）

久々の戦闘描写。

第三十三話 黒鋼の不死鳥

なのはside

「今だ、なのはー!!」

「【デイベイン・バスター】ー!!」

――チュドオオオオオオン!!

とある山岳地帯、ユーノの【チェーン・バインド】で拘束されて動けなくなり、もがくジュエルシードの暴走により巨大化した怪鳥にトドメをさしたなのは。そして、効力が無くなり、ジュエルシード本体が現れた。

「【ジュエルシード・封印】ー!!」

なのはは難なく封印を成功させる。同時に、アースラのエイミィから通信が入った。現在、なのは達6人は昨日の話し合いのとおり、アースラと連携してジュエルシードの回収作業を行っている。

『お疲れ様、なのはちゃん!!』

「ありがとうございます、エイミーさん。ところで、他のみんなの様子はどうですか？」

『ちょっと待つて、えつとね…。フェイトちゃんとアルフは今のところ2つ回収したみたいだよ。ミラン…みらいさんはまだゼロみたい…。あ、クロノ君とフィーアさんは今から暴走体と戦うみたいだよ?』

ミランダルと言おうとして言い直すエイミー。今日、再び会った彼のことを本名で呼んだら恐ろしい形相で睨まれたそうだ…。

『とりあえず、休憩も兼ねて一回帰ってきなよ。』

「はい、わかりました。」

そついつて通信を終了させた。今のところ、集まったのは今のを入れて9つ。二人のを入れたらついに半分を超える。

「よし!!…この調子で頑張ろう、ユーノ君!!」

「うん!」

今のところ、ジュエルシード集めは順調に進んでいる。

フイア side

ところ変わって、どこかの湖。フイアはそこで暴走体と向かい合っていた。

「でっけえ、ガラの親戚か?」

《なんでこう…動物は巨大化を願うんでしょうか…?》

湖から現れたのは、怪獣と見間違えるほど大きく、ゴツクな亀だった。大きさは40mはあるんじゃないだろうか?

「そりやお前、野生の世界じゃ大抵『サイズ』パワーだ。生き残るために力をつけるにはコレがてっとり早い。」

《なるほど。つまり、あなたは野生の世界ではこの亀より格下なんですね?》

「ふん、“野生”の世界ではな。今から魔法と科学を持って、その世界の鉄則をぶち壊してやるさ……。」

その言葉に答えるかのように、フィアの背中に黒い四枚の翼が現われた。そして、翼を羽ばたかせ、無数の羽根を周囲に展開させた。

「さて、アースラクルーの結界はどうだ?」

《上出来です。あなたの流れ弾程度なら大丈夫そうです。》

「上等。」

監視を兼ねてフィアに随伴してきた数名の管理局員…アースラの『武装隊』。しかし彼らは、巨大亀を見た瞬間に逃げ腰になっていた。サポートに回ってもらったことにした。…あとで聞いた話によると、新人だったらしい。

「それじゃ… 久々にブツ放すか!! 【黒羽・速射弾頭】!!」

そう唱えた瞬間、フィーアが展開させた黒羽が一瞬光った。光が収まったその場所には、柔らかそうな羽根ではなく、4つのヒレが付いた細長い筒状の物体が浮かんでいた…。早い話、宙を舞っていた無数の黒羽が全て…。

――ミサイルになっていた。

「全弾発射！！」

フィアの声に従うかのごとく、空中にたたずんでいたミサイルは、全て巨大亀に突撃していった。

[illegible]

圧倒的な火力と弾幕により、巨大亀は爆炎に飲み込まれた。湖の周
辺は硝煙に包まれる。だが、ファイアの表情は変わらない。まだこ
の状況を楽しんでいるようである。

「ッ！！来た！！」

――ヒュオッ、ドオオン！！

風を斬る音と共に巨大な何かが振り下ろされ、フィアが飛び退いた場所にクレーターができた。よく見なくても、巨大亀の腕である。甲羅が少々焦げていたが、巨大亀はまだピンピンしていた。

「そうこなくっちゃな！！俺の技は人に向けて撃つていいものじゃないからな…、ここぞとばかりに遠慮しねえぞ！！」

フィアは空へ舞いあがった。巨大亀の周囲を高速で旋回しながら、羽ばたく度に黒羽を散らし、標的に向かって先程のミサイルを造っては撃ち造っては撃ちを繰り返す。湖一帯に爆音と爆炎が絶え間なくたちこめる。

「…翼を羽ばたかせ、爆炎を生み出すその姿は、まさに火の鳥『不死鳥』。」

しかし、これだけの弾頭を撃ちこまれたにも関わらず、巨大亀は健在であった。

「…そろそろ、いいか。【集え黒羽・殲滅妖光】！！」

すると、まだミサイルになってなかった無数の黒羽が、一か所に集まり始めた。なにかを感じた巨大亀はその集合体を壊そうとする。し

かし、それをフィーアは許さない。

「おっと、通行止めだぜ？…【黒羽・炎翼砲門】！！」

巨大亀の眼前に飛んできたフィーアの翼から左右15門ずつ、計30門の“砲口”が覗いていた。さらに、手には対戦車ライフルと化したヴィルガロムが握られていた。

「戦車砲、一斉射！！」

……ドガガガガガガガガガガガガガン！！

30を超える砲弾の全てが巨大亀の顔面に命中する。頭部への攻撃は流石に効いたようで、苦悶の叫びを上げ、逃げるように甲羅の中に籠もった。

だが、それはフィーアの前には無意味であつた…。今ので、集合を命じた黒羽がその準備を終えたのである。黒羽が集まっていた場所には、まるで別の物が佇んでいた。それは口径が1メートルを超える、巨大でやけにメカメカしい大砲であつた。しかも、発射するのは鉛弾では無く…。

「魔力式充電型“陽電子”砲、発射用意。」

《発射用意。》

『ピピピ』と機械的な音を発しながらエネルギーをチャージさせていく陽電子砲……そして、

《エネルギー充填終了。発射用意完了。いつでも撃てます。》

「【殲滅妖光】、発射！！」

《発射！！》

- - ズゴオオオオオオオオオオオオオオオオ

オオオオオン！！

眩い閃光と、激しい轟音と共に放たれた光線は、フィーアのミサイルに辛うじて耐えていた巨大亀の甲羅をいとも簡単に貫いた。断末魔を上げ、ついに巨大亀は霧散し、暴走体がいた場所には、ジュエルシードが浮かんでいた。

「リリア。」

《了解。ジュエルシード、機能掌握……制御成功。》

リリアの手により、あっさりと封印を完了させる。それを確認したファイアは、やっと一息ついた。

「よし、任務完了。結界組にも連絡よろしく。」

《了解。それにしても…ファイア、あなた遊んでましたね？》

「…何故そう思う？」

《【殲滅妖光】以外の黒羽兵器に“魔力反応が皆無”でした。ヴィルガロムもほとんど使ってなかったでしょう？》

「…バレタか。こっち来てから黒羽をほとんど使ってなかったから準備運動を、と思ってね……。それと、こっちを見ている『アースラ』の奴らに警告も兼ねてな……。」

「…俺らを敵に回したらどうなるか…ね。」

《逆に目の敵にされませんか?》

「そうならないよう、『敵にするより味方にした方が得』って思わせとくさ…。とりあえず帰るぞ。」

《了解。》

そうしてフィア達は、封鎖結界内とはいえ、戦場と化した湖を後にした。

- - - 結界を張っていた新人局員達が、フィアの戦う姿に羨望の眼差しを向けていたことを知らず…。

第三十三話 黒鋼の不死鳥（後書き）

【殲滅妖光】は、なのはの【全力全開STB】と同等ということぞ。

第三十四話 闇が牙を向く（前書き）

感想待ってまゝす

第三十四話 闇が牙を向く

みらい side

くアースラ、ブリッジ内にてく

「…それで、残りは全部海にあると?」

「おそらく…」

みらいとクロノの二人が話し合っていた。リンディは席を外しており、他のクルー達は各自の持ち場についている。なのは達は近くで二人の話を聞いていた。

ジュエルシード共同探索から早数日。回収したジュエルシードの数は全部で15個になった。二人は今、以前発見できていないモノは、地上ではなく海に落ちていると推測していた。現に微弱だがジュエルシードの反応も確認できた。

「それにしても…この海鳴市に隣接している部分だけでもかなり広いぞ?」

「分かっている。しかし、だからといって放置するわけには…」

わざわざ海に潜ってサルベージするわけにもいくまい…。何か効率のいい探し方はないだろうか？頭を悩ます二人。

「そつえば…、頭脳派の二人はどこに行った？」

唐突にフィアとリンディがこの場にいないことに疑問を持った。その疑問にクロノが苦い表情を浮かべる。

「…艦長と商談中だと思う。」

「なんの？」

「彼に管理局員の訓練教導官をやらせたいらしい…。」

「マジか…。」

先日のフィア達の戦闘を見た新人達はその光景をアースラ全体に広め、いまやフィアやなのは達はアースラ・クルーから一目置かれた存在となっていた。特に、フィアの准将という肩書きは伊達では無いらしく、一種のカリスマ性で一部の局員達から絶大な支持を得ていた。そして、そんな彼らはフィア直々の指導を求め始め

たのである。

「あいつの使う武器…質量兵器は管理局では御法度じゃなかったのか？」

「流石に『質量兵器の使い方を教えろ』なんて輩はいなかったさ…。ただたんに彼の戦闘技術に惹かれるものがあつたらしい。もっとも、本人は渋ってたが…。」

「…圧倒的体格を持った敵をファイアが葬った姿を見て、魔力量の高い者に魔力量の低い自分達が勝利する姿を想像したらしい…。」

「…まあ、その話はもういいか。それでクロノ、お前は何か名案は無いか？」

「思いつかないな…。」

「あの…。」

すると、今まで黙っていたフェイトが口を挟んできた。その場にいる全員の視線がフェイトに集中し、彼女は一瞬ビクリと怯むが、言葉が続ける。

「一応、思いついたけど…」

フイーア s i d e

↓数刻後、海鳴市海上↓

「つまりあれか？意図的に暴走させて、出てきたところを封印する
と？」

「うん。駄目かな？」

「いや、このメンツなら大丈夫だろ。上出来上出来。」

「えへへ」

今、彼ら6人は海鳴市の海上を飛んでいた。フェイトの計画とは、
ジュエルシードが落ちているであろう海域に魔法を撃ち込み、暴走

したところを全員で封印すると言った。アースラの局員達には今回、全力で結界を張ってもらうことにした。ジュエルシード6つ分の暴走も恐ろしいが、それを止めるために撃つ彼らの魔法はそれ以上に危険なためである…。

ついに目的地に着いた6人。そこでファイアが口を開く。

「よし、段取り確認するぞ。まず上空に待機中のクロノが目標に向かつて魔法を発射。ジュエルシードの暴走を確認したらアルフとユーノ、そして俺の夜叉鴉が暴走体の動きを一箇所封じる。そこへ俺達が魔砲を撃ち込んで暴走を止めた後に封印。…質問は？」

「無いよ。」

「大丈夫。」

フェイトとなのはは即答する。しかし、ユーノは浮かない表情である。ジュエルシードの持ち主なだけあり、6つ分の暴走の威力が不安なのである。

「しかも、方法が強引過ぎる気が…。」

「気にするな。成せば成る。」

みらいは、いたって涼しい顔を見せていた。

「大丈夫だユーノ。平気だから早くアルフ達と竜巻を抑えててくれ。
【我が銘に応えよ夜叉鴉】！！」

フィアに伝えるべく、魔方陣から出現する夜叉鴉。彼らは躊躇うことなく竜巻へと突撃して行った。未だ尻込みするユーノにアルフが声をかける。

「ほら、アタシ達も行くよユーノ！！」

「ああもう分かったよ！！頑張るよ！！」

ついに腹を括ったユーノ。当初は一人でジュエルシードを回収しようとしていただけはあり、根性は人一倍あるようだ。

「頑張つてねユーノ君！！」

「なのはもね！！じゃ、先に行ってくる！！」

…もつとも、将来『不屈のエース・オブ・エース』と呼ばれる彼女には劣るかもしれないが。

《反応を解析。ユーノさん達の手により、標的が一箇所に集合しつつあります。》

「了解だリリア。さあて、俺達もやるか。【レイピア】――！」

フィーアはヴイルガロムを細身で短い剣に変え、その剣で魔方阵を書き始める。そして、魔方阵を書き終えたフィーアは剣を不思議な装飾をされた銃に変化させた。

「それでは、俺も…。（ガッチャン――！）」

みらいは銃剣オルギニスのカートリッジをロードする。すると、彼の魔力量が急増した。さらに、彼はオルギニスを回転させながら連射し、自分の周囲に16発の魔砲弾を漂わせた。

「よし、いくよレイジングハート――！全力全開でディバインバスターだよ――！」

《All right――！》

なのはのレイジングハートの先端に魔力が集中し始める。

四人から驚異的な威力の魔砲が放たれた。

- - - 魔方阵により威力を強化させた魔法の閃光
- - - 高濃度の魔力を圧縮させた16発の魔弾
- - - 純粹に高威力な桜色の魔砲
- - - 絶大な威力を持った金色の雷

それらを無慈悲なくらい一気に撃ち込まれた竜巻は、為す術もなく消滅した。残ったのは竜巻を創り出した6つのジュエルシード本体だけだった。

「よし、ユーノー!!」

ジュエルシードの近くにいたユーノに叫ぶフィア。そして、そのユーノの補助に回る夜叉鴉たち。

そして、ついに…。

「【ジュエルシード・封印】！！」

彼らは全てのジュエルシードの封印を完了させた。ようやく肩の荷が降り、6人とその様子を見ていたアースラのクルー達は安堵の表情を浮かべる。そして、エイミィから通信が入る。

『みんな、お疲れ様！！これで21個全部、回収完了だよ！！』

「あ……。なんだかんだ言って疲れた……。」

「でも、これでとりあえず安心だね。」

「ユーノくくくん！！」

嘆息するフィア、それに話し掛けるフェイト。なのはは封印を成功させたユーノの元へ飛んでいった。

この事件の全てを終わらせたと思い、この場にいる全員が気を抜いていた。故に……。

・・・ピシャアアアアアアアン！！

「ッ！？うわあああああああ！？」

「な、なんだい！？」

封印したジュエルシードを持っていたユーノと、彼の近くにいたアルフに魔法が放たれるとは誰も思っていなかった。

「ユーノ、アルフ！？・・・ッ、また来るぞ！！」

・・・ピシャアアアアアアアアアン！！

フィーア達4人は立て続けに放たれる魔法の落雷を防ぐ。しかし、やがて防ぐことに集中しすぎて3人から離れてしまったフェイトに、一本の落雷が迫った。

「しまった！！フェイトおお！！」

「・・・あッ！！」

本来ならフェイトに護衛として着けている夜叉鴉達は、さっきの封印作業の時に全部、ユーノ達に随伴させていた。…つまり、彼女を守る者が何も無い！！

「……ッ。」

その時フェイトの意識は、まるでスローモーションのようにゆっくりと、目に入ってきた光景を認識していた。自分に迫り続ける“赤紫”色の雷を正面から見つめ続けた。そして…。

……ピシャアアアアアアン！！

「かあ……さん……？」

……フェイトの目の前に現れた魔法陣から、彼女を守るように“赤紫”色の稲妻が放たれ、“赤紫”色の落雷を打ち消した。

何が起こったのか理解できぬまま、落雷の嵐が収まった。それを確認したフィーアはすぐさま、全員の安否を確認する。

「フェイト、なのは！！無事か！？。」

「うん…、母さんが守ってくれたみたい…。」

「私も、みらいさんの御蔭で…。ッ！！そうだ、ユーノ君達は！？。」

「ッ、アルフ…！？。」

「落ち着け二人とも。」

慌てて取り乱す二人を、無傷で現れたみらいが落ち着かせる。…心配御無用とはまさにコイツのこと。
するとそこへ、遠くから声が聴こえてきた。

「おゝい！！なのは…！！！」

「フェイト…！！！」

「ッ！！ユーノ君！！！」

「アルフ！！！」

無事な姿でユーノとアルフが戻って来た。どうやら二人とも、フィアの夜叉鴉が死守したようだ。だが落雷の嵐の中、ジュエルシードを奪われたらしい。

「……………すいません。ジュエルシードが……………」

「あんな奇襲があつたんだ…、しょうがねえよ。とにかく全員無事でよかったさ。」

『おい、何が起きたんだ！？』

今頃通信を入れてきたクロノ。6人はややジト目で通信端末に映る彼を睨む。渋々ながらフィアが口を開く。

「ジュエルシードを奪われた。とにかく、また攻撃されるかもしれないから一回アースラに戻る。」

『分かった。先に行つて待っている。』

そこで、一端通信を終了させた。6人は即座に帰路に着く。そんな中、フィアとフェイトは、胸中になんとも言ひ難い胸騒ぎを感じていた…。

??? side

〔時の庭園〕

「ふん、腐ってもオーバーS級ということか…。この状況で、『次元跳躍魔法』を使用するだけでなく、私の魔法を相殺するとはな…。」

「…くつ。」

大広間にて、床に倒れ伏しているプレシア。それを見下ろす“複数の黒装束”。

「貴様是我々の手の平で踊ってればよかったものを…。ジュエルシードの収集をやめ、あるうことが命がけで人形を守るようになるとは…ついに、本格的に狂ったのか？」

「あの子を…フェイトを人形なんて呼ばないで…！」

彼らの“秘密兵器”により動けなくなったにも関わらず、プレシアは男を睨みつける。だが、そんな彼女に対し、男は馬鹿にしたような視線を返す。

「…どうやら、本当に壊れたらしいな。もともと、娘が死んでからとくに狂っていたんだろ？がな……。まあ、いい。貴様には、やってもらわねばならぬことがある。」

一拍置いて男は…ネーム二佐は言い放った。

「失われた都、『アルハザード』への道を開いてもらおうか？」

第三十五話 暴かれた金色

クロノ side

「アースラ、執務官専用室」

「まさか、彼女は…。」

現在クロノは、自室でとある人物の資料を眺めていた。その資料は先程“差出人不明”の状態で、アースラに送られてきたのである。送られてきた当初は不審物故に廃棄しようとしたのだが、せめて中身を確認してからと思い、今にいたるのだが…。

「『プロジェクト・F・A・T・E』…。そして、『プレシア・テストロッサ』…。」

その資料に書いてあったのは、とある計画とそれに関わった人間の名前だった…。

「数年前に死んだ『アリシア・テストロッサ』と、今ここにいる『フ

エイト・テストロッサ』……そういうことなのか…？」

衝撃的な事実に辿り着き、クロノは驚愕する。そこへ、エイミィから通信が入る。

『クロノ君、みんな集まったよ。』

「分かった、すぐ行く。」

クロノは席をたった、その資料を片手に。

ファイア side

（アースラ、艦長室）

先程の奇襲をしのぎ、どうにかアースラに帰還したファイア達6人。しばしの休息の後、ことの報告のために艦長室へと呼ばれた。来てみると、そこにはリンディとエイミィの二人がいた。そして、まず最初に口を開いたのはリンディである。

「とにかくお疲れ様。全員無事でなによりだね。」

「ですが、ジュエルシードが…。」

ユーノが落ち込んだように言葉を返す。しかし、リンディは余裕の笑みを浮かべたままである。

「あら、心配することは無いわよ？誰がやったのかは、予想できてるわ。」

「……え？」「……」

意外なことに全員驚く。

「あの魔法は『次元跳躍魔法』。別の次元世界から魔法を直接撃ちこむ超高等魔法よ。そして、それを発明し、自由に使用できる人間は限られてる…。」

そこまで聞いてフェイトは顔を青くする。なのは達も同様である。その言葉の先に言われるであろう人物の名前が予想できたからである。そして、その予想は当たる。

「『プレシア・テストロッサ』。ミッドチルダで『大魔導師』、『天才科学者』と呼ばれていた人物よ。流石にユーノさんは知ってるわよね？」

「ええ、まあ……。」

思わず苦い顔を浮かべたユーノ。未遂とはいえ、プレシアが実質ジュエルシードの強奪をフェイトに命じた事実が管理局にバレると後々厄介なことになるので、ほとぼりが冷めるまでリンディ達には黙っていたのだ。全員でわざわざフェイトに『テストロッサ』の姓を名乗らせないようにまでしたのに……。

「……どうかしたのかしら？」

「いえ、なんでも……。」

ユーノやなのは達も内心かなり焦っているのだろうが、フィアとアルフ、そしてフェイトはそれ以上に追い詰められていた。ただでさえ、プレシアが奇襲の犯人にされそうなのに、このままプレシアのことを調べられたら……フェイトの素性が判明してしまう……。

そんな二人の気持ちを知ってか知らずか、ニコニコしながらリンディは言葉を続ける。……しかも、フィアに向かって。

「フィアさん、あなたは“どう”思つかしら?」

「…どう、って?」

「そのままの意味よ。」

(……やべえ、勘付いてらっしゃる…。)

例の『次元跳躍魔法』のせいでプレシアの存在自体は誤魔化せない……プレシア自身の魔法はフェイトを守った一発だけだと思うが……。だからといって、全部を話せばプレシアだけでなくフェイトまで口くなことにならない……。そんな葛藤に内心で頭を抱えるフィア。しかし、その間の沈黙が命取りだった……。ニコニコしながらリンデイがフィアにトドメを刺す。

「何をそんなに悩んでいるのかしら?…ああ、“プレシアさんがジユエルシードに関わっているのか否か”を迷ってるの?…私はただ、“プレシアさんの偉業を聞いてどう思う”と訊いただけなのに……。しかも、私はプレシアさんが奇襲の“犯人”とは一言も言っていない”わよね?」

「ッ!」

すごくワザとらしい口調で言われた…。よっぽど前回の交渉でフィアに負けたことが悔しかったらしく、今の彼女はとてもイキイキしていた。

「ふふふ…さあ、色々と教えてもらっわよ？」

「…負けました。」

…まあ、余計な詮索をしないことを条件に、なのは達に喋ったことと同じ内容を話してフェイトのことは伏せとけばまだ平気か…。

…だが、彼の希望はあっさりと砕けた。

「失礼します。遅れました。」

大分遅れてクロノが艦長室にやって来た。手には何かの資料が握られている。

「艦長、ひとまずこれを…。」

そう言っでリンディに資料を渡すクロノ。すると、疑問に思いつつ目を通していた彼女の表情が驚愕の色に染まっていた。そして不意に顔を上げ、フェイトを見る。… フィーアは資料の内容を察した。

「…とりあえず、今日の詳細報告は俺がする。みんなは部屋で休んでくれ。」

「え？」

「フィーアさん？」

いきなりの言葉に戸惑うのは達。その中で、フェイトだけは俯いていた。彼女もまた、クロノが持ってきた資料の内容が分かったらしい。

「…そうね、みなさんは先に休むといいわ。」

「わかりました、そうさせてもらいます。」

「エイミィ、みんなを案内してやってくれ。」

「はいはい。みんなついて来てね。」

エイミィに連れられて艦長室から出て行くフィアを除く5人。去りに際にフェイトがフィアに念話で話しかけてきた。

（フィア…私のこと、喋ってもいいよ……。）

（…いいのか？）

（うん。なのは達にも、私が自分で説明する…。）

…自分がアリシアの代わりに造られたクローンであることを…。

（正直、なのは達が私の本当のことを知ったら拒絶するんじゃないかって思うと、怖いよ…。でも、私はこれ以上みんなに隠し事はしたくない！）

（…それがフェイト自身の意思なら、もう何も言わないさ。自分の想い、プレシアさんの時のようにぶつけてこい。）

(うん！)

それを最後に念話を終了させた二人。会話の後半時には、とつくに
フェイト達は艦長室から居なくなってたが、フィーアは決意の籠も
った眼差しをなのは達に向けているフェイトの姿が見えた気がした。

(……本人があんなに前向きなのに、俺がクヨクヨしてどうすんだ
……。)

一人艦長室に残ったフィーアはリンディ達と向かい合う。自分のや
ることは決まっている……真実を晒しながらも、フェイトとプレシア
にとって最善の状況と立場を守ることだ。そのために、彼は現状一
勝一敗の舌戦を繰り広げた目の前の提督(強敵)と戦う。しかし、
その前に……。

「クロノ……、とりあえず殴らせろ。」

「……えッ？」

……アースラ全体に『ドゴンッ！』という鈍い音が響いた。

なのはside

くアースラ、休憩室く

- - - 何かすごい痛そうな音がしたの。しかも、クロノ君の悲鳴も聴こえたような…。

「…なんだろうね、今の？」

「「さあ？」」

「…。」

そんなさなか、フェイトだけはさっきから会話にも参加せず部屋の隅で座り込み、黙り込んでいた。アルフが心配そうに何度もチラチラと視線と念話を送っているのだが、反応が薄い。心配になってなのは声をかけるが…。

「フェイトちゃん、大丈夫？」

「…うん、大丈夫。」

(……全然大丈夫じゃなさそうなの……)

余計心配になったただけだった…。その時、フェイトと同じように沈黙していたみらいが口を開いた。

「原因はクロノが持ってきた書類か？」

「…うん。」

肯定。言われてみれば、クロノが例の書類の束を持ってきてからフィーアやフェイト、さらにはリンディの様子までもがおかしくなった。……あの書類はフェイトに関係することだった？…そう予想した時、とうとうフェイトが意を決したかのようになのは達と向かい合い、口を開く。

「みんな聞いて…、私…みんなに隠してることもあるんだ……。」

「フェイト、ついに言うのかい…？」

アルフが心配そうにフェイトに問う。

「うん…、なのは達にはもう隠し事はしたくないんだ…。」

「フェイトちゃん…。」

フェイトのただならぬ覚悟を感じ、なのはとユーノ、みらいはフェイトの言葉に身構える。

「あのね…私は　　。」

…その時、フェイトの言葉を遮るようにアースラ内に警報が鳴り響いた。

フイアー side

フイアーは八つ当たりに近い理由でクロノを殴って沈黙させ、リンディにことの事情を説明していた。

――主に、プレシアとフェイトの『プロジェクトF・A・T・E』との関係について。

そして、肝心の『何故彼女がジュエルシードを求めたのか』を話そうとしたその時だった。アースラの通信士から緊急の報告が入った。

『艦長！！微弱な次元震の反応が確認されました！！』

「なんですって！？場所は！？」

『現在場所を特定中！！反応は徐々にですが出力を上昇させています！！このままでは……』

「今すぐにブリッジに向かうわ。総員緊急配備！！」

『了解！！』

結局なにも説明することができず、その場をあとにした。ちなみに、クロノは気絶させたフィーアが抱えて連れて行った。

そしてブリッジに着くと（同時にクロノは投げ捨てた）、全局員が

慌ただしく動き回っていた。そんな中、フェイト達を見つけた。表情を見ると、何やら浮かない表情をしていた。もしかと思い、話しかける。

「フェイト、まさかなのは達に…。」

「ううん、違うの。話す前に警報が鳴っちゃって…。」

「…ああ、そう。」

よかったんだか悪かったんだか結局保留に…。なにはともあれ、現状を確認する。

「それで、いったいどうしたんだ？」

「どうやら、別の次元で誰かが次元震を起こそうとしているらしい…、今はまだたいしたことは無いが、ほっとけばこの世界が吹き飛ぶそうだ…。」

「マジかよ…。」

つい呻くフィア。だが、それに構わずみらいは言葉を続ける。

「ところで、さっきフェイトが何か言おうとしていたんだが…お前、何か知ってるな？」

「知ってる。けど、今回ばかりは言えねえ…。フェイトが自分で説明するって決めたんだからな。」

「…分かった。なのはとユーノも、フェイトを話してくれるのを待つと言ってたしな。」

二人に内心感謝しながら、フィアは安堵の溜息を吐いた。しかし、彼は後に語る。

『俺はとことん隠し事ができない運命らしい』と。

先程の通信士が叫んだ。

「なっ！？アースラの通信機器がジャックされました!!」

「なんですって！？…ッ！？、これは……。」「

…アースラのブリッジ内中央に存在する巨大なスクリーンにプ

レシアの姿と、生体カプセルに入れられたフェイトにそっくりな少女の姿が映し出された。

第三十六話 欲張りな死に損ない（前書き）

原作ブレイクしたツケが廻ってきた…超難産……。

第三十六話 欲張りな死に損ない

なのは side

～アースラ、ブリッジ内～

『私は、ジュエルシードを使って、失われた秘法を用いる約束の地、
『アルハザード』へ向かって娘のアリシアを蘇らせるのよ!!』

「まさか、そのためにジュエルシードを暴走させて次元震を…?」

ヨロヨロと立ち上がりながら呻くクロノを含め、その場にいる全員が驚愕の表情を浮かべながらプレシアの言葉に耳を傾け、スクリーンを凝視していた…。

突如ブリッジ内のスクリーンを乗っ取り、そこに映し出されたプレシアと謎の少女。なのは達は、フェイトらにプレシアのことを多少なり聞いていたが、この目で見るのは初めてである。しかし、彼女らが驚愕した本当の理由はプレシアの背後に映る少女である。

その少女は、謎の液体で満たされた生体力プセルに入れられ、眠るように漂っていた。だが、その様子自体は気にならない…気にする

ことができない。なにせ、その少女は…。

「…フェイトちゃん……？」

……目の前にいる自分の仲間と瓜二つだった。

この映像を見た者たちの全視線がフェイトに向けられる…そんな中、フェイトだけはプレシアが映るスクリーンを食い入るように見つめていた。

そして、プレシアが口を開く。

『もう駄目ね、時間がないわ。たった六個のロストログアでは、アルハザードにたどり着けるかどうか分からないけど…。でも、もういいわ。終わりにする。この子を亡くしてから暗鬱な時間も…この子の身代わりの人形を、娘扱いするのも！』

「…ハ？」

「…。」

その言葉にフィアとアルフが間の抜けた声を、フェイトは沈黙を返す。

なのは達や局員達はプレシアの言葉の真意が分からず混乱する。それに構わずプレシアは言葉を続ける。

『聞いていて？あなたの事よ、フェイト。せっかくアリシアの記憶をあげたのに、そっくりなのは見た目だけ。役立たずでちっとも使えない…私のお人形。』

先ほどクロノが持ってきた資料と、フィアの話により事情が多少なり飲み込めていたリンディが口を開く。

「プレシアは実の娘、アリシア・テストロッサを亡くしているの。そして、彼女が最後に行っていた研究は、使い魔とは異なる、使い魔を超える、人造生命の生成…そして死者蘇生の秘術。その名前は『プロジェクト・F・A・T・E』。その実、クローン技術の応用で死者を蘇らすというものよ…。」

「まさか…あそこにいるのは、そのアリシアって子で…フェイトちゃん…！！」

その事実になのは絶句する。その場にいたユーノや他の管理局員、みらいでさえ啞然としていた。

『よく調べたわね…そうよ、その通り。だけど駄目ね、ちっとも』

まくいかなかった。作り物の命は所詮作り物。失ったものの変わりにはないわ。アリシアはもっと優しく笑ってくれたわ。アリシアは時々我が儘も言ったけど、私の言う事をとてよく聞いてくれた。」

プレシアはアリシアとの記憶を慈しむように語る。

『アリシアは、いつでも私に優しくかった。フェイト、やっぱりあなたはアリシアの偽者よ。せっかくあげたアリシアの記憶も、あなたじゃ駄目だった…。アリシアを蘇らせるまでの間に、私が慰みに使うだけのお人形。だからあなたはもういないわ……。どこへなりと、消えなさい!!』

そしてフェイトに対する徹底的なまでの否定と拒絶。

『ふふふ、はっはっはっは…あはははは!! 良い事を教えてあげるわ、フェイト　私はずっとね、あなたの事が…大嫌いだったのよ!!』

狂ったように笑いながら言葉の刃をフェイトに突き立てるプレシア。あまりの急な展開に全員ただ呆然とするしかなかった。

いち早く我に返ったのはが、フェイトを心配して彼女の方を慌てて振り向く。あまりに残酷な真実と、プレシアによる否定と拒絶の言葉を突きつけられた彼女を…。

・・・だが、フェイトの口からとんでも無い言葉が出た。

「・・・あなたは誰？」

・・・スクリーンに映りながら狂笑し続けるプレシアに、そう言った。

フェイトside

『聞いていて？あなたの事よ、フェイト。せっかくアリシアの記憶をあげたのに、そっくりなのは見た目だけ。役立たずでちっとも使えない・・・私のお人形。』

・・・その言葉は私の心を貫ぬく筈だった。

『アリシアは、いつでも私に優しくかった…。フェイト、やっぱりあなたはアリシアの偽者よ。せっかくあげたアリシアの記憶も、あなたじゃ駄目だった…。アリシアを蘇らせるまでの間に、私が慰みに使うだけのお人形。だからあなたはもういらないわ……。どこへなりと、消えなさい!!』

…その言葉は私の心を砕く筈だった。

『ふふふ、はっはっはっは…あはははは!! 良い事を教えてあげるわ、フェイト　私はずっとね、あなたの事が…大嫌いだったのよ!!』

…その言葉は私の心を壊す筈だった。

…でも、その言葉の数々は、私の心に傷ひとつ付けることさえできなかった。何故なら…。

…私は知っている。私の真実を語ったときの母さんの“憎しみ”を。

…私は知っている。自分の想いを否定されたと感じた母さんの

“怒り”を。

- - - 私は知っている。私のことを「愛してる」と言ってくれた母さんの“想い”を。

- - - だからこそ分かる。目の前の母さん…プレシアの言葉には“何も籠められて無い”ことを。私の心に何も響かない空っぽの言葉だということが…！

- - - だからこそ問う。今、私の目の前にいる、母さんの姿をしているあなたは…

「…あなたは誰？」

フイーア side

フェイトの放った言葉は、なのは達だけでなく、画面に映るプレシアでさえ啞然とさせた。

『……な、何を言い出すかと思えば……。』

「あなたは私の母さんじゃ無い。」

『さっきから、そうだと言ってるでしょう!! あなたは私のアリシアの代わりに造った出来損な……。』

「違う、あなたはアリシアと私の母さん…『プレシア・テストロツサ』ですらない。」

『い、いったい何を……。』

段々と、空っぽだったプレシアの言葉に感情が籠められてきた。しかし、それは『憎しみ』でも『怒り』でも無い……『焦り』だ。

この場にいる全員がこの状況についていけず、混乱するなかフィアが口を開く。

「……おい、プレシアさん…これが何か分かるか？」

そう言ってリリアに立体液晶を展開させ、そこに数々のデータと画像を映し出した。

『そのワケのわからないモノが何だと言っの!?!』

その言葉を聞いたフィーアの表情が変わる。…目を見開き、歯を剥いて狂喜の笑みを浮かべた。

…獲物を見つけた獣のような笑みを…。

「…調査が足りないよ、三流。プレシアさんは、一目見ただけでコレが何なのか理解したよ?」

『…何ですって?』

「こつ言えは解るかい?…これは“彼女が目指した場所”のデータであると…。」

『なっ!!?!?!』

フィーアのセリフにプレシアが驚愕に目を見開き、リンディが反応する

「フィーアさん…まさか、それは……？」

そのリンディの問いかけへの答えを兼ねて、フィーアは喋り続けた。

「気づかなかったのかい？調べなかったのかい？確かめなかったのかい？…彼女の不治の病が完治していることを。彼女がフェイトに全ての真実を教えた上で自分の娘と認め、『愛した』ことを。……僕が第374特別調査地区…君たちが言うところの……。」

…『アルハザード』を経由してここに漂流したことを。

…フェイトとフィーアの真実が明かされたあの日。…

吐血をしていたことにより、プレシアの病が発覚。病を治そうにも、プレシアの知ってる技術では治療は不可。フィーアの魔道科学なら可能かもしれないが、治療器具も施設も無いので不可。そこで、リリアにコピーさせといた、フィーアがこの世界に来る原因となっ

た第374特別調査地区の技術データに望みをかけたのである。

指揮官（責任者）故に一応持つといったそのコピーを提示した途端、プレシアが飛びつくようにデータを凝視したのを今でもハッキリと覚えている。

そして、現場の画像をいくつか見せたら疑惑は確信に変わったらしい。今まで調べたデータた文献と一致したと…第374調査区は『アルハザード』だったと。

その後、丁度うってつけな治療魔法を発見したので、それをフェイトとアルフを含めた4人掛りで再現。それにより、プレシアの病は完治した。

そして、念のため技術データを全て確認したが、色々珍しい物や危険な魔法技術はあったものの、死者蘇生の魔法は存在しなかった。さらに、アルハザード自体が亜空間崩壊により完全に消滅したことを知り、ついにプレシアは完全にアルハザードへの未練を断ち切ったのである。

それ故、今日の前にいるプレシア（偽者確定）が喋りだした時、フイーアとアルフはプレシアが何をトチ狂ったのかと思ったが…案の定、偽者だったわけである。

『そ、そんな馬鹿な！！そんな馬鹿なことがあつてたまるものか小僧！！貴様みたいな未開の地の小僧が！！我々が追い求め続けたものを持つているだ！？』

「口調が変わってるよ?」

『ッ!?!』

慌てて口を押さえる偽者。しかし、もう遅い。なのは達も、リンデイ含むアースラのクルー達も、全てを理解し始めていた。

「別にあなた方が何を欲しがろうが、探そうが、奪おうが関係ない。ただ…、あなた方の求めたモノが僕と僕の身内に関係するモノで、それでも奪うというのなら…。」

そこで一旦言葉を切るフィーア。そして…、

「…お前から全てを奪ってやる。武器も、仲間も、意志も、心も、命も、魂も、全て。」

画面越しにもかかわらず、その言葉に恐怖を感じ、後ろに後ずさる偽者。そんな様子を見て、フィーアは冷たい笑みを貼り付けたまま宣告する。

「ああ、でも残念。そこに、『時の庭園』に居るってことは、少なからずプレシアさんに手を出したってことなんだね？…僕の身内に手を出したんだね？…じゃあ、仕方ないよね？…今から行くよ。」

…お前の全てを奪いに。

その言葉と同時に、映像と通信は切られた。完全にフィーアを恐れ たようである。…もつとも、今ブリッジにいる局員のほぼ全員がフィーアを恐れはじめていたが……。『時の庭園』の座標を渡そうとしたら涙目で受け取られた…。

だが、そんな中でも変わらぬ視線を送ってくる二人が居た。

「フェイト、アルフ…。」

「フイーア…。」

「これからどうするんだい？」

「決まってるだろ？…有言実行だ、プレシアさんを奪い返しにいくぞ。」

「…うん…！」

「そうこなくっちゃね…！」

迷いは無い。三人は知っている。本当のプレシアを知っている。だからこそ、迷う理由なんて無い。

「フェイトちゃん…。」

「…なのは。」

先ほどの急展開からようやく立ち直ったのはがフェイトに声をかける。ユーノとみらいも傍に立っていた。

「…フェイトちゃんが、さっき言おうとした隠し事って……。」

「…うん、このことなんだ。」

「…フェイトがアリシアのクローンであること。」

「…プレシアがジュエルシードを求めた本当の理由。」

「今まで黙っててゴメン…。私、なのはに謝ってばかりだね…。」

自嘲気味に笑うフェイト。それでも尚、なのははフェイトを心配そうに見る。

「そんなことはどうでもいいよ……それより、フェイトちゃんは大丈夫なの…?」

「さっきフィアも言ってたけど、私は本物の母さんに『愛してる』といってもらえたんだ…私がアリシアのクローンなのを改めて認めた上で…。だから、私はもう気にしない…私は……。」

「…『プレシア・テストロッサ』の娘、『フェイト・テストロッ

サ』なんだから。

「フェイトちゃん…。」

「だから、私は母さんを助けに行く!!」

「…だったら、私も行く!!」

「え…?」

なのはが宣言する。フェイトは無理をしてもなのは達についてきて貰おうとは思ってなかったため驚く。しかし、さらに二人…。

「じゃ、僕も。」

「俺も今更帰れるか。だいたい次元震が起こりそうなのだから、このアースラだって向かうだろ?『乗りかかった船』ならぬ『乗り込んだ船だ』。」

なのはに続いてユーノ、みらいも名乗りを上げる。出会ってまだ少ししか経ってないが、全員の絆は思ったより硬くなっていたようだ。

「みんな…。」

「すまないが、少しいいか？」

いきなり口を挟むクロノ。6人全員で彼を睨む。いい加減このKYが嫌になってきた…。

「俺がもう一回、お前を殴りたくなる前に済ませろ。」

「……。さっき君に貰った座標を特定したんだが、準備に少々時間が掛かる。」

「どのくらいだ？」

「10分。」

「遅い…。リリア!!」

《6人ですね？2分あれば充分です。》

無論、時の庭園へ行くための転移準備時間である。流石に局員全部は無理だが5人前後なら平気である。

「な！？まさか先に行くとしても言うのか！？…何が待ち構えてるのか分からないんだぞ！？無謀すぎる！！」

血相を抱えて止めようとするクロノ。しかし、それに構わずフィアはリンディに目を向ける。

「それじゃあ、リンディ提督。先行してますよ？」

「どうせあなた方は私の部下じゃないのだから、止めたって聴かないでしょ？…でも、帰ってきたら全部説明してもらっわよ？」

「御理解いただき感謝します。それじゃ、お先に失礼！！」

《転移、開始します！！》

その瞬間、フィアとフェイト達“7人”をリリアから放出された青白い光の粒子が包み、一瞬強く輝いた。…光が収まると、もうブリッジにフィア達の姿はなかった。さらに…。

「行ってしまったわね……。だったら尚更、私たちも急がないといけないわね……。エイミィ！！」

「はい！！現在、転移の準備段階は70%。あと3分で完了です。」

「まったく……。クロノったら、座標がどこだろうが転移の準備なんて10分も掛からないのよ？……クロノ……？」

「……執務官もアースラから消えていた。」

第三十六話 欲張りな死に損ない（後書き）

次回、決戦スタート。

第四十七話 決戦その1（前書き）

前座です。

第四十七話 決戦その1

ファイア side

「時の庭園、正面扉前」

時の庭園に降り立った7人。

「さて、早速突入しようかと思ったんだが……。なんで、お前まで来た？」

「……。 （返事が無い、ただの屍のようだ。） 」

着地に失敗し、頭にタンコブを作ったクロノが足元で沈黙していた。どうやら、ファイア達に近寄りすぎて一緒に転移してしまったようである。

「どうするのファイア？」

フェイトが訊いてくる。それに対し、ファイアはしばらく考えるようにして一言。

「捨てよう。」

「ふざけるな（怒）！！」

「あ、起きた。」

今の一言が原因かは解らないが、クロノが目を覚ました。

「全く…君たちは本当に無茶苦茶だ……。」

「で、あんたもついて来るのかい？」

アルフがクロノに尋ね、彼は即答する。

「当然だ。執務官として、現場を目の前にして帰るわけにはいかない。」

「…ただの石頭かと思ったら意外と熱血な部分もあるんだねえ。」

「寝めているのか、それ…？」

「おい、漫才は終了だ。…来たぞ。」

みらいの言葉に反応し、全員が視線を正面扉に向ける。そこには、騎士甲冑を纏った無数の傀儡兵がゾロゾロと現れる光景が広がっていた。

その様子にフェイトやなのは達はバリアジャケットとデバイスを展開し、緊張した表情を見せる。逆に、フィーアとみらいはどこか楽しげだ。

「さうて…。『銀河の守護霊』の本領、見せてもらおうか？」

フィーアは私服を連邦の軍服に換装する。手にはヴィルガロムが握られていた。

「貴様もな『黒鋼の不死鳥』。」

みらいは、いつだかのナイト・スーツを展開し、オルギニスを構える。

「フェイト、アルフ。あんまり離れるなよ?」

「うん。」

「わかったよ。」

迷うことなく返事をするフェイトとアルフ。

「クロノ。とりあえず、お前はなのは達と一緒に行動しろ。」

それを聴いたなのはがみらいに問う。

「みらいさんは?」

「俺は別行動だ。奴ら（傀儡兵）を引きつける。」

「「え!?!」」

「そんな、無茶だ!?!」

思わず叫ぶのはとユーノ、そしてクロノ。だが、3人をなだめたのは意外にもフィーアだった。

「大丈夫だ。アルテミアの近衛銃士隊はそういう部隊なんだ。単独で複数の敵を妨害するのが得意なんだよ。…もっとも、あんたの場合、妨害じゃ済まないだろうけど。」

「ああ、帰る頃には“殲滅”しといてやる。…だからフェイト、安心してコイツと母親を救ってこい!!」

そう言って、みらいは一足先に傀儡兵の大群に突っ込んでいった。

……ドカアアアアアアアン!!

轟音と共に、多数の傀儡兵が吹き飛ばされ、宙を舞う。そして、正面扉の周辺に空白地帯ができた。

「みらい…、ありがとう……。」

「…んじゃ、俺たちも行きますか。」

「うんー!!」

その言葉と共に6人はみらいがこじ開けた突破口へと駆け出す。そして…

「さあ…、“死に損ない”が全てを奪いに来たぞ…。」

…時の庭園へと突入していった。

ネームside

「おのれええっ…!!」

監視モニターを見ていたネーム二佐は壁を殴りつけた。

「どこまでも邪魔をおおっ!!」

ジュエルシードの暴走によりアルハザードへの道を開き始めた今、変身魔法を使い錯乱したプレシアを演じることにより、この事件の

全てをプレシアになすりつけ、全て終わる筈だった…。それがどうだ…？あの人形風情に見破られ、小僧に看破されたあげくに三流呼ばわり…。

「おまけにアルハザードのデータだと？…冗談ではない！！」

ハツタリでは無いことは、さっきプレシア本人に問い詰めたので事実だと判った。フィアが時の庭園に初めて向かったその日、ネーム二佐は勘付かれるのを防ぐため、プレシアの監視役を全て撤収させたのだ。そのため、その日に何があつたのか知る由もなかった。…まさか、一夜ににしてプレシアのアルハザードに対する執着がなくなると思わず……。

「アースラに『プロジェクト・F・A・T・E』の資料まで送ったというのに…。」

フィアのせいで詳細うんぬん抜きにして『プレシア「悪人」より、『プレシア「被害者」のイメージが強くなってしまった。

そして、フィアの言葉を思い出す。

「…私の『全てを奪う』だと？……やってみるがいい。どの道、これが失敗したら我々は終わりなのだ。」

度重なる被害に、ついに『脳味噌共』がこの計画に関心を示さなくなってきたのだ…。このままでは、この部隊の立場も危うくなる。

失敗できない。だからこそ、自分の正式な部下を“全員”連れてきた。あの科学者の“試作兵器”も貰ってきた。そして、“人質”のためにプレシアも生かしといてある。

「文字通り、私の全てを賭けてやる…。来るがいい…。『魔獣』。」

「…だが彼は気づいて無い…。用無しのプレシアを殺さず人質にするほど…自分がフィーアを恐れていることに……。」

第三十八話 決戦その2（前書き）

その4まで書くかも…。

第三十八話 決戦その2

ファイア side

（時の庭園、中間地点）

「【ブレイド】……ウオアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

……ドパアアン！！

幅10cm前後、長さ2m弱の長剣を片腕で嵐のように振るい、次々と傀儡兵を薙ぎ払うファイア。屋敷の奥から次々と湧いてくる傀儡兵だが、彼はそんなことお構いなしとばかりに暴れ回り、突き進む。

《サイス・フォーム》

「ハアアッ！！」

「ウリヤア！！」

――ガッシャアアアン！！

暴れるフィーアの取りこぼしをフェイトがバルディッシュで切り裂き、アルフが粉碎する。そんな彼女らを傀儡兵は包囲しようとするが…。

「【チェーン・バインド】！！」

「【ディバイン・シュート】！！」

「【スティングー・レイ】！！」

――ガガガガガガ！！

さらに後方で陣取ってるユーノにより拘束され、なのはとクロノにより魔法で迎撃された。

この陣形で突き進むこと数分、彼らの通った通路に動ける傀儡兵はほとんどいなくなっていた…。しかし、プレシアのもとへ急ぎたいフェイトの精神状態を感じたのか、傀儡兵を攻撃しながらアルフがフィーアに声をかける。

「ねえ、フィーア！！」

――バキヤアア――

「なんだ！？…おっと（ガシッ）、おらぁ――！」

――グシャア――！

空いている左手で接近してきた傀儡兵の頭部を鷲掴みにし、地面に叩き潰しながら返事をする。

「なのはに魔砲を撃ってもらって道を作れないかい！？」

「それは（ザンッ）、危ないって（グシャッ）、クロノが（ドゴォッ）、言ってる――！【アサルト】――！」

――バラララララララララララララ――！

先ほど、似たようなことをなのはが提案したのだが、クロノが慌てて静止した。なんでも、奴らは次元震を引き起こすために、ジュエルシードだけでなく『時の庭園』の動力炉まで使っているらしい。万が一、ジュエルシードやその動力炉に流れ弾が当たった場合、この『時の庭園』なんて簡単に吹き飛ぶそうだし――。

「でもっ!!」

「…わかったよ!! リリア、いい加減動力炉の場所、特定できたか!!?」

《お待たせしました!! 座標を送ります!!》

「おし!! 【黒羽・炎翼砲門】!!」

フィアの背中に4枚の黒い翼が生え、そこから無数の砲身が覗く。

「【換装】!!」

その言葉と共に、砲身が形を変え始めた。やがて、戦車砲の束は全てガトリング砲に姿を変えた。

「殲滅開始!!」

――ガ――――――!!

「…うわぁ。」

「なにあれ…。」

全ての砲口が火を吹き、飛び出した魔力の弾丸が傀儡兵を粉々にしていく。その光景は後方にいたユーノやなのは達にも見えた。その最中、フィーアが念話でクロノに話しかける。

（…おい、クロノ。）

（なんだ？）

（断わっておくが、一応これ魔法弾だからな？）

（…次元漂流者の君に、管理外世界で『逮捕』なんて寝言はもう言わないさ……。）

初対面の時のやり取りを気にしていたようだ。

（それにしても…、これが魔法というのなら質量兵器との違いが分からなくなってきた……。）

（…せいぜい、じっくり考えとけよ？……今後の管理局のためにもな…。）

――“質量兵器だから” 危険なのか？ “魔法だから” 安全なのか？ ってな。

そこで二人は念話を終わらせた。そして、フィアの掃討射撃により、目の前に敵は見当たらなくなった。しばし息を整えながらも進み続ける一行。途中、フィアが口を開く。

「リリアによると、ここから先は分かれ道だ。片方は動力炉に、もう片方は大広間に続く道だそうだ…。」

「母さんは大広間に？」

「多分な。あの映像は例の隠し部屋からだ。そこに奴らとプレシアさんが居ると見た…。そこでだ、クロノ。」

「ん？」

「お前らには動力炉の方を任す。」

「了解した。」

フィアに即答するクロノ。意外に感じたらしく、彼以外の5人は少し驚いた。

「母親を助けに向かう彼女に、関係ないところへ行かせるくらいなら自分で行くさ。」

「…お前のことが結構気に入ってきたぞ？」

「そうか。」

「私とユーノ君もクロノ君と一緒に？」

なのはが疑問に思い、口を挟む。

「いや、お前はこっち。」

「え！？なんで！？」

「動力炉に向かうんだぞ？尚更お前の得意技が使えなくなるだろ…。」

なのはの売りは強力な砲撃魔法である。しかし、動力炉に近づけば近づくほど流れ弾の危険が増し、下手に撃てなくなる。それに比例するように敵の守りも堅くなるだろうし、なのはは行くだけ不利なのだ。

「だからって…クロノ君だけじゃ…。」

「無茶じゃないか？」

流石に一人だけではと思い、なのはと共にユーノが心配する。

「別にそのフェレットもどきに心配されるほど、僕はヤワじゃ無いつもりだ。」

「だれがフェレットもどきだ！！」

「いつ俺がクロノ一人に行けって言った？」「お前ら”には動力炉

を任す』って言ったろ?」

「ふえ?」

するとその時…。

「オオオオオ!!」

……ドガシャアアアアン!!

雄たけびと共に、粉々にされた傀儡兵の残骸が飛んできた。そして、残骸の飛んできた方向から誰かがやってきた。それに動じず、フィアはその人物に話しかける。

「よお、そういう訳でよろしく。」

「クロノについていけばいいのだな? 心得た。」

先ほど、突破口を開くために単身突撃していったみらいがフィア達に追いついたのだった。

「ついでに外は？」

「あらかた始末しが、残りはアースラの武装隊に任せてきた。そのうち彼らも来るだろう。」

どうやらアースラの面々も追いついたようである。

「それじゃあクロノ、みらい。動力炉は任せた。」

「ああ。」

「任せておけ。お前らも気をつけろよ。」

そう言って二人は駆け出した。それを見送り、フィーアは口を開く。

「…さて、俺らも行きますかー!!」

「うん、アルフー!!」

「あいよー!!」

「私達も頑張る！！ね、ユーノ君？」

「もちろん！！」

ファイア、フェイト、アルフ、なのは、ユーノは目的地に向けて一気に走り出した。

ネーム side

「時の庭園、大広間」

ネーム二佐は、部下達と共に大広間で待ち構えていた。

システムを乗っ取り、屋敷中の傀儡兵を迎撃に向かわせたのだが、奴らはそれをものともせず突き進んでいった。途中、動力炉とこちら側の二手に別れたようで、片方はすぐそこまで来ている…。

だが、ネーム二佐の表情は歪んだ笑みを浮かべていた。

「来るなら来い…我らの精鋭（B級魔導師）15名。そして、あいつに渡してもらったコレで、貴様に引導を渡してやる。」

「…あなたには無理よ。」

意気込むネームにプレシアが冷めた口調で言い放つ。彼女は今、バインドではなく“ただの手錠”で拘束されていた。そんなプレシアの言葉をネームは手に持った“黒い物体”をその手で遊びながら鼻で笑う。

「ふ、戯言を…。現にオーバース級の貴様がそのザマなのだ。どこぞの馬の骨ともわからん小僧とて例外ではあるまい!!」

ネームは嘲笑のつもりだったが、プレシアにはネームが自分に何かを言い聞かせるようにしか聞こえなかった。――フィアなんぞ恐れてたまるものか、と…

――ガチャ、ギイッ…。

その時、大広間の扉が開かれた。大広間に居た全員が視線を向ける。そして、そこには…

「よう、初めましてだな…ゴキブリども。そして、無事でなによりだプレシアさん。」

フィーアが居た。

「母さん!!」

「ッ!? フェイト!!」

フィーアに続いて、フェイトとアルフが現れる。娘の呼びかけに、プレシアは迷わず答える。そして最後になのはとユーノが大広間に入ってきた。

それを忌々しそうに見ながらネームは口を開く。

「来たか『魔獣』…。」

「中々いい呼び方じゃねえか。満更でもないな。」

半ば憎悪を籠めた口調に、フィーアは軽く返す。

「…何故、貴様は我々の邪魔をする?」

「先日、お前の部下にも言ったが…俺は欲張りなんだよ。目の前に失いたくないと感じたモノがあったら、ほっとけない性格なんでね。」

」

「そんな“出来損ない”の人形でもか？」

その言葉にアルフやプレシア、なのはとユーノがネーム二佐を睨みつける。しかし、それに構わずフィーアは語り続ける。

「生憎、俺は…僕は、人の理を無視した“死に損ない”なんだよ…」

…フィーアの雰囲気に変化した。

「そんな僕でも、誰かを殺し、誰かを守ることができる。」

…暖かい人間味が薄れ。

「だったら、僕は戦い続けよう。殺し続けよう。守り続けよう。」

…冷たい殺気を纏い始めた。

「僕から何かを…誰かを奪おうとする奴らから、全てを奪い続けよ

う。」

「……さながらそれは……」

「だから……、僕は奪おう……君達から、なにもかも全て……！」

「……魔獣のようだった。」

「……猛り狂うように、フィーアは大広間に……戦場に駆け出した。」

第三十九話 決戦その3（前書き）

自分で書いてて、この4連コンボは容赦無いと感じた…。

第三十九話 決戦その3

みらい side

（時の庭園・最深部（動力炉））

「つうおおおらあああああああああああ！！」

……ギリギリギリギリ！！

時の庭園の最深部、次元震の原因のひとつである動力炉の暴走を止めに来たみらいとクロノ。

現在、みらいは身長10mはあろうかという特大傀儡兵を相手に鏖戦り合いをしていた。みらいの背後には、『あの体格差を無視してよくもまあ……』と思いながら動力炉と6つのジュエルシードの暴走を止めようと悪戦苦闘しているクロノがいた。

「いい加減離れろ！！デカブツ！！」

・・・ガギンツ！！・・・ズズウウン！！

力任せにオルギニスを振りぬき、傀儡兵を押し返す。巨体が鈍く、大きな音をたてながら床に倒れ付した。

「おい！！まだか！？」

「もう少しだ！！」

「仕方あるまい。【カートリッジ・ロード】！！」

「な！？こんな動力炉の近くで撃つたら・・・！！」

危険だ！！・・・と言おうとしたが、その心配は無用だった。

みらいは傀儡兵に銃口を向けずに、そのまま“突撃”していった。そして、巨大傀儡兵が上半身を起き上がらせた丁度その時、みらいのオルギニスが腹部に突き刺さった。だが、みらいは止まらない。

「ぶちまける！！【爆・太・陽・閃】！！」

同時に引き金を引く。すると、魔力の奔流が巨大兵の体を駆け巡り、内部で暴れ狂った。やがて…。

――ドパアアアアン！！

敵は内側から弾けとんだ。巨大兵を形成していた鉄が残骸となって降り注いだ。そして、それとほぼ同時にクロノが暴走を止めることに成功した。

「終わったか？」

「ああ、待たせてすまなかった。」

その時、部屋の入り口奥からガシャガシャと足音が聞こえてきた。

「…まだ来るみたいだな……。」

「いや、ちょっと待ってくれ。アレは…。」

二人のいる部屋に足音の主たちが入ってきた。だが、彼らは騎士甲冑を纏った傀儡兵ではなく…。

「クロノ執務官！！ご無事ですか！？」

アースラの武装隊であつた。全員で30人前後いた筈だったが、目の前にいるのはその半分程度である。残りはどうやらフィーア達の元へ向かったようだ。

「心配かけたが僕は大丈夫だ。それより、さつきからアースラと通信が繋がらないんだが…。」

実は、さつきから念話さえ覚束ない状態なのだ。誤ってフィーア達と一緒に『時の庭園』に来てしまった時もアースラに連絡をとろうとしたが、通信が繋がらなかったのだ。

「どうやら何者かがこの屋敷全体にジャミングを行っているようで…。その影響で通信魔法の類がほとんど駄目にされたようです。」

「転移魔法は？」

「屋敷の外に出れば問題ありませんが、どうやらそれも…。」

「…とにかく、彼らと合流するのが先決だ！！全員ついて来てくれ！！」

「『『『『了解!!』』』』」

「…おい。今度こそ来たみたいだぞ？」

通路の方から、中身を感じない鉄の足音が聞こえてきた。同時に、いくつかの爆発音が聞こえてきた。先行した局員が戦闘を行っているようである。

「クロノ、俺が先に突っ込む。お前らはその後ろに続け。」

「分かった。頼む。」

そして、言っや否や再びみらいは敵の群れに突っ込む。

「いくらでも来い!!目の前の敵は全て俺が屠る!!」

…時の庭園に魔人が降誕した。

ネーム side

人質を隣に置き、圧倒的人数差を有しながらもネーム二佐は焦燥感に襲われていた。何故なら、状況的に不利なはずの“奴”が…。

「【エストック】。」

剣の乱れ突きで沈黙させ…。

「【バズーカ】。」

砲弾で吹き飛ばし…。

「【集え黒羽・爆雷平原】。」

床ごと爆破しながら、自分の部下（精鋭）を次々と蹴散らしいるのだ。理不尽が目の前で暴れていると言ってもいいくらいだ…。

「クソッ…その男は無視しろ！！先に小娘どもを始末しろ！！」

「『了解。』」

一旦、強敵のフィアを無視してフェイト達を狙い始める。しかし、彼らはさらに非常な現実を突きつけられる…。

「なのは！！プレシアさんに当てなきゃ撃つてよし！！」

「了解なの！！【デイバイン・バスター】！！」

……ドゴオオオオオオオ！！

「……ぎゃあああああああああ！！」「……」

今のなのはの魔砲によって半数が戦闘不能に陥った。辛うじて避けた者は、今の威力を目の当たりにし、恐怖する。

「な、なんだ今の威力は！？本当に子供か！？……」「【フォトン・ランサー】！！」「ーアベシッ！？」

「くそ！！この餓鬼！！……って、速すぎる！！追いつけねえ！！」

《サイス・フォーム》

「ええい!!」

――ザンツ!!

「ぐああああ!!」

その小娘に圧倒される部下達。何発か魔法を放つものの、それはユニノとアルフに阻まれ、ほぼ一方的に倒されていった。

ネーム二佐の精鋭（笑）は管理外世界でジュエルシードの暴走体と戦い続けた彼女らに大変劣るようである。…もつとも、“ジャミング状況下に関わらず” 念話で彼女らに細かい“指示を出す存在” がいることが大きいのだが…。

「役立たず共が…、おい貴様ら、抵抗するな!! それ以上抵抗を続けたら…。」

人質であるプレシアの命は無い…と、彼は言おうとした。しかし、その言葉は続かなかった。

――言い切る前に、フィーアの膝がネームの顔面にめり込んだ。

「吹き飛ばせ!!」

「ぶおお!?!」

かなりの距離からの助走を付けた飛び膝蹴りは、フィアの人間離れした身体能力もあり、ネームを勢いよく吹き飛ばした。轟音と共に壁に衝突し、ネームはそのまま崩れ落ちた。

そして、必然とプレシアの横にいるのはフィアだけで…。

「失礼。」

――ガチャン

彼女の手錠を外すことを邪魔する者はいなかった。

「母さん!!」

フェイトがプレシアに駆け寄ってきてそのまま抱きついた。ネームの部下は全滅したようである。無論、フェイトたちは非殺傷設定を

使用し、フィーアは半殺しで留めたので死人は出ていない。

「フェイト…あなたったらこんな危険な所にまで来て……。でも、ありがとう…。」

「母さん…、無事でよかった……。」

「…KYと罵っていいから聞いてくれ。とりあえずここが危険なのは変わり無い。脱出するぞ。」

ジュエルシードと動力炉の暴走はクロノとみらいが阻止したようだが、それが無くても『時の庭園』の耐久度にそろそろ限界がきそうなのだ。どのみち危険にかわりない。

「分かった…。母さん行こう？アルフ、手伝って。」

「はいよ。ほら、肩貸しなプレシア。」

「…ありがとう。」

ネーム達に取り押さえられるときに少々負傷したようである。足元が少し覚束ない。

「……そんなプレシアが、大広間の奥の方に悲しげな視線を送ったのをフィーアは見逃さなかった」

「……フェイト!!」

「え?…わわっ!!」

《ナイスキャッチです、フェイトさん。》

フィーアがリリアを自分の腕から取り外し、フェイトに投げ渡したのだ。彼のいきなりの行動に彼女達は戸惑う。

「フィーア…?」

「フィーアさん、どうしたの?」

「いや、ちょっと気になることがあってな。すぐに追いつくからリリアと先に行っててくれ。」

その言葉に一瞬何かを迷うフェイト。しかし、彼女はフィーアを信じることにした。

「…分かったよ。でも、必ず追いついてよね？」

「まあ、フィーアだし大丈夫だよね…？」

「フェイトちゃん、アルフさん！？いいの！？」

「そういうことだ、早く行けお前ら。」

なのはとユーノはまだ迷っていたが、負傷中のプレシアのこともあり、渋々頷いた。去り際にフェイトがフィーアに声を掛ける。

「フィーア、約束だからね…？」

「おう、必ず追いつく。」

そして、フェイトも戦場と化した大広間から去って行った。やがて…。

「…おのれええええええええええ小僧おおおおおおおお
おおおおおおお!!」

雄叫びと共にネームが立ち上がった。

「よくも…よくも我らの計画をおおおおおおおお!!」

「…あえて言わせてもらおう、『ザマアミロ』。」

「てえめえええええええええ!!殺してやるうつうつうつうつうつ
うつうつうつ!!出て来い67番んんんん!!」

…ズズウン!!

天井から何かが降ってきた。それは辛うじて人の形をしているよう
だが…右腕の部分が2メートルはあろうかという巨大な機械の塊に
なっていた。ところが、そいつの顔にフィーアは見覚えがあった。

「ああ、お前か…。」

この世界にやって来て、最初に襲ってきたネームの部下である。フ
ィーアによって?ぎ取られた右腕を含め、彼に駄目にされた部分の

ほとんどを改造したようである。……その代償なのか…。

「ギイイイアイイアイイアイイファイアイアオイイ!!」

一切人語が喋れなくなったようである。かつての敵の成れの果てに、フィアは冷めた視線を送る。そんな態度にネームはまた猛り狂う…が、もう一つの切り札のことを思い、冷静になる。

「いつまでも余裕な態度をとりやがってええええええ!!…これを起動しても平気でいられるかな？」

そう言っ て黒い物体を取り出す。そして…。

「試作型携帯式“AMF”、起動!!」

それは発動された。魔法の行使を徹底的に妨害する装置、ネームの切り札、AMFにより大広間に何かが広がった。

「ふはははははは!!魔法も無しに、この戦闘機人と戦って勝てるかな!?行け、67番!!この場にいる“全員”を殺せ!!皆殺しにしる!!」

「あはっは j h j k h d ヴ あ j s d k l じゃ l s ! !」

奇妙な叫びとともに67番：機人はフィーアに飛び掛った。フィーアは軽く避けるが、フィーアの足元で気絶していたネームの部下がそのまま機人に“踏み砕かれた”。

ぐしゃり…と音をたて、血を撒き散らしながらその部下は絶命したようだ。

「…もう用無しってことか？」

「所詮、ただの無能どもだ！！代えはいくらでも利く！！やれ！！殺せ！！」

その後も機人の猛攻は続き、その度にネームの部下は攻撃に巻き込まれ、命を落としていった。せめてもの救いは、彼らが気絶していたが故に苦しまなかったことだろうか…。やがて、大広間に残っている者はフィーアとネーム、機人のみになった。

「ふ、ふふ、ふはははははははは！！手も足も出ないか『魔獣』！！自慢の質量兵器はどうした！？黒い翼はどうした！？使えないのだろう！？使えなくても使えないのだろう！？はははははははははははははははは！！」

「…………。」

「いいことを教えてやる『魔獣』！！先ほど貴様が先に逃がした小娘共…あいつらの元にも機人を向かわてあるのだ！！おまけにこのAMFと一緒になあ！！」

「…………。」

「コイツの気配を感じて先に逃がしたつもりなのだろうが残念だったな！！私の全てを奪うだ！？笑わせるな！！最後に全てを手に入れるのはこの私だ！！」

沈黙を続けたフィーアがついに口を開いた。

「…………三流が…………。」

「なんだと！？」

「君の間違いを指摘してあげよう。まず一つ目、僕は“君達から”彼女達を逃がしたわけじゃない。二つ目、僕の用がある相手は君では無い。三つ目、今僕は質量兵器を使えないんじゃない、使いたくないんだよ。」

・・・この大広間を吹き飛ばしかねないから。

「戯言を……!!」

「それと、彼女達はそのポンコツよりかよっぽど強い。」

「それは魔法が使えたらの話だ!! A M Fにより、奴らは―――!!」

「魔法に頼る人間から魔法を奪うと無力になるように……魔法を打ち消す道具を頼る人間から、その道具を奪うと、どうなるんだろぅね？」

・・・同時に、大広間に轟音が響いた。

「な、なんだ!？」

「ああ、あとさ……。僕が『A M Fで魔法が使えなくなった』って、いつ言っただけ?」

・・・手に魔力を込めながら、フィーアはそう言った。

フエイトside

フィーアと一旦別れて、屋敷の外へ向かう彼女達の目の前にソレが現れたのは突然だった。天井をぶち壊し、傀儡兵とは違う人型のなにかが降ってきた。よく見ると、それは右腕が機械的な義手になった普通の男であった。

「な、なんなの!？」

「あれは…人なのか……？」

なのはとユーノは啞然としていた。やがて、男が口を開く。こちらはフィーアの所にいる者と違い、人間らしい外見と理性が残っているようだ。

「残念だが、貴様らには死んでもらう。AMF起動!!」

魔法行使妨害領域が展開された。これにより、オーバーS級のプレ

シアもネーム達に屈したのである。

「ッ！？魔法が使えない！？」

「そんな！？」

「先ほどの戦いっぷり…実に見事だった。だが、これも仕事なのだ。悪く思っな！！」

そういつて、魔法が使えなくなり、無力化したフェイト達に駆け出す男。しかし…。

《解析完了。妨害領域、強制解除。》

「…あれ？」

「魔力を…感じる……。ッ！！アルフ！！」

「おりゃあ！！」

…バキィ！！

「ぐああー!!」

いきなりAMFの効果が消えたのである。即座にアルフに反撃され、数メートルもぶっ飛ばされる男。彼はただ驚愕した。

「ぐ…何故だ…何故AMFが!？」

《そんな骨董品でよくまあ勝てると思いましたね？舐めてます?》

リリアが冷たい口調で言い放つ。その言葉にさらなる驚愕を覚えた男は叫ぶ。

「まさか…解除したと言うのか!？そんな馬鹿なことが…!!」

《うるさいですね…。フェイトさん、準備は?》

「バッチリだよ!!」

いつのまにか詠唱を終え、大攻撃魔法を展開しているフェイトがいた。そして…。

「【フォトン・ランサー・ファランクスシフト】！！！」

[illegible]

「ぬ、おおおおおおおおお！？」

幾戦もの金色の閃光がいつきに襲い掛かった。男はそれを腕を交差させながら結界を張り、必死の形相で防ぎ続ける。

やがて、フェイトの魔法が終わった。男は辛うじて耐え切ったようである。彼は、根拠も無い勝利を確信し、笑みを浮かべる。

だが、フェイトの魔法を防ぐために交差した腕をどけて視界に入
たのは、自分と同じように笑みを浮かべて目の前に立っているアル
フだった……。そして…。

「ふん！！」

-
-
-
ガコン！！

「ぶッ!？」

綺麗なアッパーカットが決まり、男は宙に舞った。そんな彼に容赦なく攻撃が続く。

「【チェーン・バインド】!!」

男は空中でユーノの拘束魔法に捕縛された。やがて、男の耳に恐ろしい会話が聴こえてしまった。

「プレシアさん、上には危ない物はないんですよね？」

「ええ、遠慮なくやって頂戴。」

白い魔王が…なのはがイキイキとした表情でレイジング・ハートを向けていた。段々とレイジングハートの先端に集まる魔力を見て、彼は絶望するしかなかった。…やがて、その時は来た。

「全力全開!!!【スター・ライトオ……】!!!」

第三十九話 決戦その3（後書き）

次号決着。

第四十話 決戦ラスト（前書き）

今回パソコン使えなかったなので携帯投稿：何でよりによって今日なんだ……後日大修正を予定。

第四十話 決戦ラスト

ネーム side

徐々に崩壊を始める『時の庭園』の大広間の中、ネームは目の前の光景が信じられなかった。AMF領域内にも関わらず、フィアが手に魔力を纏わせ始めたのである。

「そ、そんな馬鹿なことが！？管理外世界ですらない未開の地の馬の骨風情が、何故！？」

――何故、管理局の最新技術をもととしていない！？

それに対し、フィアは語りだす。

「僕の世界…ベルフィアの歴史は戦いの歴史だ…。魔法主義者と科学主義者の長い長い戦争の歴史だ…。」

そう言っただけ魔力を纏わせた左手を掲げる。

「二つの技術は互いを殺すために進化していった。魔法は科学を殺すために、科学は魔法を殺すために磨かれていった…。その過程で…『AMF』だっけ？そんな物、“とうの昔に存在してた”よ。」

フィアの掲げた左手が魔力光で輝き始めた。

「それだけの時間があつたんだ…。使われた側も、抗う術を生み出すのは必然じゃないか…？」

フィアの光輝く左手から、いくつもの魔法陣が展開されていった。

…その数、大小合わせて“八百”。

非常識的過ぎる数の魔法陣に狙われ、いよいよ絶望感に染められていくネーム二佐。彼は勢いよく血の気が引いていくを感じた…。

だが、彼はフィーアという言葉を出す。

『質量兵器は使いたくないんだよ……大広間が吹き飛びかねないから』

「い……いいのか『魔獣』？それだけの量の魔法を放つたらこの大広間は間違いなく吹き飛ぶぞ……！？」

最後の希望に縋るようにそつ言つ。

しかし、その希望さえ……。

「心配しなくてもいいよ……剣や銃よりも魔法とは付き合いが長いんだ。鉛玉を君に一発当てるより、“これを全部君に当てる方が簡単”なんだよ？……だから、諦めてよ。」

-
-
-
笑顔で彼に奪われた。

(1, 2, 3, ..., !, ?)

断末魔を上げる暇も無く、炎鉄の弾幕に飲まれて機人は跡形もなく消滅した。

ネームはその威力を目の当たりにし目を見開くが、それも束の間、残りの弾幕は休むことなく彼に迫る。その絶望しか感じない光景に、障壁を張ることも忘れて叫ぶ。

「っ！？この…化け物がああああああああああああああああああああああ！！」

その言葉に、フィーアは自嘲気味な笑みを浮かべて答える。

「…いや、ただの“死に損ない”さ……。」

…抗う力も意志も奪われたネームは、最後に意識も奪われた。

フィーア s i d e

フィーアが大規模な魔法を放ったにも関わらず、大広間は殆ど無傷

と言って良かった。宣言通り、彼は全ての魔弾をネームと機人にのみ命中させたのである。正直言って面倒だったが、半殺しにしたネームは一応『亜空間魔法』で作った異次元に放り込んでおいた。あとでアースラに引き渡す予定である。

無論ネームが管理局員である可能性は忘れているが、今ここで殺す方が後々厄介であると判断した。

「それにしても…序盤で暴れすぎたかなあ……。」

大広間の側面には、なのはとフィーアが魔法や質量兵器で穿いた大穴がちらほらと…。

「…まあ、幸いプレシアさんがいた方向は無事だから大丈夫だろ。」

そう呟いて彼は歩きだす。

…プレシアが悲しげな視線を向けた、隠し部屋へと…。

そして…。

「…おお、良かった無傷だ。」

その部屋に佇む、フィアが『時の庭園』に残った理由であるソレに話し掛ける。

「いくら何でも、埋葬もせずにこんな場所で一人ぼっちは寂しいもんな…。」

フィアは背中に翼を生やし、やや巨大なソレをしっかりと抱える。

「…プレシアさんに偉そうに言っというてなんだけど…僕も『死者の気持ち』なんて理解できてないのかもしれない…でも『君』が家族のもとに行きたがってる』って思い込むくらいは…別にいいよね…?」

棺（生体カプセル）の中で眠りし『アリシア・テストロッサ』に囁きながら、彼は彼女と共に宙へと舞い上がる。

「…さあ、帰ろうか。」

… “眠り姫”を抱きかかえし “お人好しな死に損ない”は、彼女の家族と自分の仲間達がいる場所へと羽ばたいていった。

第四十話 決戦ラスト（後書き）

あと二話で無印は終了です。頑張ろ〜っと。

第四十一話 事後処理

フィーア side

「アースラ内・取調室」

アースラ艦内の一室で、フィーアはコーヒー片手にくつろいでいた。

「苦い……。久々に飲んでみたが、味覚はリーマスのままか……。」

崩壊する『時の庭園』からアリシアの入った生体カプセルと共に脱出したフィーアは、無事アースラに帰還した。フェイト達も機人を撃退した直後にクロノやみらい達、さらに武装隊と合流したため、全員無事だった。そして、彼らと共に外へと脱出した瞬間、屋敷が本格的に崩れ始めたそうだった。

その時、崩れゆく屋敷をプレシアはずっと悲しげな表情で見つめていたそうだった。生き返らすことを諦めたとはいえ、やはり娘の亡骸をあの場所に置いてくるのは辛かったらしい。だが、それを理由にあの場所で留まっていたのはフェイト達を危険にさらすと思い、諦めたのである。

そのためか、アリシアの亡骸を連れ帰った時は泣きながら感謝された。余談だが、誰もフィーアの心配はしてくれなかったらしい……。リアがずっとフィーアのことを探知していたので無事なことが分かる。

りきっていたとか……。

「いや、まあ死ぬ気は全然無かったから心配する必要は無かったけどさ……なんかこう、ねえ？」

「なんかって、何よ？」

いつのまにかリンディが部屋に来ていた。ジュエルシード事件自体は一応丸く収まったが、フィアが重要なことばかり黙ってたので説明を求められたのである。無駄と分かりながらも断ろうとしてみたら……。

「…………断れると思ってるのかしら……？」

「……冗談です。」

実際、喋らないとフェイトやプレシアの二人が色々と面倒なことになるので、元々事情を説明する気はあったのだが……「冗談でも言うもんじゃなかったと感じた……本気で怖かった。」

「ところで、主犯の“あいつら”は？」

ファイアが半殺しにして引き渡したネームと、フェイト達の4連コンボに撃沈したその部下のことである。二人は現在、今回の事件の首謀者としてアースラにより逮捕された。お陰で、テストロッサ親子は完全に被害者扱いになり、今は医務室でなのは達と休んでいる。

「クロノ達が尋問してるわ。でも、中々口を割らないのよね…。」

「俺の予想はどう思います？」

「認めたくないけど…あながち間違っていないと思うわ…。」

「…今回の事件の首謀者である奴らは、管理局員。」

表情に暗い影を射しながら、リンディはつぶやいた。

「局員である完全な証拠が何も無いのだけど…彼らの言動や装備からして、そう思わざるをえないのよね…。一応、局員のデータベースを調べてみたのだけど誰にも一致しなかったわ…。」「一般人と犯罪者のデータすら」ね…。」

明らかに管理世界の人間のクセして存在しない者扱いとは…何者か

が意図的にデータを抹消した可能性が高いということだ…。

「…それはいいよ怪しいですね。」

「そうよねえ…。彼らの独断なのか、上層部が命令を出したのか分からないのが余計不安だわ…。あの親子はどうしたものかしら…一旦、ミッドチルダに帰るらしいけど……。」

死者蘇生を諦めたあの日、プレシアはアリシアの葬式をちゃんとすることに決めたのである。場所は故郷であるミッドチルダですと決めていたのだが、中途半端とはいえ自分達が関わったジュエルシードの騒動が終結してからと思い、しばらく『時の庭園』に留まっていたのである。事件が終わった今、心置きなく帰れるというわけだが……現状では敵の本拠地に送り込むようなものである…。

しばらくフィアとリンディの二人は頭を抱えていたが…不意にフィアが何かを閃いた。

「プレシアさんは奴らが管理局員かもしれないってこと、知ってましたっけ？」

「いえ、それどころじゃ無かったから知らないはずよ…。それがどうしたの？」

「奴らの目的は『アルハザードの技術』…だったらくれてやればいいんですよ…リリア。」

《了解。》

そう言うとリリアからホログラムが出てきた。そして、様々な種類のデータが提示された。それを見てリンディは目を見開く。

「フイーアさん…それって……。」

「ええ、『アルハザード』の技術データです。」

偽プレシアと駆け引きした時に出した『アルハザード』の技術データである。今思えば、とんでもない内容のカミングアウトだったが、あの時は状況が状況だったので詳細を訊くことができず、そのことも兼ねてフイーアを取調室に呼んだのである。

「これを管理局に納めてください。」

「…そういつとね。」

「ええ、そういうことです。連中は“世間にバレないようにする”ぐらいの神経は持ち合わせてるようですね。目的を達成できれば、“表”の人間に関わる理由は無い筈です。」

お目当ての物である『アルハザードの技術データ』がすんなり“表”經由で自分と同じ組織に納まれば、もう“裏”で暗躍する必要も無いのだ。目的を達成した今、管理局の脅威にもならない限り表の人間であるテストロッサ親子を狙うのは、自分達の存在を隠し続けたい奴らにとっては下手をするよりリスクの方が高いのだ。

そしてフィア自身、別にこのデータが欲しいとは思っていないし、物騒なデータはプレシアと消去したので渡しても問題は無い。

「独裁国家みたいに堂々とされると無意味ですけど、あなたやクロノみたいな人が居るのなら管理局もそこまで荒れてはいないんじゃないでしょうか？」

「石頭や偏見を持った人間も多いけど、大丈夫よ。それに私も目を光らせとくわ……。」

「感謝しますよ。あ、そういえば二人の処遇は？」

「二人とも協力者で被害者よ。プレシアさんの違法研究の罪については、この事件に貢献したことで、研究データの一部提出によりほとんど減刑されるわ。……あと、フェイトさんのことなんだけど……。」

「

「ん？」

「……囑託魔導師になることを希望したわよ……。」

「……え？……わざわざ自分から……？」

「自分の魔法の才能を使いながらこれからも人の役に立つことを続けたいそうよ？」

それを聞いてフィアは頭を抱える。それがフェイト自身の意志なら尊重してやりたいが、限りなくグレーな組織にフェイトを所属させていいものか本気で悩んだ。だからと言って、下手に管理局への疑惑を吹き込んだら奴らに目をつけられるかもしれない……。

頭を抱え、俯きながらそんな葛藤に悩むフィアにリンディが声をかける。

「……いつそのことベルフィアに連れて行きたいかしら？」

「そうですね、その方がまだ安心できますよ。」

「でも帰れないんでしょう?」

「ええ、いい加減に“誰かしら迎えに来て欲しい”もんですよ。……? ……!!?」

フィアはリンディの問いかけにそう答えた。答えてしまった。フエイトのことを考えるあまりに、そう答えてしまった。俯いていた顔を恐る恐る上げると、リンディが満面の笑顔でこちらを見ていた。

「“次元震で消滅した筈の世界から”迎えなんてくるのかしら? ……フィアさん?」

「え…あ…いや、その……。」

…連邦と管理局を接触させないために、嘘をついていたことを一瞬忘れていた…。

「さあ、『OHANA SHI』しましょうか…?」

「…はい。」

……ファイアいわく、なのはと違い物理的なものではなかったが、リンディの『O H A N A S H I』は精神的に来るものがあったそうだ…。

ネームside

くアースラ内・取調室その2く

ファイア達とは別の取調べ室、そこにネーム二佐はいた。彼は今、拘束され単身でその部屋にいる。アースラの局員による尋問が一区切りし、ネームを一人部屋に残し、尋問官は退室している。

『時の庭園』が崩壊したことにより、証拠や痕跡はどうにか残らなかった。なので自分達が管理局の暗部である事実はまだ判明していない。自分達はこのまま連行されるのだろうか…だが、どうせ自分達の巢に戻るようなものなのだ…なんてことは無い……監獄送りになってもこき使われるために即釈放である。

「……牢獄に送られようがすぐに出てきて貴様らを…ふ、ふふふ…ふはははははははははは…。」

――皆殺しにしてくれる…。

娘を失い廃人寸前のプレシアをアリシアの声を聞いて惑わすところから始め、アルハザードへの興味を持たすためにあらゆる裏工作をしてきた。計画に使用するための世界も探した。次元震を巻き起こすためのロストロギアをみつけた！それをスクライアー族に拾わす工作もした！！その輸送船を事故に見せかけて襲撃までした！！！それをプレシアに集めさせるように仕向けた！！！！

その今までの苦勞を全てあの男は…フィーアは台無しにしたのだ！！！！

「このまま終わると思うなよ…？…『魔獣』。ふはははははは！！！」

自分の計画を邪魔したフィーア達に復讐する未来を思い浮かべ、ネームは歪んだ笑みを浮かべた。もはや彼に暗部としての自覚はほとんど無かった。

――だがしかし、その未来が来ることは無かった。

- - - ネーム二佐とその部下が絶命しているのをアースラクルーが発見した時には、すでに死んでから5分が経過していた。どういうわけか、彼が苦しんでいる間は誰も取調室の付近におらず、彼らの最後の断末魔を聴いた者は居なかった…。

第四十一話 事後処理（後書き）

次回無印最終話。話が長くなったのでA、S編は別タイトルで書きます。

エピソード（前書き）

ここまで読んでくださった皆様、ありがとうございました！！

エピソード

ファイア side

〔海鳴市・とある公園〕

今、ファイアとみらいは公園のベンチに腰掛けていた。隣ではクロノが立っている。

3人の視線の先には別れの挨拶をしているフェイトとなのは達がいた。フェイトとアルフ、プレシアはミッドチルダに帰り、ファイアやなのは達は当然この世界に残るのだ。今生の別れというわけではないが、当分会えないということに変わりなく、やはり寂しいし悲しいのだ。

「…正直、お前も寂しいんじゃないのか？」

「当たり前だろが。」

みらいの問いに即答するファイア。ぶつちやけた話、女の子の別れにムサイ大人が混ざるのは気が進まないと言いつたが、悲しくなるから逃げただけである。クロノはフェイト達の付き添いである。

「管理局からしたら俺ってロストログアみたいなもんだしな……ミッドチルダには行けないし…。」

「質量兵器生産人間だもんな。…おまけに同盟世界のこともあるしな。」

先日、リンディに洗いざらい吐かされたことを言ったら、みらいに殴られた…。幸い、連邦と管理局の接触に対する懸念はリンディも考えていたようなので黙っていてくれるそうだ。代わりに、局員の仮教導官の件を飲まされたが…。

「いいのかクロノ？質量兵器の塊が教導なんてして…。」

「場所は管理外世界を選ぶから問題ない。むしろ、質量兵器との戦いを経験することはなにかと得るものがあるはずだ。」

「そうか…。お？終わったみたいだな。」

別れの言葉をすませたフェイトがこっちに來た。

「フィーア…また、会えるよね……？」

「当然だろ？俺から会いに行くことはできないが…いつかフェイトが会いに来てくれ。」

「うん…。ビデオレター、送るからね。」

「おう、ちゃんと見るぞ。」

「……ファイア…。」

「ん？」

「…本当に、ありがとう。」

「…私を…母さんを…みんなを救ってくれて…。」

「…どういたしまして。ミッドに行っても、元気にやれよ？…そして、またこの海鳴市でなのは達と集まろうな？」

「うん、必ず会いに戻ってくる。」

フィアとフェイトは互いの手を握り、しばしの別れを告げた。そして、改めてなのは達を含めた全員に別れを告げ、彼女は家族と共にミッドチルダへと帰っていった。

……フィアが寂しくなってこっそり泣いていたのは秘密である。

みらい side

〽八神家にて〽

のそのそと歩きながら、みらいは今の八神家に帰ってきた。

「ただいま〽。はやて〽帰ったぞ〽。」

「おかえり〽。みらいさん、どうやった？」

「フィアの奴、泣いてたぞ？」

「ほんまか…。以外と涙脆いんやな…。」

みらいはジュエルシードに関わると決めたその日、隠し事をされるのが嫌いなはやてに事情を全部話した。そのため、みらいが関わった人間についてもある程度聞いている。もっとも、危険なので事件が終息するまで接触は禁止にしたが…。

「なのはちゃんは『翠屋』に行けば会えるんやけど…フェイトちゃんか…。」

「ビデオレターでやり取りするらしいから、その時に便乗するのはどうだ？」

「それや…！」

話だけでしか聴くことができなかった友達候補との交流に思いを馳せ、顔を綻ばせるはやて。

「『翠屋』で思い出したが…はやての誕生日ケーキはそこに頼んでいいか？」

「ええよ、むしろウェルカムや。…って、みらいさん。そう言うの

はサプライズするために黙っとくもんやで？」

「お前隠し事されるの嫌いじゃないか。」

「それはそれ、これはこれや。そんな石頭やから老けるんやで？」

「やかましい。」

その時、ベランダから誰かが入ってきた。

「よー！！ミランー！！」

「この馬鹿猫おおおおおー！！」

「え？にゃあああああああああああああ！？」

八神家に侵入した人物…『リーゼアリア』にみらいは飛び掛った。

「あれほど俺の本名を書くなっって言っただろがあああああー！！」

「清書したのは『ロッテ』だよ!？」

「…ひょっとして、みらいさん例の黒歴史？」

はやての言葉にみらいはorz状態になった。それを見てアリアが
呟く。

「…アースラの船員って基本お喋り好きだから、すぐ広がるね。」

「みらいさん、ドンマイや…。」

「…ちきしょーーーーー!!」

…本棚からその光景を、騒がしいくらい賑やかなその光景を、
鎖で縛られた“二冊”の本が見守るように眺めていた。

フイア s i d e

く海鳴市のとある路上く

フェイト達と別れを告げこつそり泣いた（みらいにはバレてた）あと、フィアはとりあえず寢床にしているマンションに向かって歩いていった。

「…ハア。改めて、どんだけフェイト達と一緒にいたか思い知らされるな……。まあ、いつかまた会えるし、今は我慢するか…。」

いつもなら隣にフェイトかアルフが居て、3人で喋りながら歩いたものだ。今は一人虚しくトボトボ歩いてるだけである。

《私は人数に入らないんですか？》

「一緒に居すぎたせいで最早居て当たり前に感じる…。」

でも、本音を言えばリリアの存在は心から嬉しい。本当についてきてくれたことには感謝している。またコント染みたやり取りでもして気を紛らわそうと思ったその時…

『ミヤアオ。』

足元からそんな声が聴こえた。視線を下にやると…金色染みた毛並

みの猫が居た。心なしか“フェイトの金髪と全く同じ色に見える”
その猫は、フィアの足元に近寄り、頭をすり寄せた。

フィアはしゃがんで猫を撫で始めた。猫は気持ちよさそうにゴロゴロ言い始めた。

「ヨシヨシ、可愛い奴だな。首輪は…付けてないな……。野良か？
それにしては毛並みがいいな……。ん…？」

……フィアは気づいた、その猫の尻尾が“二又”であることに…。

「……ベルフィアにも居たらしいが、本物は初めて見たよ…。」

《妖怪『猫又』ですね。》

驚いたものの、そんなに恐れるほどでもないので猫を愛で続けるフィア。人外や化け物にはもう会い慣れているのだ、今更ビビルことは無い…のだが……。

「よし、連れて帰ろう。」

――喋るわけが無いと思い、冗談で言った言葉…。

「お前、名前はなんて言うんだ？」

――それに対する返事は…

『アリシア・テストロッサです。』

「……え？」

……とびっきりの衝撃発言だった。

《まだ厄介事は続くんですね？わかります。》

「漂流者は守護者兼保護者『ヤテンノオヤコ』」に続く。

エピソード（後書き）

なんか無理矢理終わらせた感が否めないですけどここで一区切り。
次に続きます。皆さん、御愛読ありがとうございました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0721x/>

漂流者はハイブリッドな現役将校～オヒトヨシナシニゾコナイ～

2011年11月24日15時50分発行